第36回　神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨

2012年11月17日（土）　於：横浜市歴史博物館

主催　神奈川県考古学会
共催　横浜市歴史博物館
後援　神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会・
川崎市教育委員会・相模原市教育委員会・
公益財団法人かながわ考古学財団

開 催 要 項

開催日：2012 年 11 月 17 日（土）・ 会 場：横浜市歴史博物館 講堂

10：00～10：05　開会挨拶　神奈川県考古学会 副会長　中村若枝

調査・研究発表

10：05～10：35　相模原市　小倉原西遺跡

公益財団法人 かながわ考古学財団　渡辺　外 氏

10：35～11：05　寒 川 町　岡田西河内遺跡

有限会社 吾妻考古学研究所　小林克利 氏

11：05～11：15　休憩

11：15～11：45　伊勢原市　高森・宮ノ越遺跡 第３地点

株式会社 盤古堂　小池　聡 氏

11：45～12：15　横須賀市　八幡神社遺跡

横須賀市教育委員会　中三川昇 氏

12：15～13：30　昼休み

13：30～14：00　小田原市　永塚北畑遺跡 第 XI 地点

小田原市文化部文化財課　土屋了介 氏

14：00～14：30　鎌 倉 市　大倉幕府周辺遺跡

有限会社 鎌倉遺跡調査会　齋木秀雄 氏

14：30～15：00　川 崎 市　下作延巳ノ谷遺跡 第８次調査

有限会社 吾妻考古学研究所　大坪宣雄 氏

15：00～15：10　休憩

15：10～15：40　伊勢原市　上粕谷・石倉中遺跡

公益財団法人 かながわ考古学財団　天野賢一 氏

15：40～16：10　小田原市　小田原城 三の丸幸田口跡 第Ⅶ地点

株式会社 玉川文化財研究所　太田雅晃 氏

16：10～16：40　横須賀市　小原台堡塁跡

公益財団法人 かながわ考古学財団　齊藤真一 氏

16：40～16：45　閉会挨拶　神奈川県考古学会 会長　岡本孝之

＜図書交換会＞　時 間：10：15～15：15　会 場：横浜市歴史博物館 研修室

目　次

1．相模原市　小倉原西遺跡 …… 3

2．寒 川 町　岡田西河内遺跡 …… 9

3．伊勢原市　高森・宮ノ越遺跡 第３地点 …… 13

4．横須賀市　八幡神社遺跡 …… 19

5．小田原市　永塚北畑遺跡 第 XI 地点 …… 23

6．鎌 倉 市　大倉幕府周辺遺跡 …… 29

7．川 崎 市　下作延巳ノ谷遺跡 第８次調査 …… 34

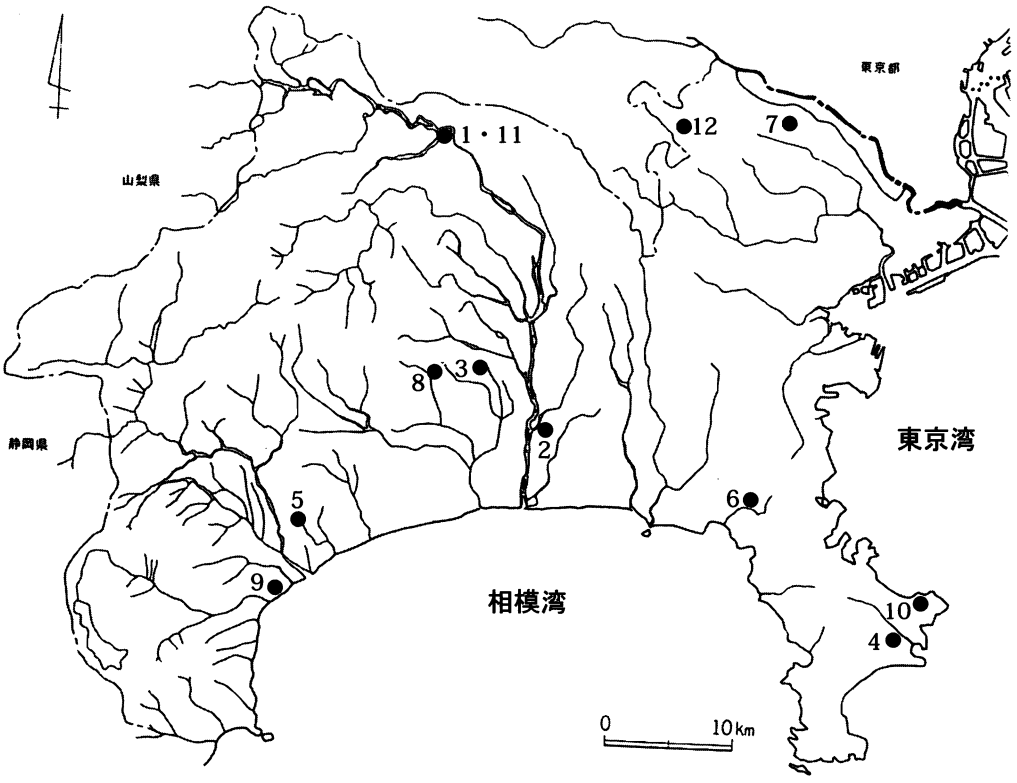
8．伊勢原市　上粕谷・石倉中遺跡 …… 40

9．小田原市　小田原城 三の丸幸田口跡 第Ⅶ地点 …… 46

10．横須賀市　小原台堡塁跡 …… 52

11．〔紙上発表〕相模原市　小倉原西遺跡 …… 57

12．〔紙上発表〕川 崎 市　上麻生日光台遺跡 第Ⅳ地区 …… 63



図中番号は上記調査・研究発表の目次頭の番号と一致

相模原市　小倉原西遺跡（おぐらはらにし）

― 旧石器時代ナイフ形石器製作址の調査 ―

渡辺（わたなべ） 外（がい）

所 在 地　相模原市緑区小倉地先
調査機関　公益財団法人 かながわ考古学財団
調査担当　渡辺 外・渡辺清史・近藤匡樹
調査原因　国道 468 号 (さがみ縦貫道路) 建設に伴う発掘調査
調査期間　2010 年 11 月 16 日～ 2012 年 1 月 31 日
調査面積　約 5,776 ㎡

第 1 図　調査位置図（1/50,000）

1．遺跡の立地

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である小倉原西 (相模原市№ 283) 遺跡の西端部分に該当する。

遺跡は県域の北西部、ＪＲ相模線・横浜線橋本駅の西約 5 km 程の地点に位置し、地形的には相模川右岸の河岸段丘上に立地している。調査地の標高は海抜 120 ～ 123 m を測る。

2．調査に至る経緯と調査経過

調査地は、さがみ縦貫道路と津久井広域道路との交差地点に該当する、旧城山倶楽部ゴルフ場の一部と、県道 510 号 (長竹・川尻線) を挟んだ南側の一画を含む範囲である。神奈川県教育委員会が試掘調査を行った結果、試掘坑 13 箇所のうち約半数程度で遺構・遺物を確認し、調査地全体に埋蔵文化財が残存しているものと判断された。この結果を基に開発主体者と県教育委員会で協議を行い、対象範囲全体について埋蔵文化財発掘調査が必要となった。県教育委員会では、調査組織としてかながわ考古学財団を推薦し、考古学財団が当該地の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は 2010(平成 22) 年 11 月から開始し、最終的な全体調査期間は 14.5 ヶ月となった。平成 22 年度は、調査範囲のうち 1,861 ㎡を、平成 23 年度は残り 3,915 ㎡を対象に、2012(平成 24) 年 1 月 31 日までの期間で現地での発掘作業を実施した。

3．調査の概要

小倉原西遺跡の発掘調査では、時代の古い方から順に旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、近世の遺構と遺物を確認している。

旧石器時代

遺跡の北側、相模川に面する緩斜面上端部において、相模野台地における第一黒色帯 (所謂Ｂ 1 層) 相当のローム層中から、石器集中地点 2 箇所と礫群 4 基を検出している。石器集中地点のうち 1 箇所は 4 つのブロックに分かれ、全体としては 5 つのブロックを確認することができた。

遺物はナイフ形石器や槍先形尖頭器、削器のほ

か、石器製作時に生じたものとみられる剥片類が出土している。石器集中地点2箇所は、東西それぞれで石器の構成岩種が明瞭に分かれ、西側は黒曜石を、東側は凝灰岩を主体としている。黒曜石製の石器・剥片類は400点以上、凝灰岩製の石器・剥片類は600点近く出土しており、出土品等整理作業の過程で、利器と剥片の接合例を含めた、合計89点の接合資料を確認することができた。

ブロック間での接合例も多数みられ、ほぼ同時期に複数箇所での石器製作が行われたことが明らかとなっている。

縄文時代

竪穴住居址2軒、土坑214基、ピット243基、集石3基、埋設土器1箇所を検出した。

埋設土器は後期堀之内式のもので、そのほか遺構外を中心に、早・前・中・後期の土器深鉢破片や、石斧・磨石・敲石・石鏃等の石器が出土している。

奈良・平安時代

土坑25基、溝状遺構3条、ピット15基を検出した。土坑は不定形のものが多数認められる。遺物は僅少で、土師器坏・甕の細片が出土した。

近 世

竪穴状遺構3軒、掘立柱建物址1棟、柱穴列5条、土坑321基、溝状遺構14条、畝状遺構4箇所、土坑墓12基、ピット37基を検出した。

遺物は18世紀代以降の肥前系陶磁器類を中心とした破片が多少出土しているほか、古銭や煙管などの金属製品も僅かにみられる。

4．まとめ

本調査地点の中央～東側にかけて隣接するＡ５地区では、2011(平成23)年度に相模原市教育委員会が発掘調査を行っており、旧石器時代の遺物を発見している。また西側に隣接する津久井城跡馬込地区でも、本調査地点と同じＢ１層相当の資料を含む石器群が出土した。小倉・原地区一帯の北側端部で検出した石器製作址群が、当該期の遺跡群においてどのような役割を果たしたのかということについては、今後の出土品等整理作業の中で検証を重ねていきたい。

また本調査地点の東約150ｍの地点では、1980(昭和55)年12月に畑地の農道脇で縄文時代の敷石遺構が発見され、当時の地元自治体である城山町の教育委員会が発掘調査を行っている。この調査の結果、当該遺構は縄文時代の敷石住居址の一部であるものと推定され、周辺からは中期後半～後期の土器破片が出土している。本調査地点の事例の一部と同時期ではあるが、遺構の様相は異なっており、小倉原西遺跡や周辺遺跡の事例を含めて概観すると、小倉・原地区一帯には縄文時代中期～後期の集落が存在し、本調査地点はその西側外縁部にあたるものと推定される。当該集落の全体像を解明するにあたり、こうした地点毎の相違をどのように評価するかは、今後の出土品等整理作業における重要な課題の一つであるものと考えている。

参考文献

城山町教育委員会・文化財保護委員会 1980『城山町小倉・原配石遺構調査報告』城山町

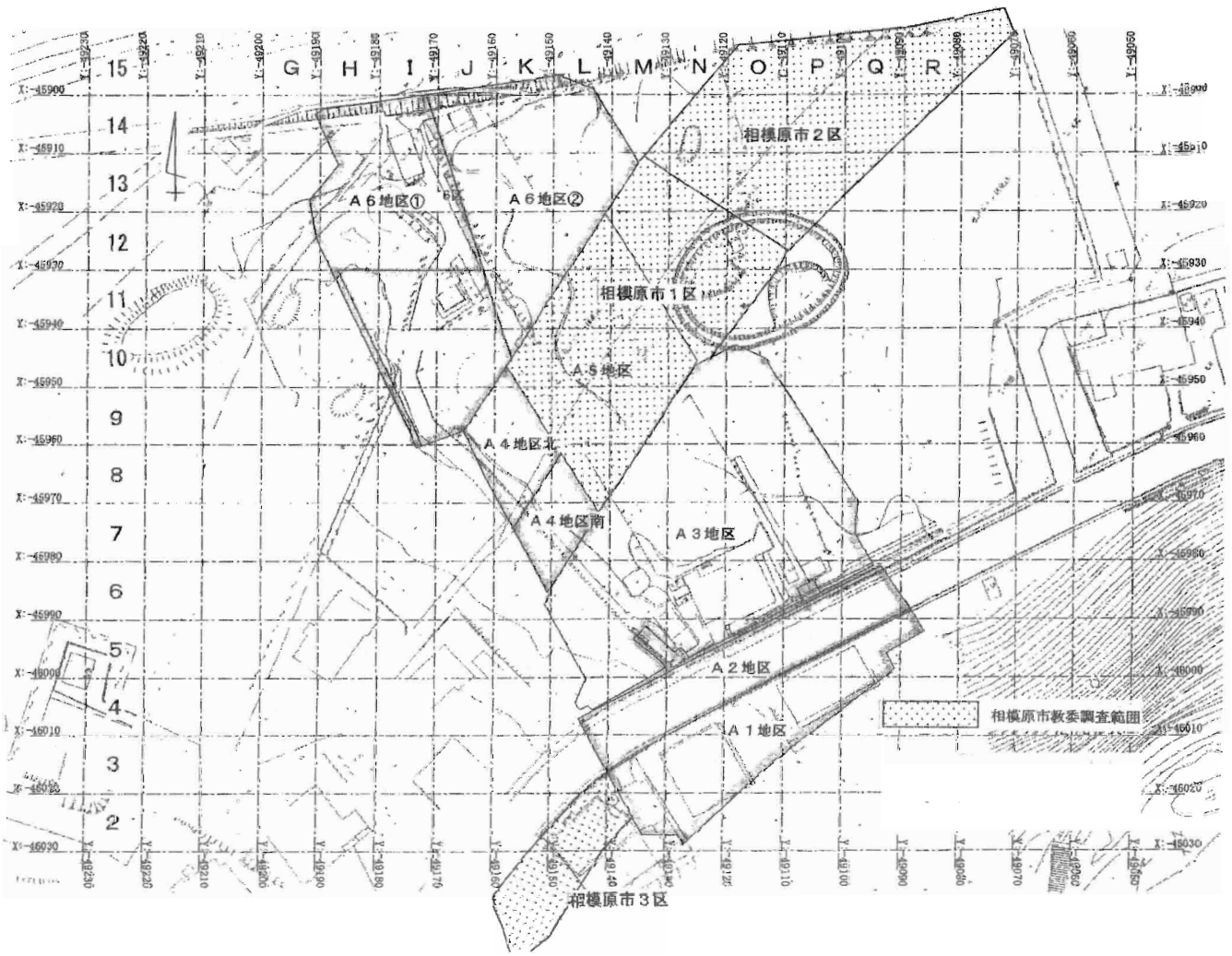
津久井郡文化財調査研究会 1984『津久井郡文化財』史跡・埋蔵文化財編　新津久井地域広域市町村圏計画推進協議会

大貫英明ほか 1992『城山町史』1資料編　考古・古代・中世

大貫英明ほか 1995『城山町史』5通史編　原始・古代・中世

天野賢一・櫻井真貴 2000『原東遺跡　県道510号(長竹川尻線)新小倉橋新設事業に伴う調査報告1』かながわ考古学財団調査報告79

畠中俊明・櫻井真貴ほか 2010『津久井城跡馬込地区津久井広域道路建設事業に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告249



第２図　調査区配置図（１/１,200）

写真１　Ｊ１号埋設土器

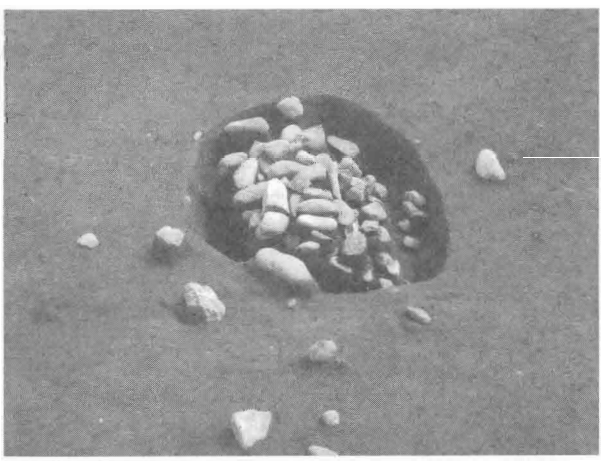
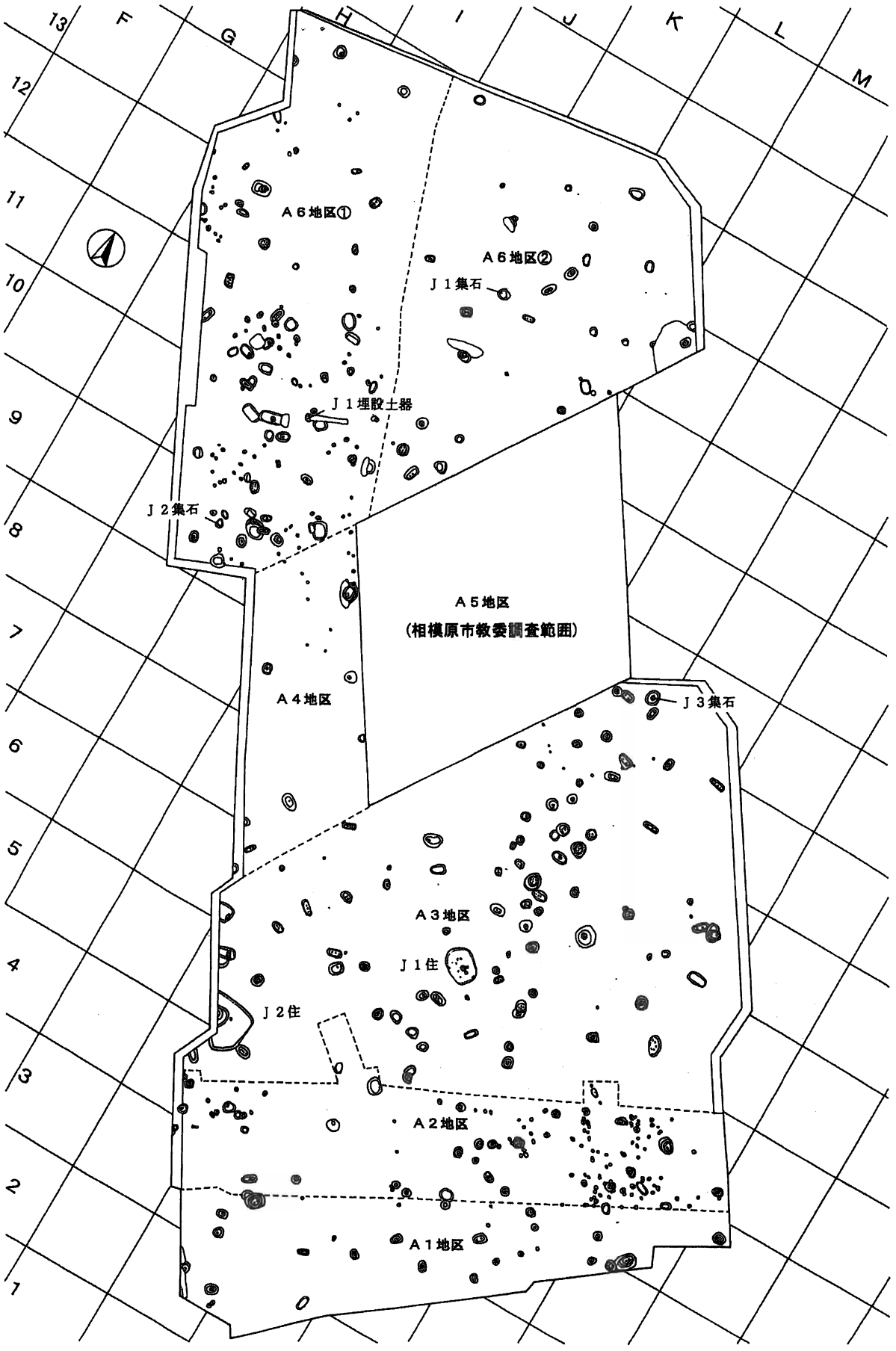
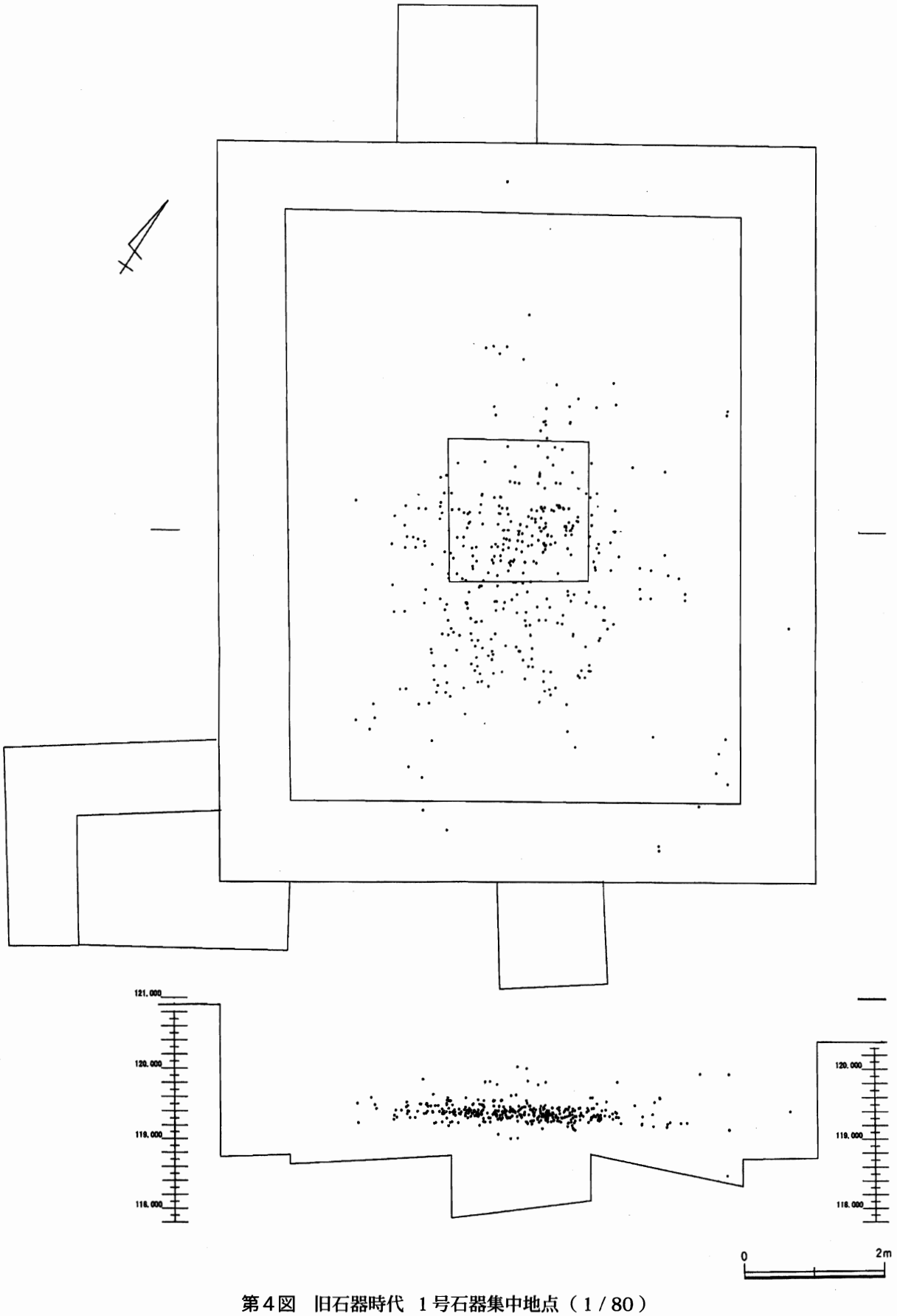


写真２　縄文時代 集石

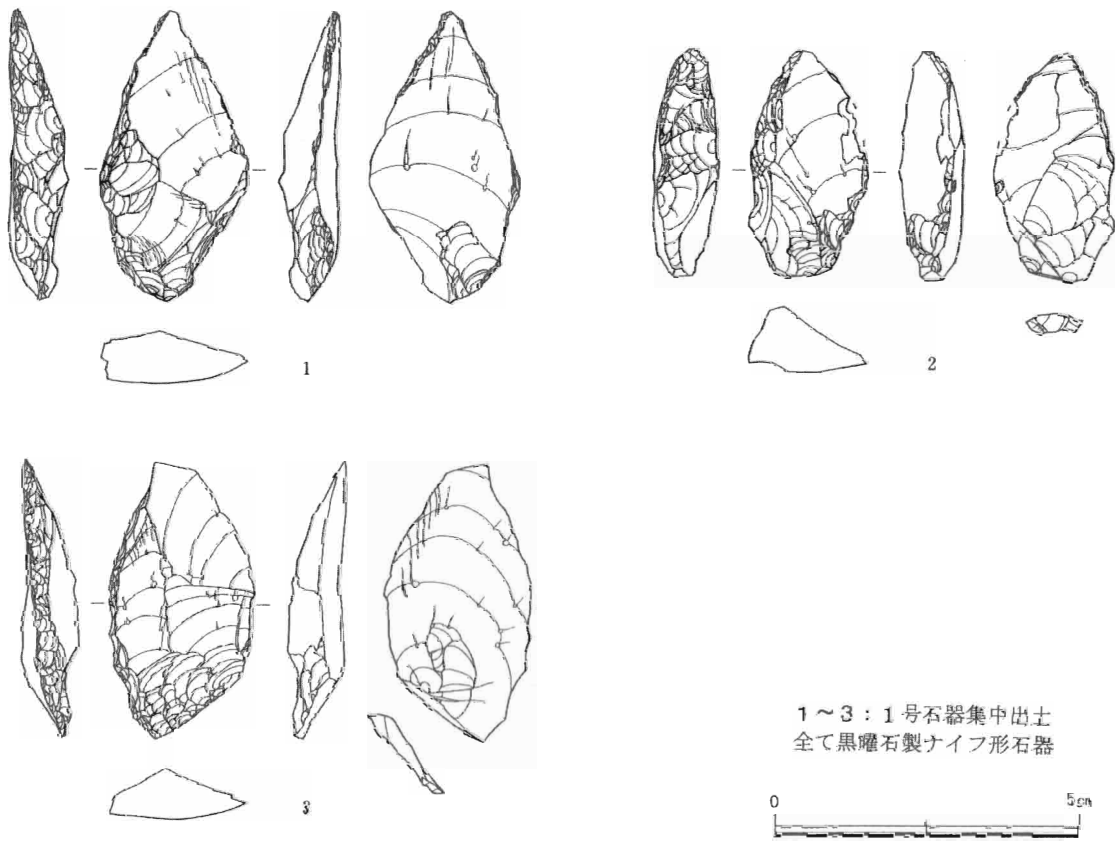


第３図　縄文時代遺構全体図（１/600）

0　20m



第４図　旧石器時代　１号石器集中地点（１/８０）



第5図　旧石器時代 出土遺物（4/5）

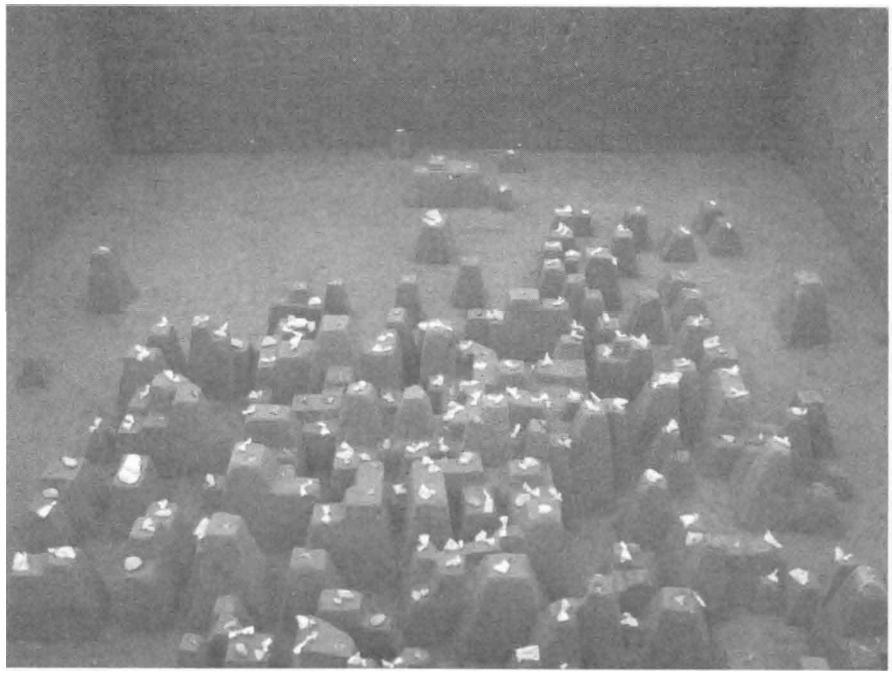


写真3　1号石器集中 遺物出土状況

寒川町　岡田西河内遺跡

― 弥生時代の集落跡 ―

小林 克利・横山 太郎・杉本 靖子

所 在 地　寒川町岡田 96-1・外
調査機関　有限会社 吾妻考古学研究所
調査担当　小林克利
調査原因　土地区画整理事業
調査期間　2006 年 1 月 16 日～ 2011 年 6 月 3 日（中断期間あり）
調査面積　10,740 ㎡

第 1 図　調査地位置図（1/25,000）

1．遺跡の立地

岡田西河内遺跡（寒川町 №68）は町域の中央部に位置しており、北東側から張り出す舌状台地南西端に立地する。南側は目久尻川と小出川に挟まれた氾濫平野となっており、遺跡の標高は台地裾部で 10 m前後、上部で 15 m前後を測る。周辺には 5 世紀代の前方後円墳である大（応）神塚古墳（寒川町 №8）や、その周囲に展開していたとされる古墳時代後期の円墳群がある。

2．調査に至る経緯と調査経過

本遺跡の発掘調査は、寒川駅北口地区土地区画整理事業に伴うものである。本遺跡はこの事業区域の北端部に位置しており、遺跡範囲全てが事業地に含まれることから、寒川町教育委員会による埋蔵文化財の有無と遺跡範囲の確認を目的とする試掘調査を経て、平成 17 年から平成 23 年にかけて断続的に本格調査が実施された。第 1 次調査は遺跡範囲北東側の低位面で実施されており、弥生時代～古墳時代の土器片が出土し、中世以降の地下式坑・溝状遺構・室状遺構等が調査されている。第 2 次調査では遺跡範囲北西側の低位面で弥生時代の溝状遺構や中世以降の段切り状遺構等が検出されている。その後の調査では、弥生時代の住居跡 74 軒、方形周溝墓 6 基、溝状遺構 11 条、土坑 6 基、古墳時代の住居跡 3 軒、高塚古墳 2 基、中世～近世の道状遺構 1 条、堀状遺構 1 条、地下式坑 3 基、溝状遺構 15 条、井戸跡 3 基等が確認されている。

3．調査の概要

弥生時代集落

当該時期の遺構が検出された範囲は東西 120 m、南北 150 m前後に及んでいるが、全容を調査できたのは全体の半数前後である。調査区域内では環濠等は確認されていない。住居跡には弥生時代後期及び時期不詳の住居が含まれるが、それらをのぞく 62 軒は弥生時代中期後葉の宮ノ台式期に属するものである。また、該期の遺構として方形周溝墓 6 基と通称「尾状溝」と呼称される端部が住居跡と重複する溝状遺構も確認されている

が、ここでは竪穴住居と方形周溝墓を中心に見ていくことにする。

上記の竪穴住居跡62軒のうち、出土遺物などから時期の細別が可能な49軒を抽出し、土器の検討に当たっては、相模湾沿岸（Ｓａ）地域のⅠ～Ⅵ期区分（安藤　1991・1996）と、秦野市砂田台遺跡のⅠ～Ⅴ期区分（宍戸　1992）を参考にした。ただし、時期の認定はＳａ編年に準拠したが、明確な考察に基づいて対比したものではなく、あくまでも本遺跡における遺構の変遷を把握するための目安として当てはめてみたものである。本遺跡では竪穴住居と方形周溝墓の分布が見かけ上で重なり合っており、該期の遺跡として著名な横浜市の大塚・歳勝土遺跡のように集落と墓域が画然と分離する状況とは異なっている。方形周溝墓を軸にして集落の変遷を捉えると、方形周溝墓は三つの異なる有り方を示しているように思われる。第１の有り方は、１・２号墓に見られるように終始居住域から離れた位置に展開するもの。第２の有り方は３・４・６号墓の状況であり、居住域の外縁付近に作られ、墓域としての境界が判然としないもの。第３の有り方は、５号墓のように集落の初期の段階に作られ、その後長くその地点が墓として意識され続けたと見られるものである。

弥生時代の石器・石製品

本遺跡から出土した石器・石製品は総数480点を数える。器種別では磨製石斧が未製品を含め79点、磨石94点、敲石84点、有孔石器59点が出土し、これ以外にも数多くの石器が出土している。これらの内、打製石器・磨製石斧・有孔石器についてみていきたい。

24号住居跡から打製石器が出土している。Ｄ号墳周溝との重複部分から検出されているため、確実に24号住出土とするには躊躇せざるを得ないが、二上山（にじょうざん）産サヌカイト製（藁科2012）の打製短剣（杉山浩平氏（東京大学）の御教示による）と考えられる。磨製石斧の内訳は小型方形柱状片刃石斧７点、抉入柱状片刃石斧２点、扁平片刃石斧30点、太型蛤刃石斧４点、不明４点、未製品32点である。扁平片刃石斧は未製品を含め大形・中形・小形に大別された。殆どが在地系と考えられ、素材の形状を残したまま、研磨される特徴を持っている。太型蛤刃石斧の内、２点は片側面に抉入柱状片刃石斧の主面と同じ抉入部が形成される特異な形状を呈している。大きさは長さ13㎝を超え、太型蛤刃石斧のなかでは中形の製品である。石材（変質ﾊﾝﾚｲ岩）からみて２点とも搬入品と判断される。

有孔石器は環状石錘、環状石器とも呼称されているが、ここでは円～楕円形を呈する礫の中央に貫通孔のある製品、及び製作途中のものも含めて有孔石器と仮称しておきたい。石材には主に富士玄武岩を用いている。Ⅰ類（中央孔貫通後、研磨される）、Ⅱ類（敲打により中央孔が貫通）、Ⅲ類（表裏両面からの敲打により凹部を形成するも中央孔不貫通）に分類し、有孔石器の素材と考えられる磨石も含め大きさの細分を行ったところ、大形・中形・小形に分けられた。上記分類からは、磨石→Ⅲ類→Ⅱ類→Ⅰ類の制作工程を看て取ることができる。また、中央孔際に凸帯が形成される製品も出土している。穿孔具としては礫錐がある。

４．まとめ

本遺跡の宮ノ台期集落では大略３期の変遷を確認することができた。６基検出されている方形周溝墓のうち、５号方形周溝墓の出土土器はⅢ期に遡る様相を認めることができ、住居はこの周溝墓からある程度の距離をおいて取り巻くように展開していることが見てとれよう。Ⅳ期の周溝墓は３・４号墓で、遺跡の北側に３号墓が作られ、４号墓はⅢ～Ⅳ期の住居が密に展開するエリアの西側の外縁付近に作られており、それなりに墓域と

居住域の区分けは存在していたことも示唆していよう。続く時期の方形周溝墓は１・２・６号墓が相当する。これらは前段階の４号墓を含め、２基ずつが近接する位置に作られており、２→１、４→６という流れが考えられる。４→６号墓の展開に伴うかのように、住居の分布がより東に寄っていることと、その段階になっても５号方形周溝墓の周辺のみが空白のまま残されていることに注目しておきたい。

本遺跡からは数多くの石器・石製品が出土しているが、注目されるのは打製短剣と考えられる石器の出土である。サヌカイトは近畿地域の限られた場所で産出される石材であり、確実な搬入品である。有孔石器や扁平片刃石斧は未製品も多く出土していることからみて、集落内での生産・消費が考えられるが、特に有孔石器については制作過程までを推測できたことは大きな成果と言えよう。

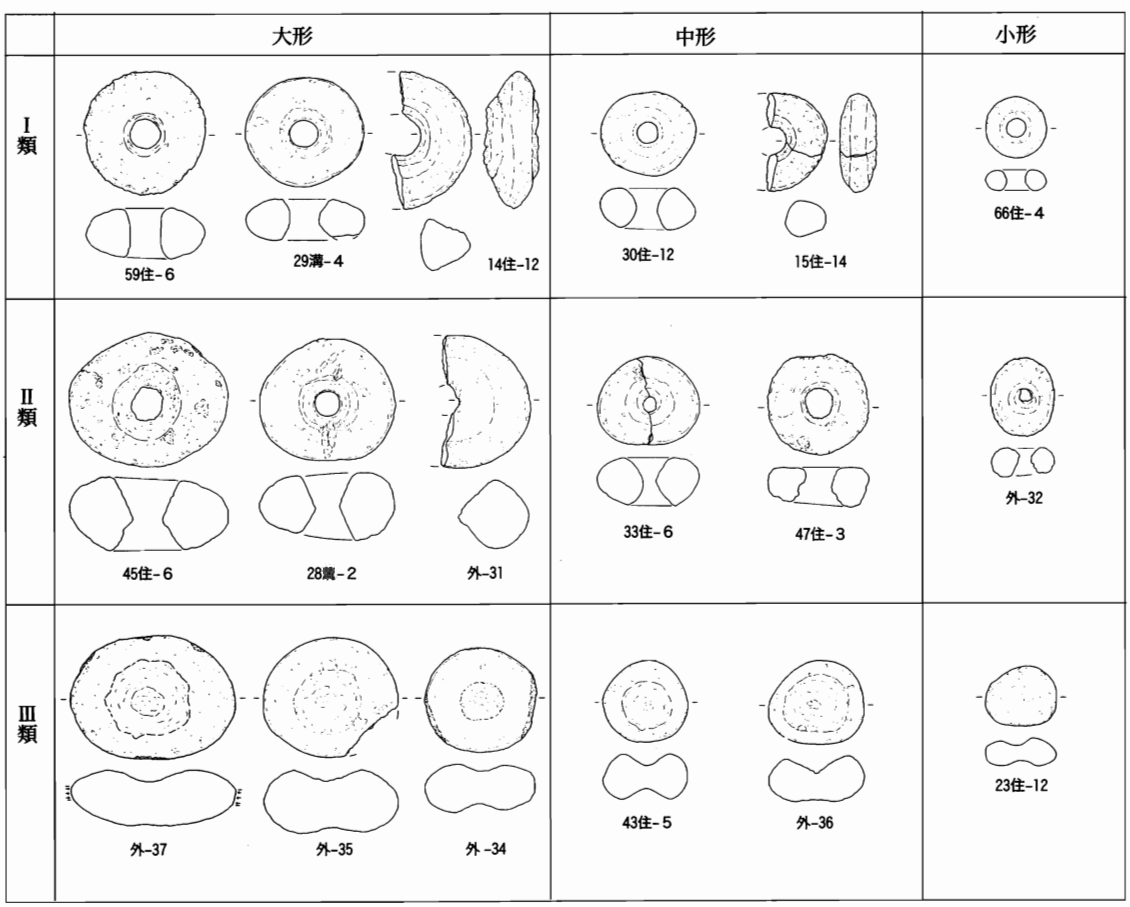
文献

安藤広道　1991「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』田原本唐古整理室ＯＢ会

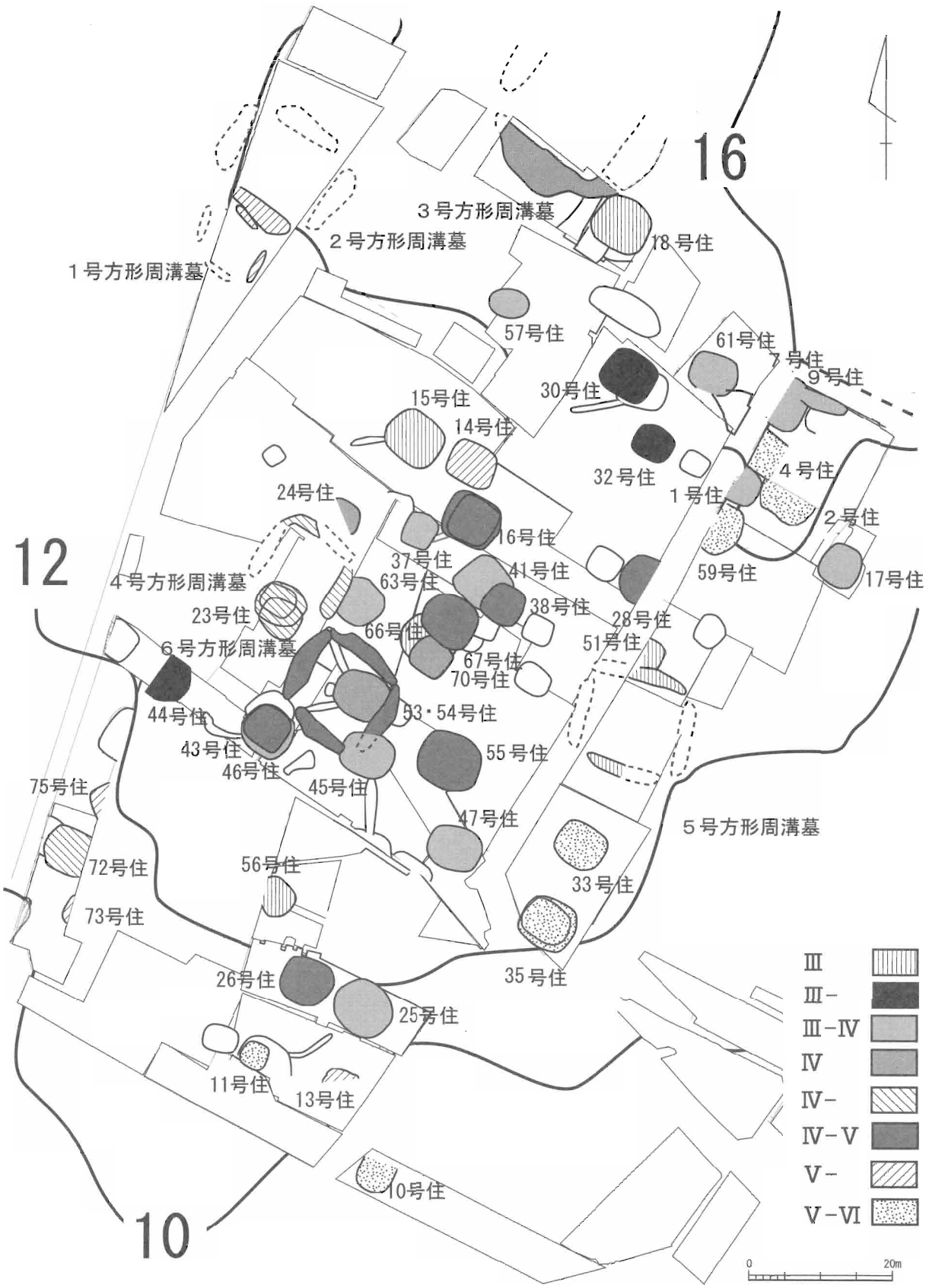
安藤広道　1996「南関東地方（中期後半・後期）」『ＹＡＹ！（やいっ！）弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』弥生土器を語る会

宍戸信悟　1992「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展　―特に西相模を中心として―」『神奈川考古』第 28 号　神奈川考古同人会

藁科哲男　2012「岡田西河内遺跡出土の黒曜石、安山岩製遺物の原材産地分析」『神奈川県高座郡寒川町　岡田西河内遺跡　－寒川駅北口地区土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書 -』寒川町都市建設部・寒川駅周辺整備事務所　有限会社吾妻考古学研究所



第２図　有孔石器形態分類



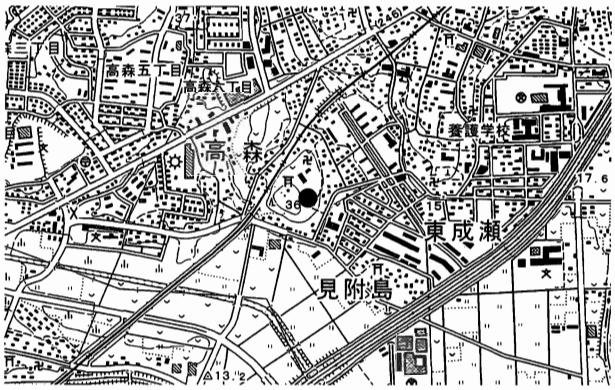
第３図　宮ノ台期集落遺構配置

伊勢原市　高森・宮ノ越遺跡 第３地点

― 弥生中期から古墳前期集落跡の調査 ―

小池 聡

所 在 地　伊勢原市高森字宮ノ越 1280 - 1 外、1279
調査機関　株式会社 盤古堂
調査担当　小池 聡
調査原因　宅地造成に伴う事前調査
調査期間　2010 年 8 月 20 日～ 2010 年 11 月 13 日
調査面積　約 2,789.58 ㎡



第１図　調査位置図（1/25,000）

１．遺跡の立地

高森・宮ノ越遺跡は、小田急線愛甲石田駅の南約 800 mに位置し、西側に小田急線軌道が接している。また、更に西約 200 mには国道 246 号線（大山街道）が南西に走り、南東約 500 mには国道 271 号線小田原厚木道路が南西に走っている。

遺跡は高森丘陵の先端部に位置し、標高は最も高い調査範囲北西部分で約 29 m、低い南東端部で約 26 m、北東端部で約 25 mを測り、緩やかに南東・北東方向に傾斜する。遺跡の南には金目川の支流である歌川が丘陵を開析して流れている。北側は歌川の支流により開析され、南東に張り出している。

今回調査地点は、伊勢原市 No.54 遺跡（小金塚古墳）と No.234 遺跡で、過去３次の調査がなされている。昭和 59 年には専修大学により小金塚古墳周溝が調査され、４世紀代埴輪が出土し小金塚古墳の年代とされている。南側に隣接する住宅開発で平成 11 年に第１地点、平成 16 年に第２地点の調査が実施され、弥生時代中期竪穴住居址、弥生時代後期環濠集落と古墳時代前期方形周溝墓群と集落の一部が確認されている。

北に位置する愛甲台地には弥生時代から古代・中世の大規模な集落や古墳などの遺跡群が平坦面全面に展開している。

２．調査に至る経緯と調査経過

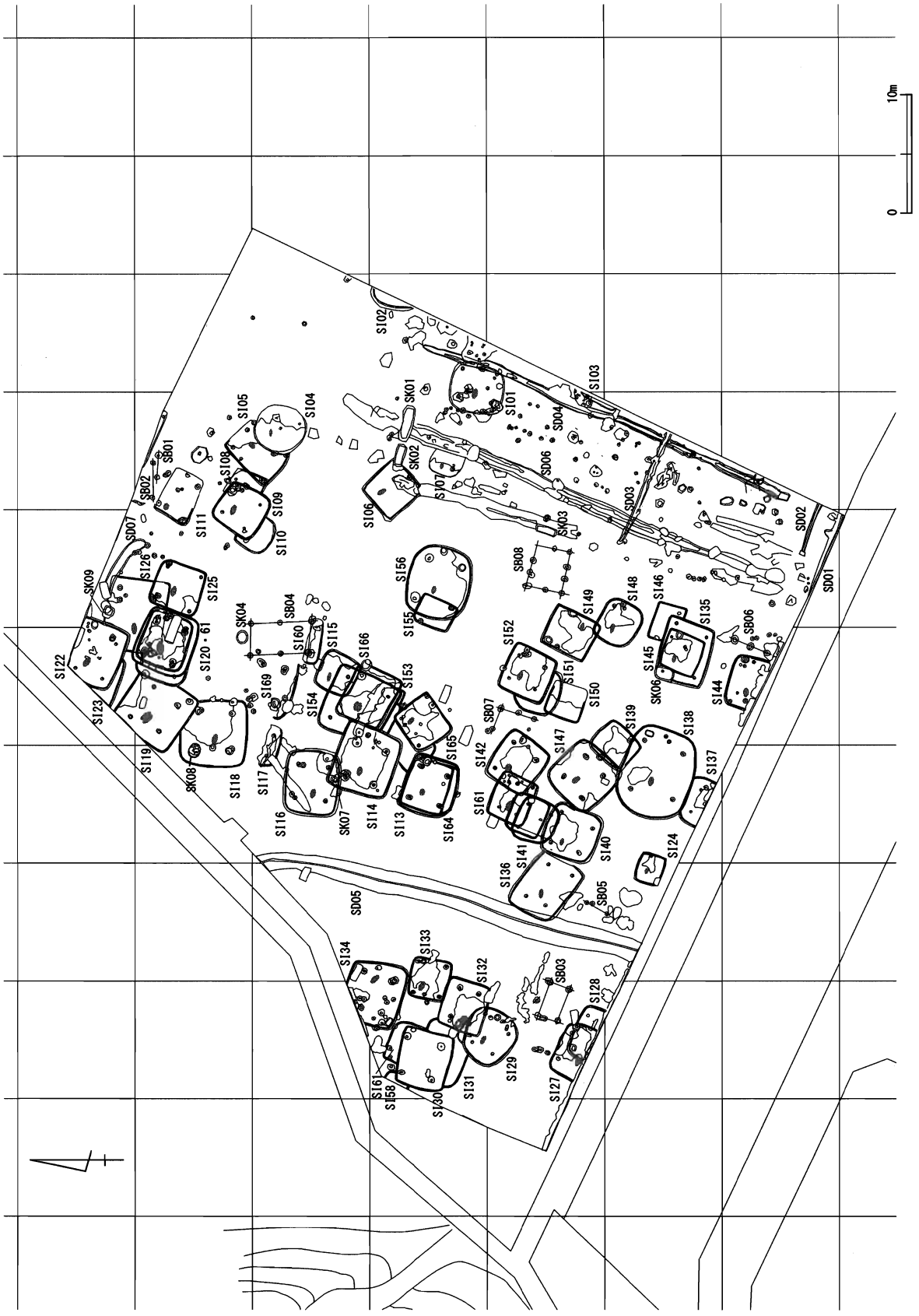
当該地は畑地として使用されていたが、相続により宅地造成が計画された。この為、伊勢原市教育委員会により平成 22 年６月に埋蔵文化財試掘・確認調査が実施された。この調査で弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居址、溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器（古墳時代～平安時代）、近世陶磁器などが整理箱１箱出土した。

平成 22 年８月に土地所有者と株式会社盤古堂が埋蔵文化財本調査業務委託契約を交わし、８月 20 日から調査を開始し、11 月 13 日に終了した。

３．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居址 67 軒、溝状遺構７条、掘立柱建物址８棟、土坑９基、集石遺構１基、柱穴 80 基、出土遺物は、縄文時代早期から後期土器・石器、弥生時代中期～古墳時代前期土器・石製品・金属器、中世石製品・銭貨、近世陶磁器など遺物整理箱 16 箱である。

以下では、時代ごとに成果について述べる。


0
10m
SI02
SI03
SK01
SI01
SD04
SI05
SI04
SB01
SB02
SI08
SI09
SI10
SI11
SD07
SK02
SI07
SI06
SD06
SD03
SK03
SD02
SD01
SI26
SI25
SK09
SI20・61
SI22
SI23
SI19
SK08
SI18
SI17
SI16
SK07
SI14
SI13
SI64
SI65
SI54
SI69
SK04
SB04
SI60
SI15
SI66
SI53
SI56
SI55
SB08
SI49
SI48
SI46
SI35
SB06
SI52
SI51
SI50
SI45
SK06
SI44
SB07
SI39
SI38
SI37
SI47
SI42
SI61
SI41
SI40
SI24
SI36
SB05
SD05
SI34
SI33
SI32
SB03
SI28
SI29
SI31
SI30
SI61
SI58
SI27

第２図　遺構配置図（１）

中・近世

溝状遺構6条、土坑3基、柱穴が該当する。この内、明確に中世期の遺構と判断される遺構は、第6号溝状遺構（SD06）である。この溝状遺構は、調査範囲の東側でほぼ南北方向に調査範囲を横切っている。幅約1m程の浅い溝状遺構であるが、底面に硬化面を持ち、道路として機能していたと推定される。覆土上面に江戸中期に降った宝永火山灰が堆積し、江戸中期以前に埋没が開始していたと推定される。底面から中世期墓標である緑泥片岩製板碑片と銭貨（「熙寧元寶」・北宋・初鋳1068年）が出土している。遺物から判断される溝状遺構の年代は、室町時代頃と推定される。第6号溝状遺構と同様に調査範囲東側で南北方向に調査範囲を横切る第4号溝状遺構（SD04）も、同じような溝状遺構であろう。

近世遺構は第1～3号土坑（SK01～03）など所謂イモ穴で、近世江戸時代の畑耕作に関連する遺構であろう。これらからは18世紀から19世紀代の陶磁器が出土した。

弥生時代後期～古墳時代前期

今回調査で最も多くの遺構が検出されたのが該期である。検出遺構は竪穴住居址64軒、掘立柱建物址8棟、土坑5基、環濠を含む溝状遺構2条などである。竪穴住居址と環濠は過去調査の第1・2地点で検出されていた遺構であり、今回調査地点にも同様に遺構が分布し検出されると予想されたが、予想を上回る多さであり、該期の遺構では古墳時代前期竪穴住居址の密集は今回調査地点が最も顕著である。

第1・2・10・29・37・38・48・56・64号住居址（SI01・02・10・29・37・48・56・64）などの弥生時代後期住居址は隅丸方形や円形に近い形状である。環濠内側だけでなく斜面全面に展開している。その他住居址は古墳時代前期の竪穴住居址である。より方形に近い隅丸方形を呈し、一辺2m程度の小規模住居址から第33号住居址（SI33）など中型住居址、第14号住居址（SI14）や第22・23号住居址（SI22・23）など7m程度の規模を呈する大きい住居址である。また、竪穴住居址は最大で10軒程度の複雑な重複が認められ、繰り返し住居址が構築される環境であったと推定される。

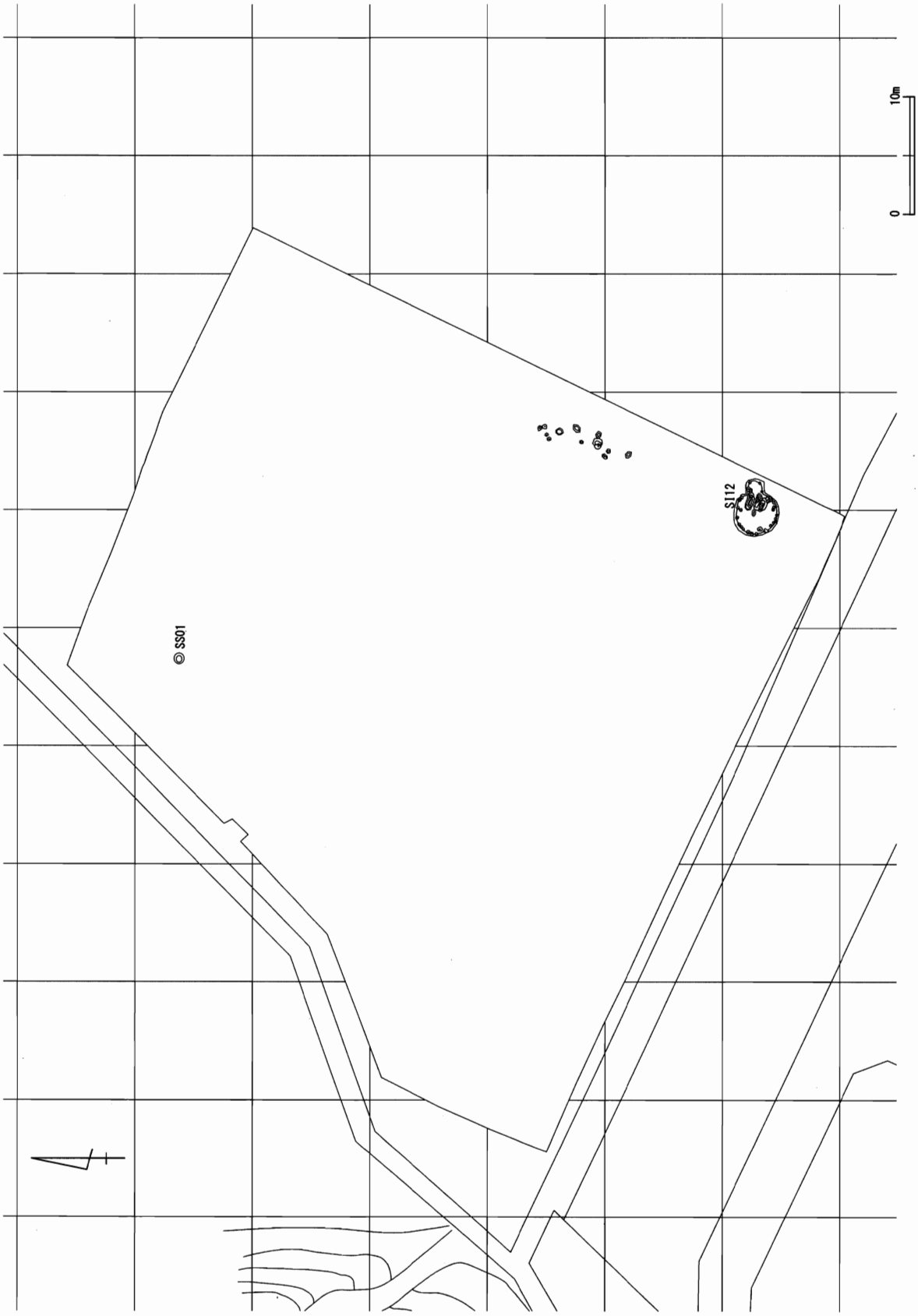
特殊な遺物として、前述した第32号住居址（SI32）炉址から滑石製勾玉が出土した。また、第19号住居址（SI19）から小型土器蓋や第26号住居址（SI26）からは手焙土器などが出土している。第1・2地点で検出されている古墳時代前期方形周溝墓は検出されず、今回調査地点が集落域であったと考えられよう。

調査範囲の西側で検出された第5号溝状遺構（SD05）は環濠である。調査範囲内で約32m確認した。北側で弱く西に曲がるようで、この溝の西側がこの溝により区画される集落の内側であろう。覆土中層から下層で壺、甕、高坏などの大型破片が出土している。この環濠は第1・2地点から続いている環濠である。

そのほか、掘立柱建物址が検出され、第8号掘立柱建物址（SB08）などのように2間×3間以上の平面形を持つ建物が構築されている。また、小規模ながら円形や方形土坑も構築される集落址である。

弥生時代中期

調査終了時の所見では、該期遺構は竪穴住居址2軒と土坑1基であるが、今後出土遺物整理で増える可能性がある。第16号住居址（SI16）と第36号住居址（SI36）が該当する。やや大型で平面形は隅丸方形を呈する。壁の掘り込みもこれらより新しい弥生時代後期から古墳時代前期竪穴住居址より深いようである。同一時期の遺構は第1地点で竪穴住居址が1軒のみ検出されている。第36号住居址は形態的に第16号住居址と同一時



第３図　遺構配置図（２）

期の住居址と考えられる出土土器がほとんど無く明確に時期決定できないが、同一時期と考えたい。

1基のみ検出された第7号土坑（SK07）は第16号住居址覆土中から検出された小規模な土坑であるが、坑底から胴部に穿孔を施した壺形土器が出土した。このことから土坑墓と考えられる。第16号住居址の埋没途中に構築されている。該期土坑墓は本遺跡での初めて検出である。

縄文時代

検出された遺構は、竪穴住居址1軒、集石土坑1基、柱穴12基で、出土遺物は縄文早期～後期土器・石器である。

調査範囲南東部分で検出された第12号住居址（SI12）とした竪穴住居址は、東に柄部を持つ柄鏡形住居址である。主体部は直径約3.5 mの円形を呈し、全長は約4.9 m、柄部長さ約1.2 mを測る。炉址は主体部のほぼ中央部に構築された石囲い埋甕炉で、加曽利EⅣ式土器深鉢形土器胴部を使用している。主体部縁辺に小柱穴が巡っている。主体部と柄部連結部には「ハ」の字柱穴が構築されている。

覆土中から後期初頭称名寺式土器と中期最終末加曽利EⅣ式土器が出土し、床面直上から中期最終末加曽利EⅣ式土器や打製石斧、磨石、石皿などが出土した。床面直上土器と炉体土器から該期の住居址と考えられる。

調査範囲北側で検出された集石遺構（SS01）は、被熱した拳大礫が少量覆土中に含まれる。掘り込みは、径約85cmを測る隅丸方形の平面形で、礫の下部から炭化材が出土している。

主な縄文時代遺物は、前述した第12号住居址覆土中から出土しているが、その他弥生時代から古墳時代前期竪穴住居址や中世・近世溝状遺構覆土から、縄文早期から後期土器や石鏃など石器類が出土している。その他、遺構確認面である富士黒色土層からも少量の土器（早期～後期）が出土している。

4．まとめ

今回の調査は、高森・宮ノ越遺跡での3次目の発掘調査となった。縄文時代から近世（江戸時代）まで、多くの遺構や遺物が検出され、大きな成果をあげることができた。特に大きな成果は、縄文時代竪穴住居址の検出、弥生時代中期集落址の確認、弥生時代後期から古墳時代前期の大規模集落址の検出であろう。

縄文時代からの当該地の歴史的変遷について述べると縄文時代は、隣接調査地点で集石遺構1基と遺構外出土遺物が少量認められているのみであったが、本格的に居住空間として利用された痕跡を確認することでき、今回調査地点が縄文時代から居住域としての土地利用が開始された。

次に弥生時代では、従前調査で中期宮ノ台式期に1軒のみ検出されていた住居址が、広範囲に複数認められて集落を構成していた可能性が高いことが確認され、該期になり更に本格的な居住域として土地利用が開始されていることを確認した。また、主体となって検出された弥生時代後期後半に集落は、丘陵先端部全域に展開して最も広く構築され続く古墳時代前期にも第1・2地点で検出された方形周溝墓群に埋葬される首長により統制される集落として、更に丘陵上に展開し繰り返し構築されている。

その後、4世紀代に入り調査範囲北西に隣接する小金塚古墳の構築に際して集落が削平され、廃絶したと推定される。

中・近世では中心地では無いが道路や畑地として土地利用されていたと考えられる。

以上のような大きな成果を得ることができた。今後出土品整理と報告書作成にあたり充分に研究していきたい。

文末ではあるが、関係諸氏・組織に感謝申し上げる。

写真１　遺跡航空写真

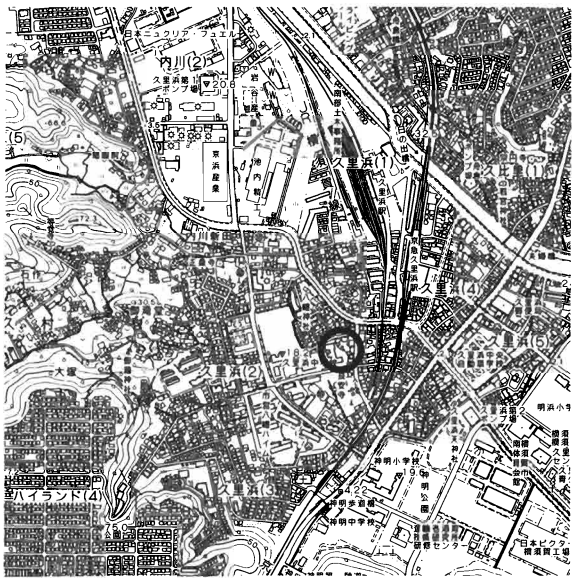
写真２　縄文時代柄鏡形住居址

横須賀市　八幡神社遺跡（やはたじんじゃ）

－古墳時代の石棺墓と土坑墓群－

中三川（なかみがわ）　昇（のぼる）

所在地	横須賀市久里浜２丁目 11 －１
調査機関	横須賀市教育委員会
調査担当	中三川 昇
調査原因	市立久里浜中学校武道場建設
調査期間	2011 年８月８日～ 11 月 30 日
調査面積	292.6 ㎡



第１図　遺跡位置図（1：20,000）

１．遺跡の立地

八幡神社遺跡は東京外湾に面した古久里浜湾内に形成された標高３m前後の砂堆上に立地する遺跡である。これまで本遺跡では計７地点で発掘調査が行われ、古墳時代と中世を中心とした複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地点は 1987 年 (昭和 62 年)8 月に発掘調査が行われた久里浜中学校Ａ地点 (稲村 1991) の隣接地点である。同地点の調査では古墳時代中期後半頃の古墳周溝と考えられる溝状遺構や中世の方形竪穴状遺構や土坑・ピット等が出土している。このような点から今回の発掘調査地点に関しても同様な時期の遺構・遺物が存在すると想定された。

２．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は市立久里浜中学校の武道場建設伴う記録保存を目的とした本発掘調査である。調査対象面積は武道場建設予定地の 290 ㎡、調査期間は８月８日から 10 月７日までの予定で調査を開始したが、９月 16 日に調査区南端部分で古墳時代の石棺墓が発見されたため、南側の 2.6 ㎡を拡張して調査対象地に加えた。また、中世遺構群の調査終了後さらに古墳時代と考えられる複数の埋葬人骨が相次いで発見されたため、調査期間を延長し、11 月 30 日に終了した。

３．調査結果

（１）古墳時代

埋葬人骨を伴う石棺墓１基、土坑墓２基、ピット２基と性格不明の土坑１基等が検出された。

①１号石棺墓

主に泥岩の自然石を組んで構築された石棺墓である。平面形は先端部 (足先側) に向かって狭まっている。側石は先端部付近では一段であるが胸部分では３段に組まれ、蓋石の位置が高まっている。底石は平坦で、あたかも船を逆さにしたかのごとき印象を受ける形状である。また埋葬人骨の足元側の最先端部には、使用痕のある碇石（長 36.2 ×幅 17.5 ×厚 14. ㎝、重量 9.2 ㎏、凝灰岩）が

置かれていた。石棺内部の規模は長さ1.2m以上、最大幅約0.42㎝、想定最大高45㎝前後である。

人骨(1号人骨)は骨盤の形状他から成人男性と考えられる。足先をやや西(N－14°58′－E)に向けた伸展葬で、下顎骨から足骨までが出土した。推定身長は1.6m弱である。人骨と石棺側石との間に隙間は少ない。明確な副葬品は確認されなかったが、石棺底石の下に散乱した状態で土師器高坏の脚部細片が4点出土した。

② 1号土坑墓

舟形を思わせる形状の土坑墓である。土坑墓の規模は長さ1.75m、幅8.4m以上、深さ0.35m以上を測る。長軸方向では埋葬人骨の足先側に向かって弧状に浅くなり、短軸方向の掘り方断面形は弧状を呈する。2号土坑墓と一部重複している。

人骨(2号人骨)は頭骨の特徴他から成人女性と考えられる。足先をやや東(N－16°2′－E)に向け、下肢骨が浮いて「く」の字状に屈曲しており、やや膝を立てた状態で埋葬されていた可能性が考えられる。頭骨から足骨までが出土した。推定身長は1.4m前後である。土坑底部付近から土師器細片が2点出土した。

③ 2号土坑墓

楕円形を呈する土坑墓であるが、土坑墓2基が重複している可能性もある。平面規模は約1.45×1.3mで、確認面からの深さは約0.3mである。1号土坑墓及びP55と重複している。

人骨(3号人骨)は乳歯及び永久歯の萌出状態から8歳前後と想定され、足先を除くほぼ全身骨格が検出された。足先をほぼ北東(N－38°29″－E)に向けた伸展葬で、顔面は北西を向く。推定身長は1m未満と考えられるが、性別は不明。覆土上部から土師器細片が2点出土した。

④ P55

径40㎝弱のピットである。出土人骨(仮称4号人骨)は、幼児と思われる未縫合の頭骨(上顎骨～頭蓋骨)と乳歯？(5本)が検出された。他に出土遺物はない。

⑤ P56

径60㎝弱のピットである。出土人骨(仮称5号人骨)は乳幼児と思われ、骨片と乳歯？(13本)が検出された。他に出土遺物はない。P55及びP56出土人骨は同一個体の可能性も考えられる。

⑥ SK38

性格不明の土坑で1号・2号土坑墓の下部から検出された。土坑墓出土と同一個体の土師器細片が8点出土した。

⑦その他

土師器片・須恵器片・管状土錘等が少量出土。

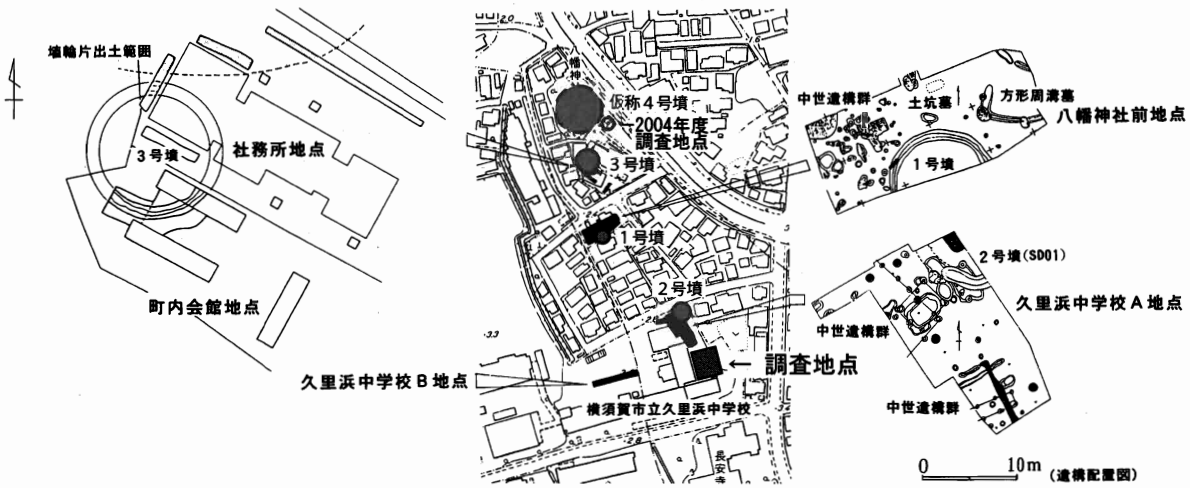
（2）奈良時代～中世

奈良時代前後の出土遺物として土師器片・須恵器片等が少量出土したが、明確な遺構は確認されなかった。

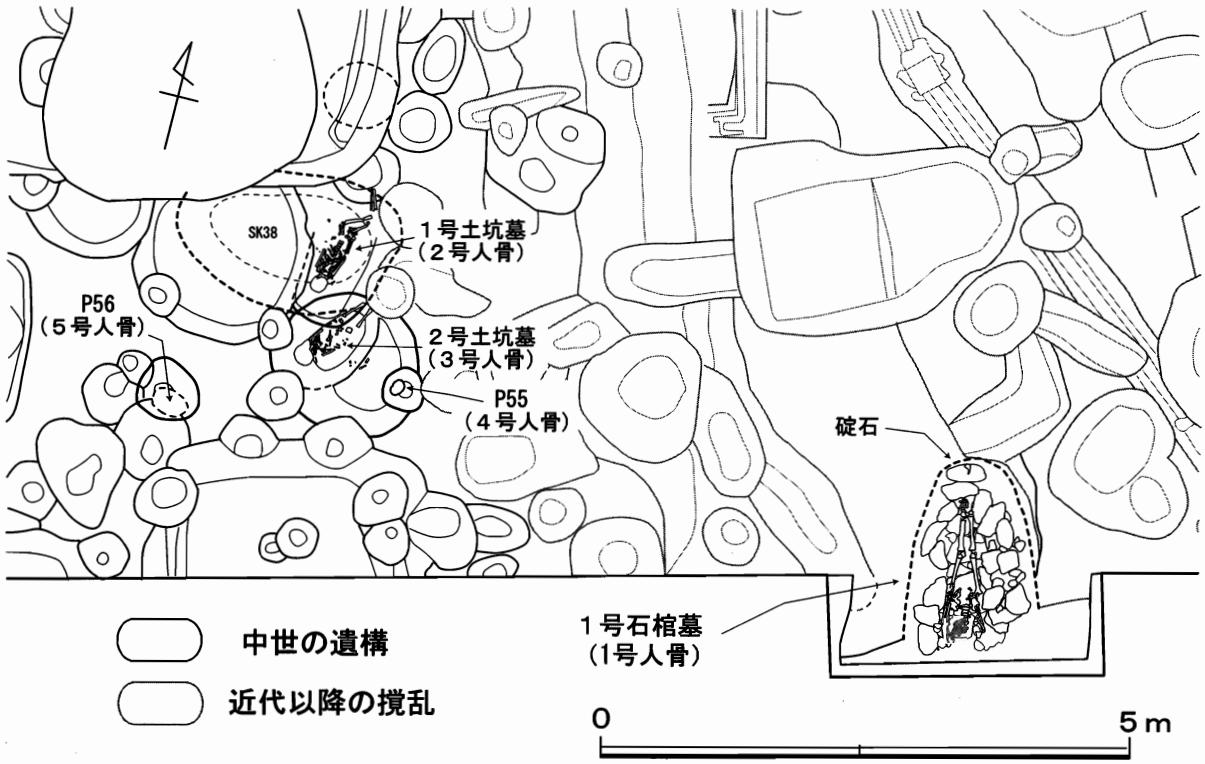
中世（主に15世紀～16世紀）の遺構・遺物としては方形竪穴建物跡3棟と土坑・柱穴多数が検出され、陶器（古瀬戸・常滑焼・備前焼）、青磁碗、かわらけ、鉄製品・管状土錘等が出土した。

5．まとめ

八幡神社遺跡に古墳時代中～後期にかけての古墳群や土坑墓が存在することは既に確認されており、前期の方形周溝墓の存在も指摘されているが、今回の発掘調査では、新たに石棺墓や遺存状態の良好な埋葬人骨の存在が確認された。この結果、古墳時代の本遺跡では、多様な形態の墓制が展開していたことが判明した。課題は多様であるが、碇石を伴う石棺墓の評価が最大の課題となろう。



第２図　調査地点位置図



第３図　石棺墓・土坑墓等配置図（1：140）

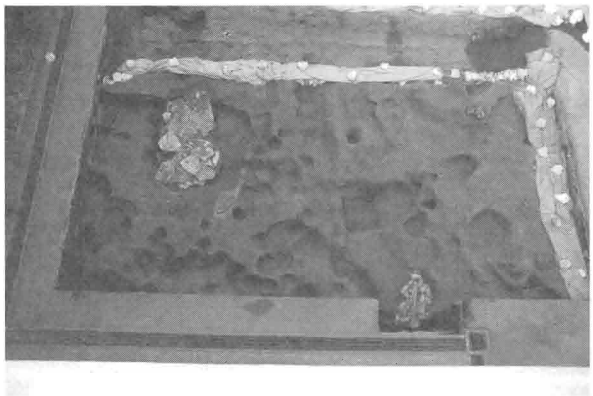


写真１　調査区２区全景

写真２　１号石棺墓人骨出土状況

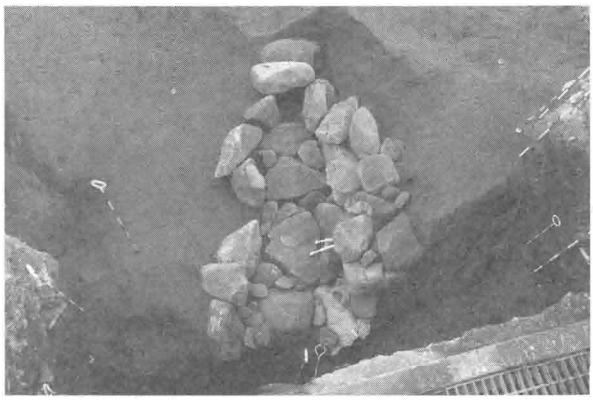


写真３　１号石棺全景

写真４　１号石棺碇石出土状況

写真５　１号石棺側石遺存状況①

写真６　１号石棺側石遺存状況②

写真７　１号石棺掘り方全景

写真８　１号土坑墓人骨出土状況

小田原市　永塚北畑遺跡（ながつかきたばたけ） 第 XI 地点

－ 美濃国刻印須恵器が関東地方で初めて出土 －

土屋（つちや） 了介（りょうすけ）

所 在 地　小田原市永塚字北畑 288 番 3
調査機関　小田原市教育委員会
調査担当　土屋了介
調査原因　個人住宅新築工事
調査期間　2011 年 8 月 9 日～ 2011 年 10 月 24 日
調査面積　47.31 ㎡

第 1 図　調査地点位置（1/25,000）

1．遺跡の立地

永塚北畑遺跡第ＸＩ地点は、神奈川県西部の小田原市域を南北に流れる酒匂川左岸の、更新世に形成された低位台地である永塚台地上に位置する。永塚台地は北西―南東方向に延び、当該地はそのほぼ中央に位置している。当該地周辺の標高は 27.5m 程である。台地西縁は断層崖となっており、沖積低地面との標高の差は最大 12 mに達する。台地東側には有機質土に富む後背湿地である森戸川低地が広がる。台地上のほぼ全域が遺跡であり、小田原市 No.33 遺跡及び No.222 遺跡として周知されている。

歴史的環境について見てみると、本地点の西では永塚北畑遺跡第Ⅶ～Ⅸ地点の調査において弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が検出されている。また、古墳時代前期の大型方形周溝墓あるいは古墳周溝とみられる遺構が永塚北畑遺跡第Ⅷ地点で確認され、墓域の展開も認められる。古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構は永塚北畑遺跡第Ⅶ地点における住居跡が主なもので、居住域が展開する（渡辺 2009）。

本地点の東では永塚北畑遺跡第Ⅱ地点の調査によって弥生時代から平安時代までの住居跡が検出されたほか、本地点の南東に位置する永塚長森遺跡第Ⅰ地点では弥生時代後期～古墳時代以降の住居跡や弥生時代終末～古墳時代初頭の方形周溝墓が発見されるなど、集落及び墓に関連する遺構が検出されている（香川 2002）。

本地点から南東へ 350 mの地点では、永塚壱町畑遺跡第Ⅰ地点では奈良時代の住居跡が検出され（塚田 1986）、永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点においては、古墳時代前期の住居跡より重圏文鏡や異形垂飾品が出土したほか、奈良・平安時代の舗装道路と住居跡が検出されるなど特筆すべき成果が挙がっている（齋木・降矢・田尾 2002）。

永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点や下曽我遺跡の調査成果を受け、本地点より南東に 100m の場所に位置する永塚観音堂の周辺に足下郡家があった可能性が提示された（齋木・降矢・田尾 2002）。永

塚台地の南に接する千代台地は、初期寺院である千代廃寺が造営された地として知られ、千代南原遺跡第XXIV・XXV地点において掘込地業が検出されるなど、寺院に関する遺構が発見された。千代台地では6世紀後半から7世紀中葉にかけて集落が飛躍的に拡大するにもかかわらず、7世紀終わり頃までに住居跡が消滅することから、千代廃寺の寺域造成時期に集落が台地上から排除されたと考えられる（渡辺2006・2009）。また、古代東海道は永塚台地の北辺を通り、90度近い方向転換をして南下し国府津に至ると考えられている。国府津は足下郡家の外港とされ、水陸交通の結節点と評価されている。初期寺院である千代廃寺と足下郡家が水陸交通の結節点となる国府津と有機的関係にあり、郡の交易・交通の要衝であったことが窺われる（田尾2008）。

2．調査に至る経緯と調査経過

本地点では個人住宅新築工事に伴い柱状改良の敷設が計画され、西へ20mに位置する永塚北畑遺跡第X地点の調査成果からみて、本地点においても遺跡の濃密な展開が明らかであったため、遺跡の記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施した。

調査は2011年8月9日より開始し、表土除去後、近現代の攪乱および近世の耕作痕を完掘した。続いて遺構の検出作業と調査を行い、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡などの記録作成を進め、2011年10月24日にすべての作業を終了した。

その後、整理作業で遺物の洗浄を行っていたところ、「美濃」という刻印が捺された須恵器（以下「美濃国刻印須恵器」）が出土していたことが明らかとなった。

3．調査概要

第一面においては、奈良・平安時代以降の複数の土坑と住居とみられる方形プランが確認されるとともに、土器やグリーンタフ片が検出された。このグリーンタフ片は永塚北畑遺跡第X地点の成果を参考とすると、古墳時代前期の玉作残滓と考えられ、本来は下層の遺構に埋まっていたものと判断される。斎藤あや氏の御教示によると、技術的には関東へ弥生時代後期後半以後に入る玉作技術で、県内では古墳時代前期の遺跡が多く、最盛期は古墳時代前期後半とのことである。下層でもグリーンタフ片は出土しており、奈良・平安時代の玉作残滓とは言い難く、古墳時代前期のものと考えておきたい。

土器についても下層の遺構に帰属するとみられる古墳時代の土器片なども第一面から出土し、遺構の重複が著しいと予測された。遺物は3号住居跡から集中的に出土し、7世紀～8世紀前半の遺物が混在している状況であった。そのほかに砥石や刀子が出土している。竈は3号住居跡のみで検出している。美濃国刻印須恵器は3号住居跡より出土した。

出土した美濃国刻印須恵器は、口径14.1cm、底径7.1cm、器高4.15cmに復元される。器種は坏（つき）である。この坏の内面に「美濃」の印が押されている。

田尾誠敏氏の御教示によると、「美濃」とは古代の律令制下の美濃国（現在の岐阜県南部周辺）を指し、同様の刻印をもつ須恵器は、岐阜県岐阜市老洞窯（おいぼらよう）、朝倉窯（あさくらよう）を中心に、限定的に生産された。美濃国刻印須恵器以外には当時の国名を刻印した須恵器はないという。初めは「美濃国」であった刻印は次第に「国」の字が省略されていく。永塚北畑遺跡第XI地点で出土した美濃国刻印須恵器は「国」の字がない。

また、他府県の状況については、「美濃国」刻印須恵器は、岐阜県、愛知県、長野県、三重県、大阪府、奈良県の1府5県、55遺跡で出土しており、長野県佐久市西近津遺跡で出土したものが

生産地から最も北東に離れた事例であった。「郡」銘刻書土器が出土した西近津遺跡では、近接地に佐久郡家が置かれていた可能性が指摘され、郡家への遠隔流通が予想されるという。今回の永塚北畑遺跡第XI地点から出土した「美濃国」刻印須恵器は関東地方では初めての出土例で、生産地から最も東に位置する事例となるとのことである。

刻印須恵器が製作された時期については、須恵器の形や平城宮で刻印須恵器と伴って出土した木簡の年代から、8世紀第1四半期後半頃(712－725年頃)と考えられ、この年代と美濃国国司であった笠朝臣麻呂(かさのあそみまろ)の在任期間が一致し、麻呂の赴任先で出土するなど、その関係性が指摘できるという。田尾氏からは「永塚台地は相模国足下郡家の比定地のひとつにあげられていることから、官衙への遠距離流通を示すものであり、永塚台地における足下郡家の存在を補強する資料であると位置付けられる。」というコメントと共に「本住居跡出土土師器坏にみられる試行錯誤の段階は長くみても、716年を若干さかのぼる時期から740年までの間、すなわち8世紀第1四半期後半から若干第2四半期前半にかかる時期にあたる。「美濃国」刻印須恵器はその生産年代が8世紀第1四半期後半と限定されていることから3号住居跡の土師器年代と一致し、在地産土師器編年に与えられる実年代資料が少ない当地域において貴重な共伴例になろう。」という評価をいただいた。

第二面の調査では古墳時代後期の住居跡と土坑を検出した。第一面の遺構により切られ、残存状況は良好とは言い難いが、10号住居跡は床面および竈が残存し、一定量の遺物が出土した。10号住居跡からは床面より15cm高い位置で完形の鉄製U字鋤先が出土している。

遺構の重複については、新→古という並べ方をすると、①1号住居跡→3号住居跡→8号住居跡→10号住居跡→13号住居跡、②1号住居跡→3号住居跡→7号住居跡→12号住居跡、③1号住居跡→3号住居跡→4号住居跡→12号住居跡、④2号住居跡→5号住居跡→9号住居跡→10号住居跡→11号住居跡という切り合い関係が確認できる。

4．まとめ

3号住居跡より関東では初出となる美濃国刻印須恵器が出土し、在地土師器編年に寄与し得る貴重な実年代資料が得られた。今後の研究の進展に期待したい。

本地点においては、他にも古墳時代後期のU字鋤先や古墳時代前期の玉作残滓が出土するなど、各時期の貴重な資料が得られ、意義深い調査となった。地域の歴史を復元する上でも、また、流通・生産・権力について考察する上でも、重要な資料となると考えられる。本報告へ向け、基礎整理を進めていきたい。

本稿作成にあたり、田尾誠敏氏と斎藤あや氏より多大なご教示を賜った。記して謝意を表したい。

参考・引用文献

香川達郎 2002『永塚北畑遺跡第Ⅱ地点　永塚長森遺跡第Ⅰ地点―市道4491号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査―』小田原市文化財調査報告書第104集 小田原市教育委員会

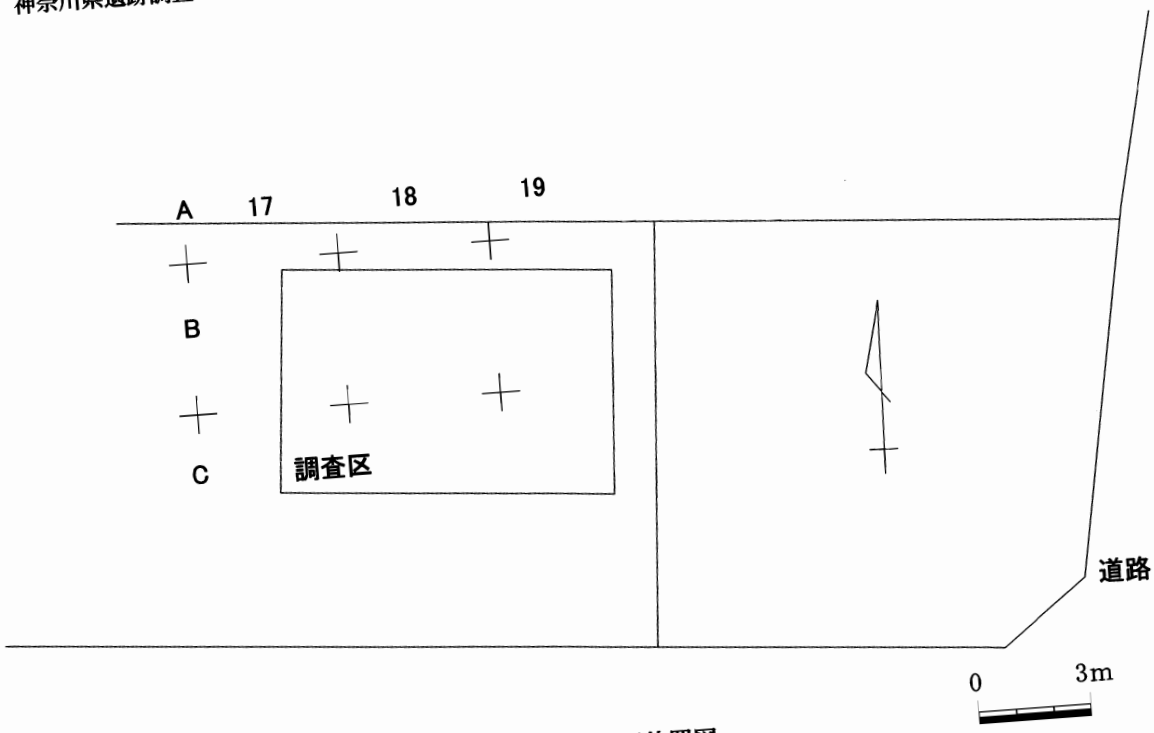
塚田順正 1986「永塚一町畑遺跡の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書21集　小田原市教育委員会

齋木秀雄・降矢順子・田尾誠敏　編 2002『神奈川県小田原市　下曽我遺跡　永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』鎌倉遺跡調査会・下曽我遺跡発掘調査団

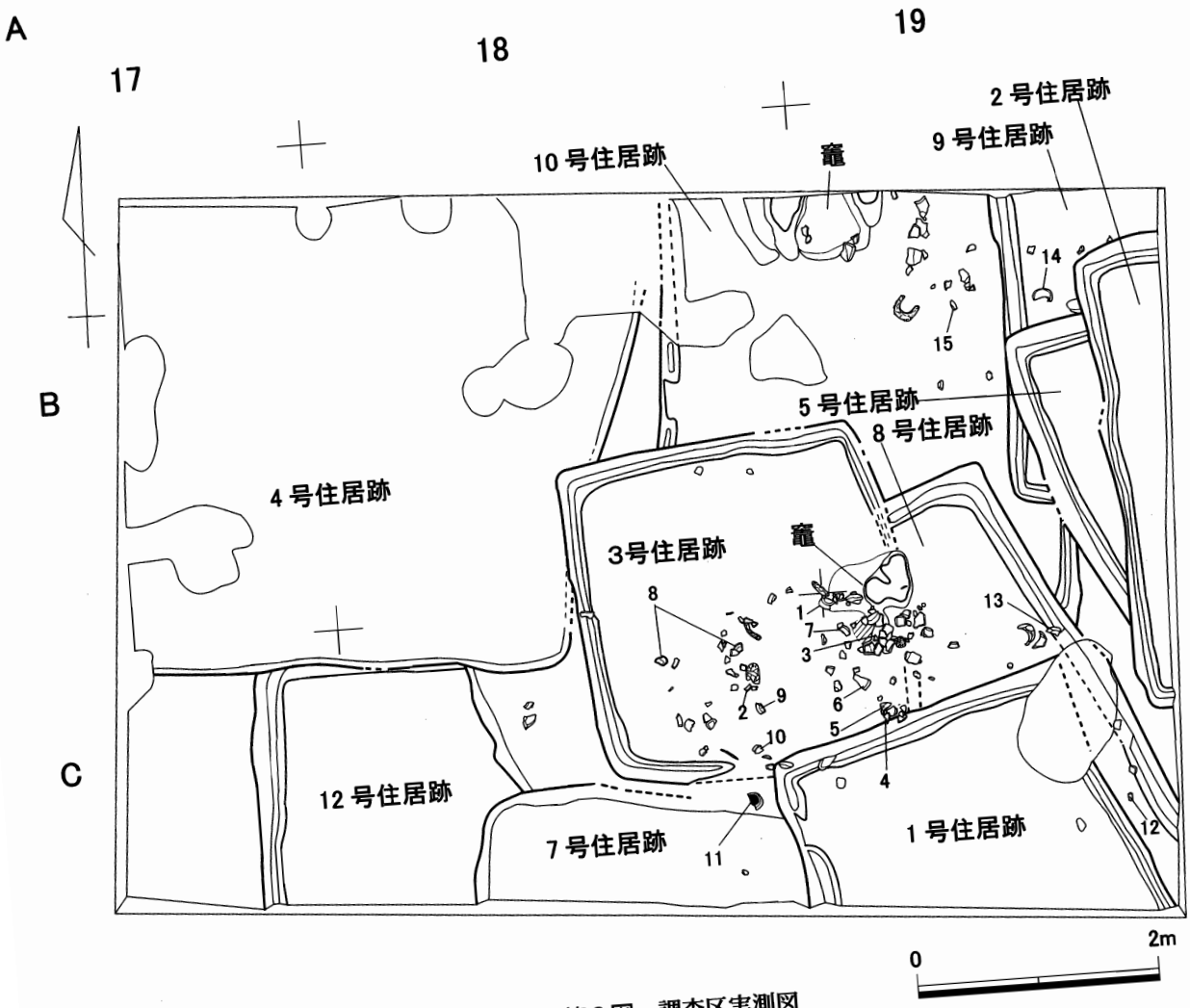
田尾誠敏 2008「千代寺院跡と千代遺跡群」『平成20年小田原市遺跡調査発表会 発表要旨』小田原市教育委員会

渡邉千尋 2006「千代南原遺跡第ⅩⅩⅣ地点」『平成18年小田原市遺跡調査発表会 発表要旨』小田原市教育委員会

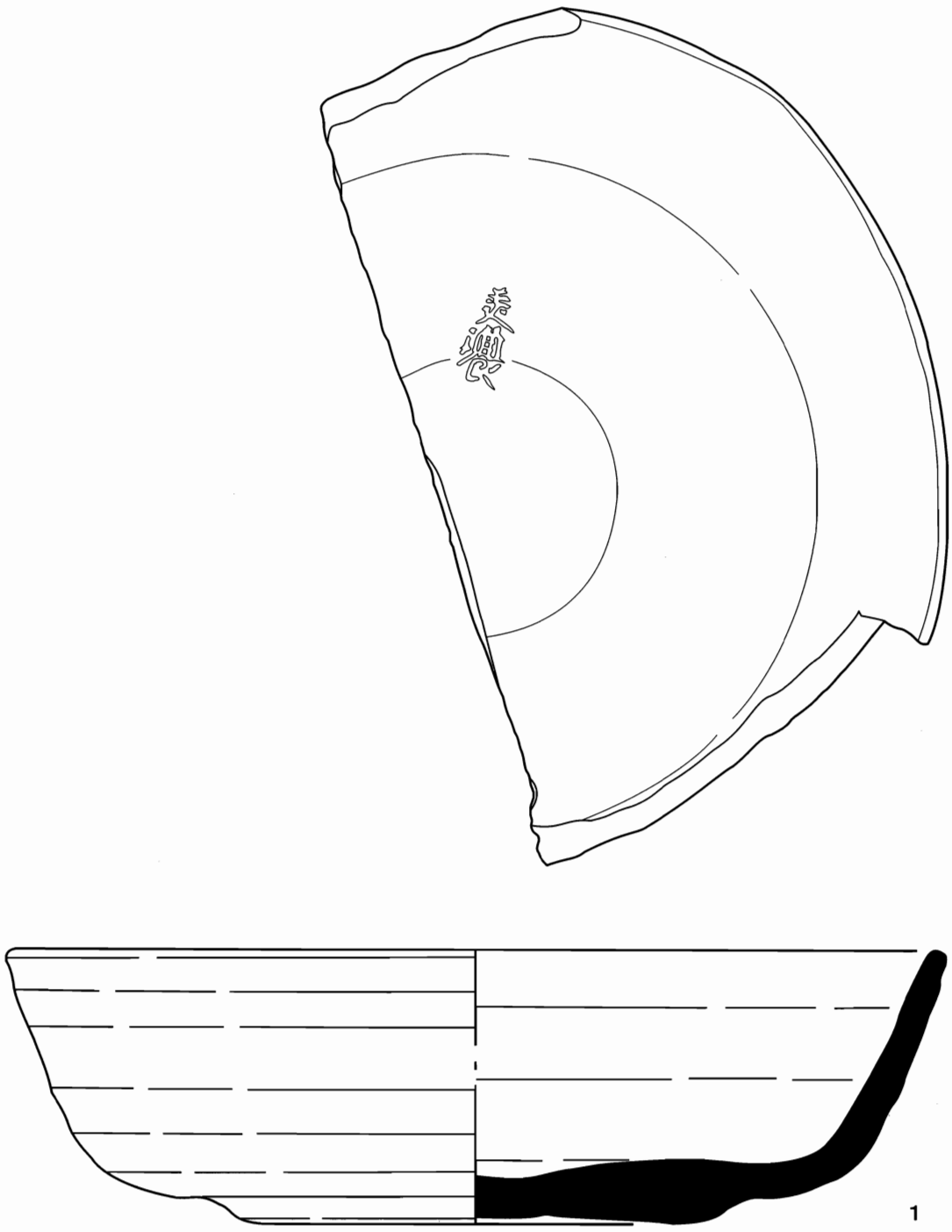
渡辺千尋 2009「永塚北畑遺跡第Ⅶ・Ⅷ地点」『平成21年小田原市遺跡調査発表会 発表要旨』小田原市教育委員会



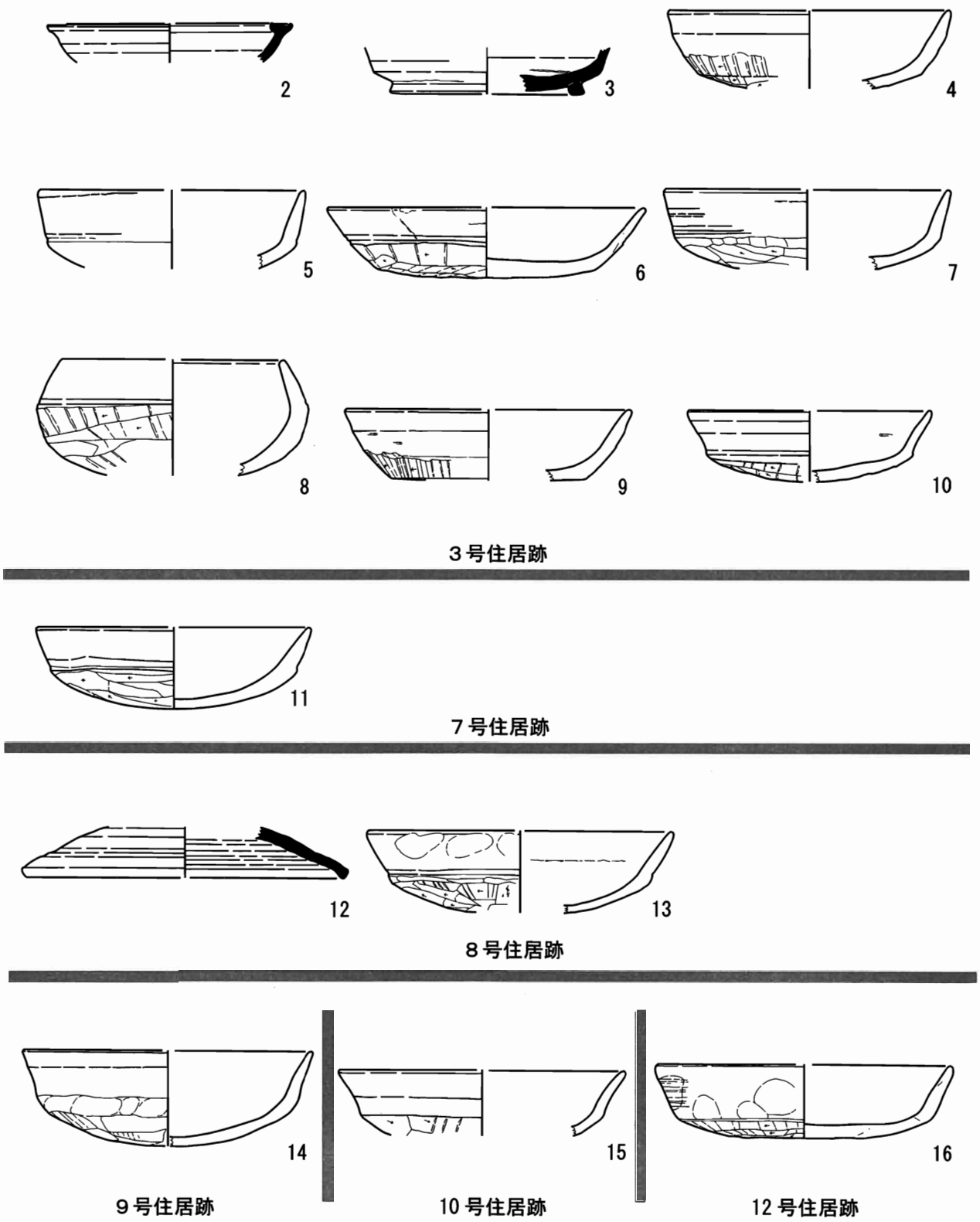
第2図　調査区位置図



第3図　調査区実測図



第４図　美濃国刻印須恵器


2
3
4
5
6
7
8
9
10
3号住居跡
11
7号住居跡
12
13
8号住居跡
14
15
16
9号住居跡
10号住居跡
12号住居跡
0
4cm

第5図　出土遺物実測図

鎌倉市　大倉幕府周辺遺跡

― 古代から中世初頭の荏柄地域の様相 ―

齋木 秀雄

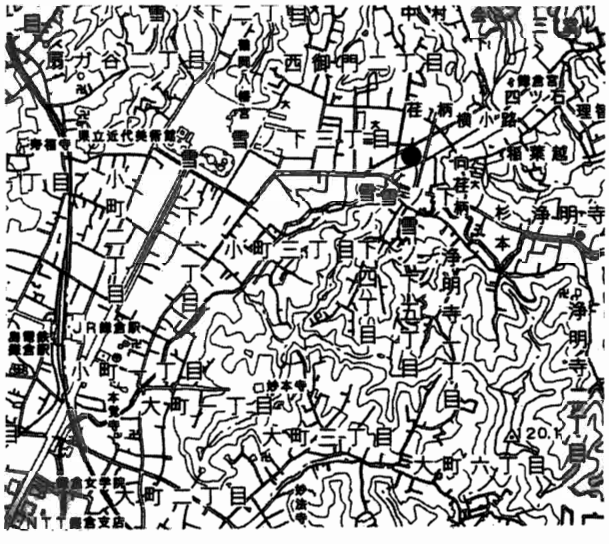
所 在 地　鎌倉市二階堂字荏柄 38 番 2
調査機関　有限会社 鎌倉遺跡調査会
調査担当　齋木秀雄
調査原因　集合住宅建設に伴う発掘調査
調査期間　2011 年 10 月 15 日～ 2012 年 5 月 10 日
調査面積　1,772 ㎡

1．遺跡の立地

大倉幕府周辺遺跡は、その名が示すように、鎌倉に入った源頼朝が開いた大倉幕府の周辺に位置する。大倉幕府跡の範囲は、おおまかに金沢・鎌倉線の北側で、東御門川と西御門川に挟まれた地域と推定されている。なお、清泉小学校北側の丘陵中腹には、源頼朝の墓と伝わる多層塔、政所別当などを勤めた大江広元の墓、最近調査・確認された北条泰時の墳墓堂跡が並び、頼朝の墓の下には頼朝の法華堂跡に創建された白旗神社もある。

大蔵幕府周辺遺跡は大倉幕府の関連遺跡が推定される地域で、遺跡範囲は、西は筋違橋（横浜国立大学付属小・中学校入り口辺）、南は滑川、東は荏柄天神社参道、北は清泉小学校北側の道路までが含まれている。今回の調査地は、東が荏柄天神社の参道に接しており、遺跡範囲内では東端に位置している。調査地の北にある大塔の宮・永福寺跡方面に向かう道路は、通称「お宮通り」と呼ばれている。この道路は、明治時代に大塔の宮参道として造成された道路で、新しい道路である。

中世の永福寺に向かう道路 (二階堂大路) は、関取橋の碑が立つ分岐点から分かれる小道であったと推定されている。この道路は、調査地点の南側に一つの宅地を挟んである。



第１図　遺跡の位置（1 /25,000）

大倉地域は、頼朝が幕府を開き多くの御家人たちが生活を営んだ場所で、鎌倉では最も早く開発された地域と考えられている。調査地点の北東に位置する荏柄天神社は長治元年（1104）八月二十五日に天神の霊がこの地に降臨したのに始まり、鎌倉幕府の鬼門鎮守の社として崇められたという社伝がある。この周辺にあったとされる荏草郷の名は正倉院文書の天平七年（735）に見られる。実態は明らかではないが、荏柄天神社周辺が推定されている。荏柄天神社は『吾妻鏡』建仁二年 (1202) の祭りに幕府の奉幣使として大江広元が参向した記事があり、和田胤長の屋地が荏柄前にあったことも書かれている。

2．調査に至る経緯と調査経過

調査は、集合住宅建設に伴う発掘調査として実施された。西側の集合住宅の建築に際して発掘調査が行なわれ、多くの遺構が検出されていること

から試掘調査は行われなかった。残土を場内で処理するため、対象地を二分割して実施した。対象地西側のⅠ区は、2011年10月15日に表土を掘削機械で掘削して調査を開始した。同年12月23日に現地見学会を実施、12月28日に中世面のラジコン写真撮影を行なった。2012年2月2日に古代面のラジコン写真撮影を行なってⅠ区の調査を終了した。

Ⅱ区の調査はⅠ区の埋め戻し後に開始し、中世の・古代面のラジコン写真撮影を行い2012年3月18日に現地見学会を実施、2012年5月10日に全体の調査を終了した。

3．調査の概要

本地点の調査では、中世の包含層はほとんど失われ、僅かに中世基盤層上に攪拌された包含層が30cmほど残っている状況であった。そのため、井戸は検出されたが、鎌倉が最も繁栄した13世紀中頃以降の生活面や覆土は確認できなかった。調査の結果、古代から16世紀までの遺構が検出されているが、出土遺物の9割近くが13世紀前半までの遺物である。なお、遺物整理は進行中であり、中世の年代は大まかである。また中世遺構の基盤層（暗褐色粘質土）を掘り下げて、明茶褐色粘質土上面で確認した遺構は中世以前としてまとめている。

《中世》

15～16世紀

円形の深い土坑1基、井戸1基、土坑2基でⅠ区からⅡ区に広がりがある。円形の深い土坑の性格は井戸あるいはトイレと考えられる。

かわらけ皿、常滑甕片などが出土。

13世紀後半～14世紀

井戸4基と土器溜り1箇所が確認されている。井戸はⅠ区に2基、Ⅱ区に2基があり、Ⅱ区の井戸は隅柱横桟型と六角形の木組みを持つ井戸、Ⅰ区の2基は横桟支柱形構造である。

写真1　遺跡全景（中世面）

Ⅰ区の横桟支柱形構造の井戸底部から武具の籠手が出土し、他の井戸からはかわらけ皿や常滑窯製品、瀬戸窯製品の他に箸、漆器椀などが出土している。

13 世紀初頭～ 13 世紀中頃

生活面が良好に残り、本地点で中心を占める年代である。土丹（破砕泥岩）を使用した版築面、土丹敷き遺構 1 基、砂利を敷いた庭園状の遺構 2 時期、礎石建物 6 軒以上、木枠を持つ井戸 4 基、木枠を持たない井戸 4 基、円形の深い土坑（井戸かトイレ）8 基、工房の痕跡 1 箇所、かわらけ溜り数箇所、南北方向の区画溝 4 条、土坑・柱穴約 700 基が検出された。

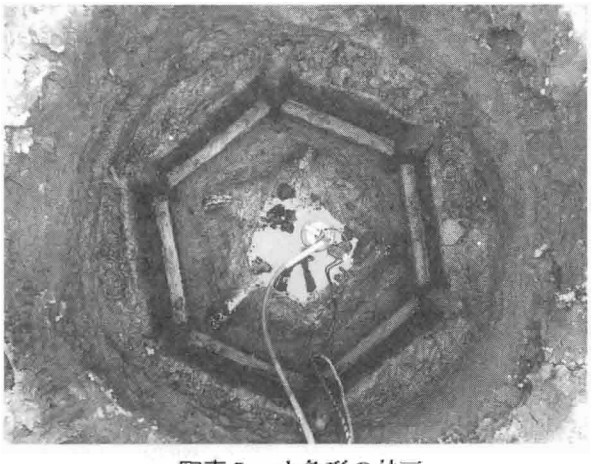


写真 2　六角形の井戸

遺物は京都系の手づくねかわらけ皿が最も多く、次いで常滑窯の甕、渥美窯の甕、中国製陶磁器、木製品の箸、下駄、板草履に芯、箆、形代、金属製品、石製品、スラグ等が出土している。

12 世紀末

Ⅰ区で円形井戸 1 基、Ⅱ区で溝 1 条が検出されている。遺構は 13 世紀前半に比べると極めて少ない。井戸は木組みが確認できなかった。遺物は井戸からかわらけ皿、箸、漆器片口等が出土している。

《中世以前》

およそ 11 世紀

河川が埋まった後に造られている断面 V 字形の

写真 3　遺跡全景（中世以前）

堀が検出されている。規模は上幅3.6m、底面幅45cm前後、深さ140cm。調査区の北東部から南西に走り、中央部で曲がり北の調査区外に延びている。屋敷等の区画である可能性を考えている。この堀は中世の基盤層に極似する土で埋まっている。埋没した後に一帯が水田になり、中世の基盤層が堆積したと考えている。

およそ9世紀～10世紀

11世紀の堀の南、調査区東壁の近くで素掘りの井戸が検出されている。平面形は隅丸方形に近く、規模は一辺100cm前後、下部は60cmで深さ124cmを測る。覆土からは灰釉陶器、足高高台の鉢、足高高台の坏、ロクロ土師器皿などがまとまって出土している。墨書が多く「南」、「中万」などの文字が判読できた。これらの遺物は、村落内の寺院から出土する遺物に共通点が多いとの指摘も受けている。

また、河川もこの時代には存在していたと考えている。河川は敷地内の北東から北南西に向かって流れ、調査区中央近くで11世紀の堀と交差して調査区北西に向かっている。堆積状況から、人工的に埋められた可能性が高い。埋められた土から8世紀から9世紀頃の多量の土器、須恵器、カマドの部材、木製品の下駄、円盤状木製品等が出土している。この河川を埋めるに際して、近くの集落（微高地）を壊した可能性が考えられる。

およそ8世紀～9世紀

Ⅰ区から竪穴住居1軒と掘立柱建物（二間×三間）1軒、土坑1基が、Ⅱ区から竪穴住居址1軒、竪穴状遺構1軒が検出された。竪穴状遺構を除き河川の南側に集中する。この内土坑が最も新しく9世紀の土器がまとまって出土している。この時期には河川が機能していたと考えている。

4．まとめ

発掘調査の結果多くの新発見があり、今後明らかにすべき問題点も見つかった。新発見は、中世

写真4　中世以前の井戸（9～10世紀頃）

写真5　竪穴住居址（8～9世紀頃）

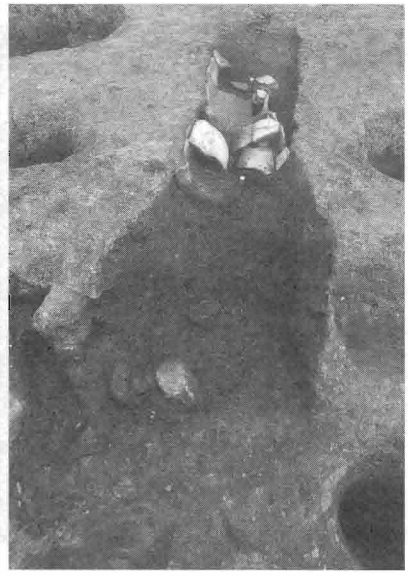


写真6　竪穴住居址のカマド

では 12 世紀末から 13 世紀第 1 四半期頃の良好な土器一括資料が多く得られたことである。このうち、12 世紀末の一群は鎌倉で最も古い土器群になる可能性が強い。頼朝が鎌倉に入った頃の土器様相が判明することで、これまでに実施された調査の成果を再検討することも可能になり、鎌倉の調査にとって極めて重要である。また、古代では 8 世紀から 11 世紀にかけての土器・陶器が少量ながら出土し、細々ながら連続した生活・土器様相が確認できたことである。

問題点は、中世では検出遺構の性格、古代では 11 世紀の堀の存在である。13 世紀前半の遺構群については、調査者の意向を曲解して「北条政子の屋敷」が見つかったという新聞報道もされた。出土遺物から有力者が 12 世紀末に居住していたことは十分に考えられるが、大倉幕府の位置が特定できていない現状での大胆な推測には危惧を感じている。早急に大倉幕府跡の範囲確定などの学術的な調査が必要であろう。11 世紀の堀は、荏柄天神社の西下一帯を囲むように延びている可能性がある。仮に屋敷地が存在した場合、11 世紀の屋敷的な空間や 10 世紀の村落内寺院の存在をどう解釈するのかなど大きな問題を含んでいる。都市鎌倉の成立前後を考える場合、大倉幕府跡の範囲の確定と共に大倉・荏柄地域の解明が重要になる。

川崎市　下作延巳ノ谷遺跡 第8次調査

－古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡と中世建物跡－

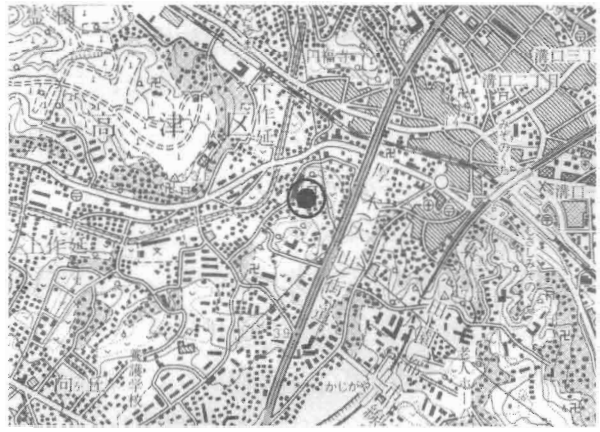
大坪 宣雄

所 在 地　川崎市高津区下作延4丁目535番1外
調査機関　有限会社 吾妻考古学研究所
調査担当　大坪宣雄
調査原因　集合住宅建設工事
調査期間　2011年11月27日～2012年2月1日
調査面積　約700㎡

1．遺跡の立地

下作延巳ノ谷遺跡第8次調査の調査地点は、川崎市高津区下作延4丁目535番地1外7筆に所在する。本地点の北西側500mにはJR南部線津田山駅、東側700mには東急田園都市線溝の口駅、JR南部線武蔵溝ノ口駅が位置し、南側では国道246号線が南北方向に走っている。東急田園都市線梶が谷駅付近が丘陵の頂部にあって、その付近から北側に向かって傾斜する斜面から突出する半島状の丘陵支脈の突端に本遺跡は位置し、北側には多摩川の支流である平瀬川が東西方向に流れている。

本遺跡の周辺には多摩丘陵と多摩川及び多摩川の支流によって形成された谷戸地形の複雑に開析された立地を呈していることもあって、遺跡の豊富な地域である。旧石器時代の遺跡の調査例は少ないが、縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時の遺跡と多くの遺跡が所在している。付近の遺跡には、弥生時代、古墳時代～奈良・平安時代の集落遺跡があり、下作延巳ノ谷遺跡第1次調査、第3次調査、第4次調査、第5次調査、第6次調査、第7次調査、下作延神明神社東南遺跡、南谷一遺跡などが調査されている。



第1図　遺跡の位置（1/25,000）

2．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、集合住宅建設に伴い、平成23年9月26・27日にかけて川崎市教育委員会によって試掘調査が行われ、その調査結果に基づいて本調査が実施されることになった。

調査は、樹枝状に派生した丘陵の突端部の西側斜面に立地し、平成22年度に行われた第6次調査区の直ぐ南側に位置する。調査区は市道を挟んで南北に分けられ、北側をA区、南側をB区とした。調査区は残土を置くスペースが少ないため、調査区を2分割して行う打って返し方法により行った。調査範囲は約700㎡である。調査は平成23年11月27日よりA区（斜面上方）から重機による表土剥ぎを開始した。A区は耕作によるローム層までの削平が著しく、検出された住居跡の大半が床面まで削平されていて、周溝や柱穴・貯蔵穴の位置関係によって規模や竈の位置などが確認されるという状況であった。検出された遺構は、古墳時代後期～奈良時代にかけての住居跡が5軒、縄文時代の陥し穴2基、この他に土坑・ピットがある。A区（斜面下方）の調査は平成24年

１月５日より重機による盛り土の移動、続いて表土剥ぎを開始した。耕作によるローム層までの削平は少なく、住居跡の覆土が確認されたが、さらに斜面下方では重機による削平が激しく、柱穴と思われるピットのみが確認されるという状況であった。検出された遺構は、重複する古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡が２軒、縄文時代の陥し穴５基、この他に土坑・ピットがある。

Ｂ区（斜面下方）の調査は平成 23 年 12 月８日より表土剥ぎを開始した。遺構の精査・確認作業を行ったが、重機によるローム層までの天地返しが激しく行われ、ローム層面にバックホーの爪痕が多数みられた。確認された遺構は、南北 10 m×東西 12 mの大型の遺構プランが検出され、精査確認時に出土したかわらけ、滑石製石鍋などにより中世の遺構であることが確認された。遺構の掘り下げにつれて、当時としては貴重品である中国製青磁碗の破片や、白磁碗・青白磁碗の破片、褐釉瓶子など鎌倉時代に輸入された陶磁器製品が出土した。生活用品である常滑窯産こね鉢・甕、山茶碗、かわらけなども出土し、その他に鉄製品北宋銭２枚が出土している。中世建物の調査は、平成 24 年１月 19 日に終了し、建物跡に重複する古墳時代後期の住居跡１軒、縄文時代の陥し穴３基、この他に溝・土坑・ピットがある。

調査は平成 24 年２月１日に、教育委員会・事業者の立ち会いのもとに最終確認を行い、全ての調査を終了した。

３．調査の概要

（１）縄文時代

縄文時代の遺構は、Ａ・Ｂ区の西向きの緩斜面に広く分布する陥し穴 10 基が検出されている。平面形は隅丸長方形を呈し、全ての陥し穴の底面には大きさや形状が様々なピットがみられる。大きさは長軸 1.3 m前後の中型のもの４基、長軸 1.0 m前後の小型のもの６基に分類される。

（２）古墳時代後期～奈良・平安時代

古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構は住居跡８軒が検出されている。住居跡の多くは耕作により削平されていて、規模が判明するものや遺物が出土している住居跡は少ない。比較的遺存度の高い住居跡は、古墳時代後期～末葉に所属すると考えられる SI06 があり、耕作による撹乱と地形の傾斜によって南西コーナー部付近が削平され、平安時代に属する SI07 とは重複関係にあり、南西コーナー部付近が壊されている。

住居の大きさは東辺 6.2 m、北辺は 5.55 mまで確認され、長方形を呈するものと考えられる。竈は現況では判明せず、SI07 によって壊されている可能性があり、竈の位置は不明である。柱穴は４本の主柱穴が確認され、周溝は壁に沿って北東コーナー部の一部を除いてほぼ全周している。貯蔵穴の位置も不明である。住居からの遺物の出土量は多く、土師器坏 11 点、土師器甕２点、土師器鉢形土器１点、土錘２点、砥石１が出土し、放射状の暗文が施文された土師器坏が４点出土している。出土した遺物からみて、本跡は古墳時代後期～末葉、７世紀後半～末頃に帰属すると考えられる。

（３）中 世

中世に属する遺構は TA01 と周辺に付随する雨落ち溝・土坑・ピットなどからなる。

本跡は、丘陵の緩斜面を竪穴状に削平して、掘立柱建物跡及び付属施設を構築している。竪穴状削平面は東西方向に 8.5 mまで、南北方向は 7.5 mまで確認され、西側は緩斜面となり範囲は不明である。東側はゴミ穴と考えられる２基の土坑によって、竪穴状の落ち込みが変則的な形状を呈している。

主要建物は、東西方向で柱間 3.0 m、2.5 m、3.0 mの３間取りの建物が想定され、南北方向は柱間 2.5 m、2.0 mまでの間取りが確認され、北

辺と東辺には柱間1.0 mの廂部分が巡る。西側については不明である。建物内の床面は比較的堅く締まった硬化面となり、建物の周辺には最大幅30 ㎝の雨落ち溝が巡り、東辺と北辺の一部に確認される。付属の施設としてはゴミ穴と考えられる土坑2基が東側に作られる。用途不明の円形土坑P01などがみられる。

本跡からの出土遺物には、かわらけの他、中国龍泉窯で焼成された青磁碗の破片や、白磁碗・青白磁碗の破片、中国南部で焼成された褐釉の瓶子など鎌倉時代に輸入された陶磁器製品が出土した。生活用品である滑石製石鍋、常滑窯産こね鉢・甕、山茶碗、伊勢系土鍋なども出土し、その他に用途不明の大型鋳造鉄製品、鉄鏃2点、刀子2点、鉄鈴1点、鞴口片などが出土し、砥石4点も出土している。経済活動の証拠となる北宋銭2枚（治平元寶・元祐通寶）も出土している。

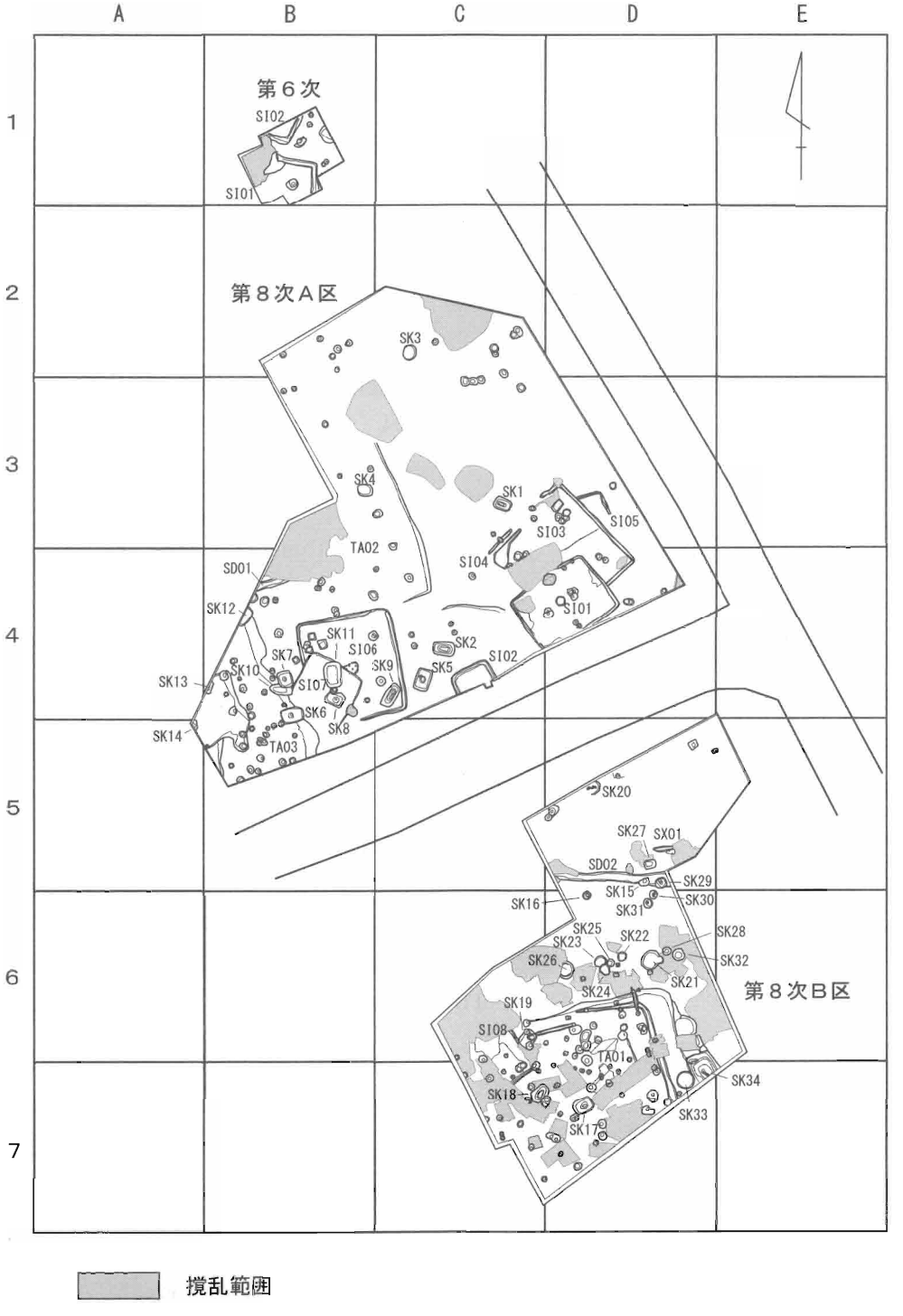
4．まとめ

これまでの下作延巳ノ谷遺跡の調査では、遺跡の主たる時期は縄文時代、弥生時代～古墳時代初頭、古墳時代後期～末葉、奈良・平安時代の遺跡として考えられてきたが、第8次調査になって始めて、中世期の明確な遺構が発見され、これまでの知見を覆し、新たな視点によって中世期の遺跡の存在の見直しを迫られることになった。調査結果からみて、中世期の全ての遺構を発掘することが出来ていない現状では、遺跡の広がりから考えて今後の開発に伴う発掘調査ではこの点に留意することが必要と考えられる。

今回の調査で発見された中世の建物跡の性格は、出土遺物からみると、幾つかの特徴があげられる。一つは、中国製磁器－龍泉窯青磁碗・景徳鎮窯青白磁碗・定窯白磁碗、中国南部諸窯の製品である褐釉陶器瓶子など一般庶民では取得が不可能な中国輸入陶磁器を所持している点、鉄鏃・刀子などの鉄製の武具や、牛馬の装飾品又は寺社の祭祀用と考えられる鉄鈴の出土、硬化した土間の広がりや鞴口の出土、大型の砥石2点を含む4点の砥石出土からみて鍛冶工房の鉄器製作を生業としている可能性も含まれる点など、多様な側面を見せている。遺物からみた建物跡は、かわらけの年代感からみて、13世紀～14世紀にかけての鎌倉時代に相当するものと考えられる。

建物の特徴は、恐らく200 ㎡以上にも及ぶ斜面を竪穴状に掘削して平坦面を造り出す造成作業が行われ、東西方向で3間の掘立柱からなる建物が造られ、南北方向は調査区外にまで延びるため不明である。掘立柱は礎石・根石などはなく、素掘りの柱穴の深さは70～80 ㎝と比較的深いものが多くみられる。東側と北側には幅1 mの廂が確認されている。建物の内部は、今回の調査範囲では土間と考えられる硬化面の広がりがほぼ全面に渡ってみられ、東西方向のP15・P14・P03・P28の柱列から南側が板の間と考えられる。土間の面は天地返しの掘削により土間にあった設備の多くは壊されている考えられるが、黄白色粘土の塊が二箇所で確認されており、竈の粘土構築材の残骸と考えられる。建物外側の設備としては、建物の外側に雨落ち溝が巡っている。北辺側は変則的な配置で、一部途切れている箇所がみられる。東辺の竪穴状の掘削は、2基が並んだ大型の円形土坑と長方形土坑が造られており、民俗的な資料からみて、ゴミ収蔵の施設と考えられる。この他、径1 mを測るSK33の円形土坑とSK26の円形土坑は、底面の際に幅1 ㎝ほどの溝が巡っており、木桶が据えられた施設と思われ、天水の水溜施設と考えられる。

歴史的な裏付けとなるこの地域の中世期の文献等の資料は皆無で、伝承についてこの地域には「正安寺」の字名が残っており、この付近を寺院地として経営する有力者の存在を推測する程度のことしか知り得ていない。



撹乱範囲

第２図　下作延巳ノ谷遺跡 第６次・第８次調査 遺跡全体図（1/400）

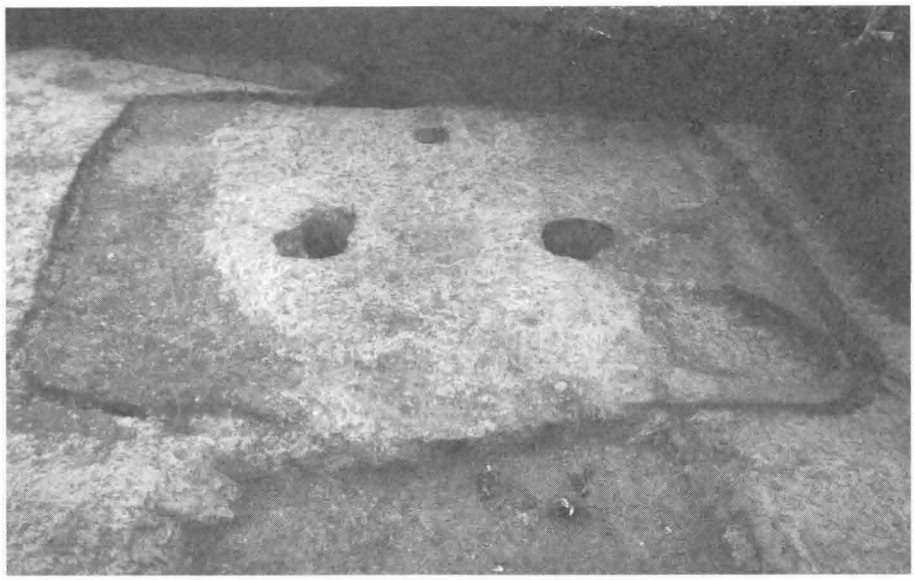


写真1　SI 01 全景写真（北より）

写真2　SI 06・SI 07 全景写真（西より）

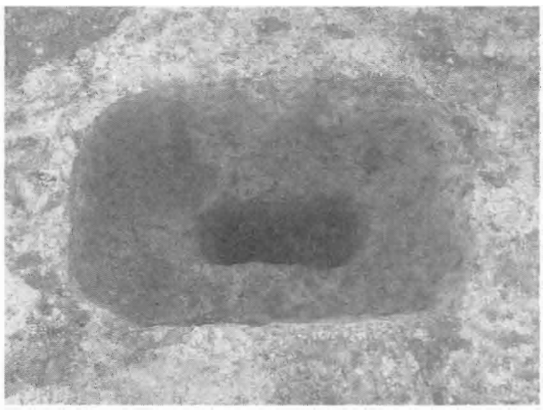


写真3　SK 01 全景写真（北東より）

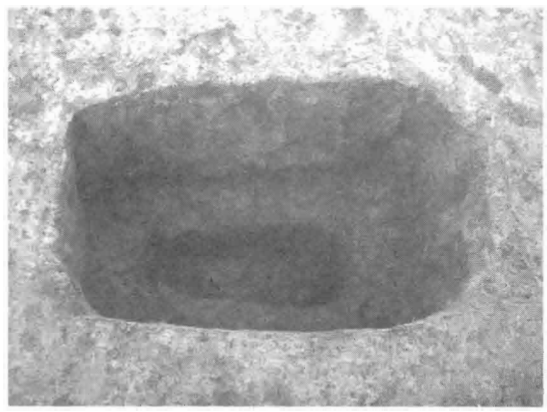


写真4　SK 02 全景写真（南より）

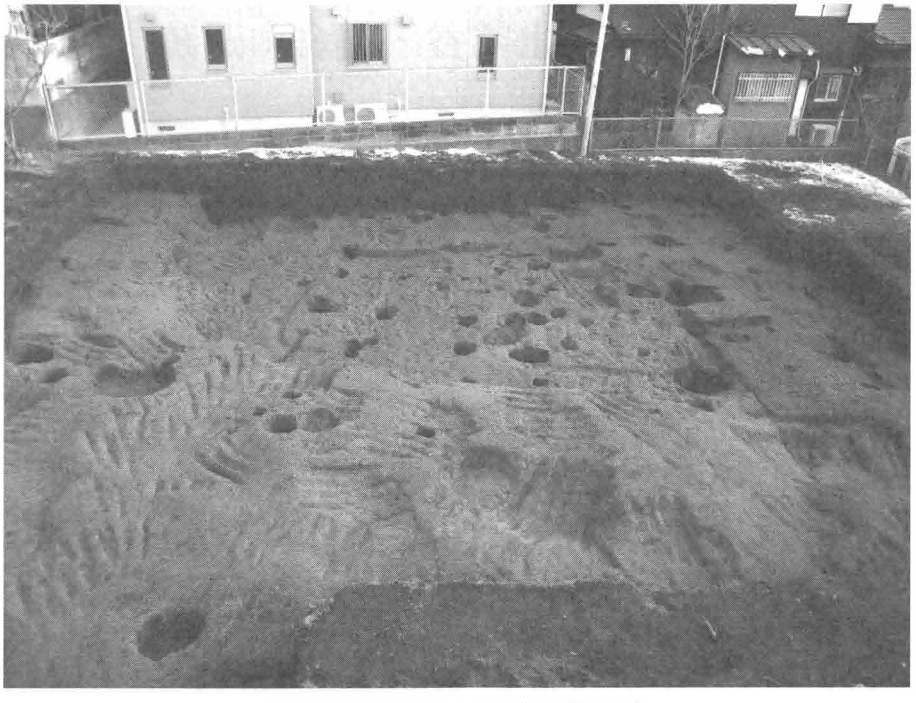


写真５　TA 01 全景写真（北より）

写真６　TA 01 中国製陶磁瓶子出土状況

写真７　TA 01 滑石製石鍋出土状況

写真８　TA 01 古銭（治平元寶）出土状況

写真９　TA 01 かわらけ出土状況

伊勢原市　上粕谷・石倉中遺跡

― 大山道周辺部の発掘調査 ―

天野 賢一

所 在 地　伊勢原市上粕屋・石倉中 1475-4
調査機関　公益財団法人 かながわ考古学財団
調査担当　天野賢一・小西絵美・砂田佳弘・布川豊治
調査原因　県道 603 号 (上粕屋厚木) 整備事業に伴う発掘調査
調査期間　2011 年 1 月 5 日～ 2011 年 2 月 15 日
調査面積　412 ㎡ (2010 年度)・1621 ㎡ (2011 年度)

1．遺跡の立地

遺跡は大山裾部の伊勢原市上粕屋地区に広がる丘陵地帯に所在する。地形は、大山に源流を持つ鈴川の左岸にあたり、標高 80 m前後の幅広い台地の緩やかな斜面になっている。

調査地点は、大山に至る県道が交差する石倉橋交差点に近接しており、この付近は、古くから青山道や田村道などと呼ばれる各方面に延びる大山道が交差する交通の要衝であった場所である。調査地点の西側を通る県道 611 号 (大山板戸) は伊勢原台地の南方から大山へ至る主要なルートであり、大山信仰と密接に関わる街道として古くから交通の要衝となっている。

本遺跡を含む伊勢原市№ 40 遺跡は、東名高速道路を挟み南北約 2.0 ㎞、東西約 0.9 ㎞の広範囲に及び、同遺跡内では東名高速道路建設事業に伴って上粕屋・〆引東遺跡や上粕屋・〆引南遺跡、三ノ宮・下御領原遺跡などの発掘調査が実施されている。調査地点の周辺には、産業能率大学の新校舎建設に伴って発掘調査が行われた御伊勢ノ森遺跡や同大学の敷地内に位置する神成松遺跡をはじめ、松山古墳や心敬塚古墳といった古墳時代の墳墓、北条政子の建立と伝えられる浄業寺跡、上粕屋神社や太田道灌の墓とされる洞昌院などがあり、歴史的な環境が色濃く残る地域となっている。

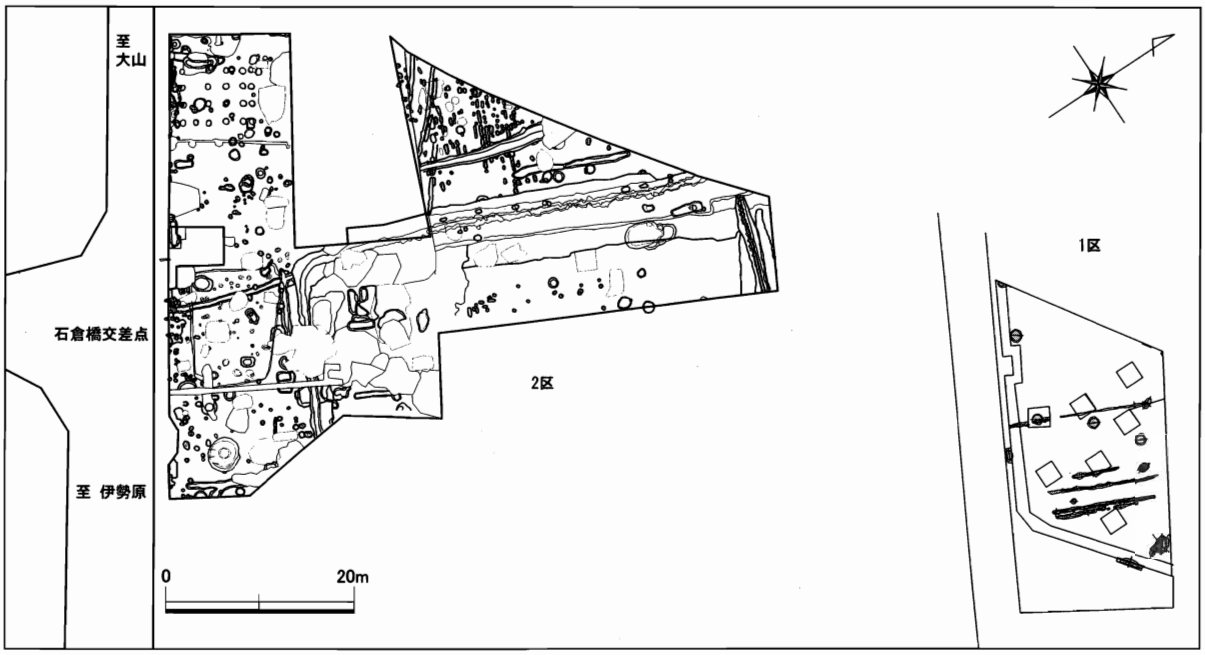
第１図　遺跡位置図（1/50,000）

遺跡からは大山の雄大な姿が目前に眺望できる。また調査区の近傍に所在する石造不動明王の載る道標は、大山詣の帰路の道標と言われており、青山・平塚・江の島など各方面の表記が見られる。

2．調査に至る経緯と調査経過

発掘調査は、神奈川県広域幹線道路事務所による県道 603 号 (上粕屋厚木) 整備事業に伴うもので、開発計画にあたり平成 21 年度に実施された試掘結果に基づいて、今回の本格調査に至っている。

調査区は工程上の制約などから 2 地点に分かれ、平成 22 年度の調査区を 1 区、平成 23 年度の調査区を 2 区と呼称した。



第２図　１区・２区調査区配置図

３．調査の概要

2010 年度（１区）と 2011 年度（２区）の調査により、縄文時代・古代・中世・近世以降など、各時代における遺跡の具体的な広がりを捉えることができた。

発見遺構は、近世以降の礎石建物・竪穴状遺構・地下式坑・井戸・便所・焼土跡・土坑・ピット・溝・道状遺構、中世の道状遺構・土坑・ピット・畝状遺構、奈良・平安時代の道状遺構・土坑・ピット、縄文時代の土坑・遺物包含層などである。出土遺物は、近世以降の陶器・磁器・金属製品・石製品・土製品、縄文時代の土器・石器などである。

近世以降

礎石の柱を持つ建物跡と竪穴状遺構、溝や土坑などの他、井戸や地下式坑と呼ばれる貯蔵施設が発見されている。

便所跡では便槽に使用されていた甕の中からは花や鳥などの美しい文様が描かれた染付便器が出土している。

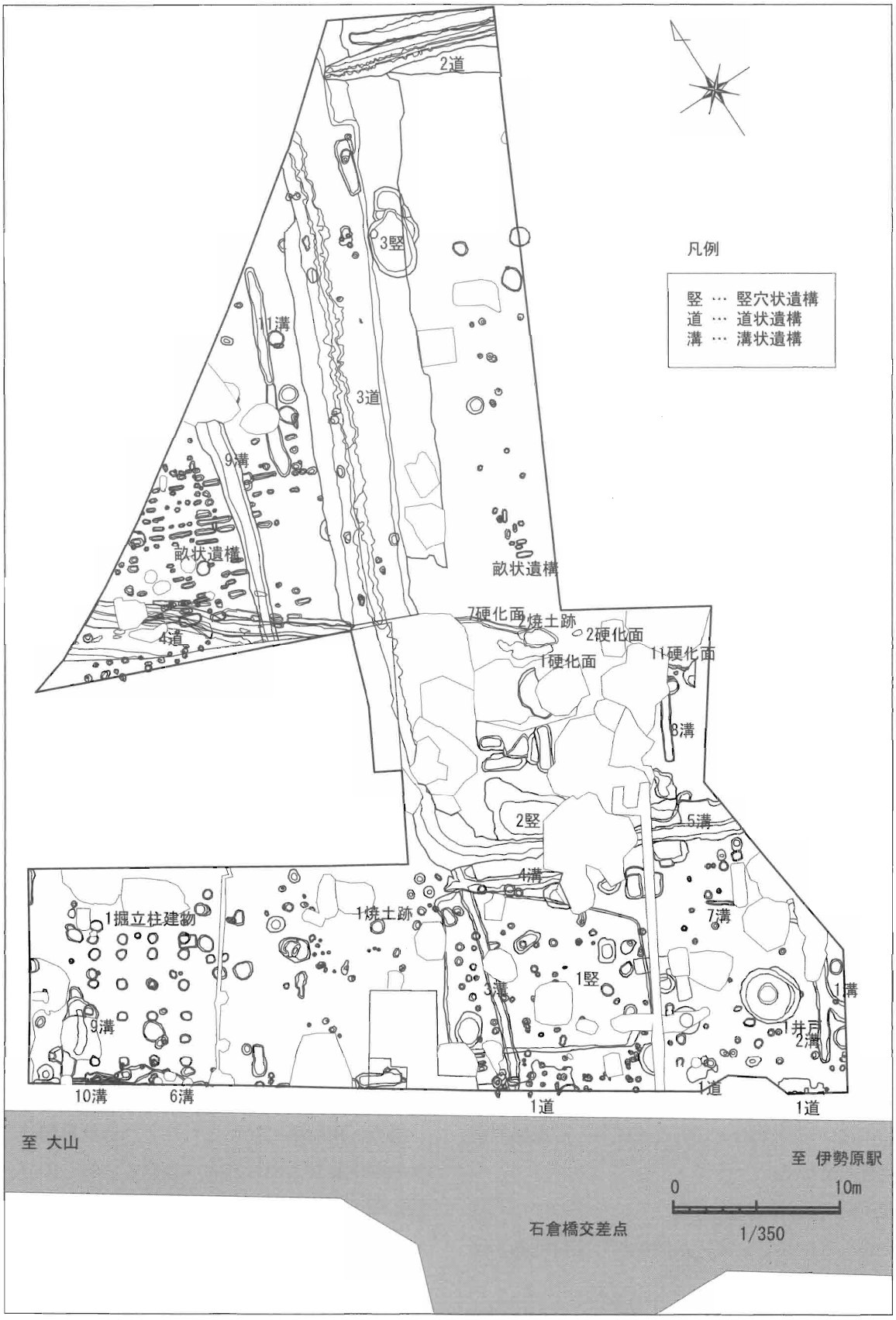
調査区の中央部では、幅４～５ｍの大規模な道状遺構が延長 50 ｍほど発見されている。断面形態は逆台形で、部分的に硬化面が認められたこと、南側は溝状遺構と重複していることなどの特徴が認められるが、北側は調査区外へ展開していることから全容は明らかではない。出土遺物は 18 世紀代の陶磁器類が主体であることから、道状遺構は、近世の大山道に関係する遺構であると考えられる。

中 世

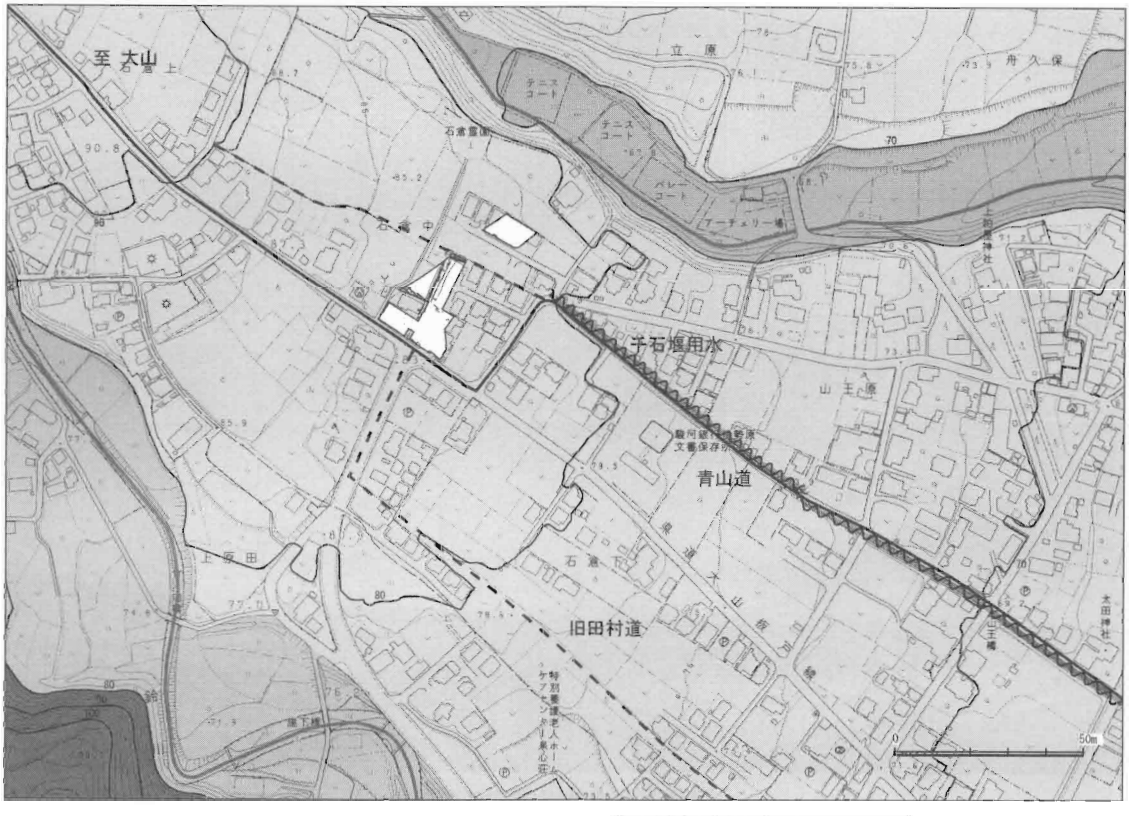
１区では地下式坑の縦坑に類似する大きな穴が発見された。貯蔵施設である可能性が考えられるが、遺物が伴わないため具体的な機能や時期は明らかではない。

２区では畑地の痕跡である畝状遺構が多数発見されている。

調査区東端部で発見された２号道状遺構は、帯状の硬化面が大山の方向へ延びているもので、片側に側溝を有すること、側溝には礫や砂粒が堆積し、水流があった痕跡が認められること、中世の渡来銭が出土していることなどの特徴がある。側溝は近隣を流れる現在の千石堰用水の古い経路である可能性も考えられる。調査区外へ展開してい



第3図　2区調査区全体図



第４図　調査区周辺の大山道及び道状遺構想定経路（1 / 2,000）

るため、規模などの全容は明らかではないが、中世の道として捉えられ、周辺地域への展開や広がりが考えられる。

古代（奈良・平安時代）

畑作などの関連施設と考えられる円形土坑が複数発見されていることから土地利用は耕作地が主体的であったと考えられる。２区では古代の地層から道状遺構が発見されている。特徴は幅 0.3 m の固く踏みしめられた硬化面が複数並ぶものである。硬化面がなぜ複数並んでいるのか、機能や時間の差違などが想定できるが、遺物は出土しておらず構築時期や変遷など具体的な年代は明らかではない。

縄文時代

早期の撚糸文系土器・中期土器・後期土器などと石器が出土している。特に早期の撚糸文系土器はまとまった出土で出土事例としても好例である。ローム面では、落とし穴が複数発見されており、狩猟場としての土地利用が考えられる。

4．まとめ

伊勢原市及び周辺地域は近世大山詣で賑わった地域である。そして大山に向かって関東一円から大山道が広がっている。今回の調査では、近世・中世・古代など各時代の道状遺構が発見された。いずれも大山に繋がる山麓の道と考えられ、大山と密接な関連が想定できるが、特に近世の３号道状遺構は、大山道に直接関連するものとして考えられる。また２号道状遺構は中世の所産として捉えられるものであるが、近世大山道の主要な路線である青山道の古期の経路であった可能性も考えられる。

調査地点付近は、現在でも各方面からの道路が交差する地点であり、古くからこのあたりは交通の要衝であったことが調査成果からも裏付けられる。そして建物跡などの土地利用の様子と道状遺構の具体的な経路の一部を確認できたことは、調

写真1　遺跡周辺航空写真

写真2　調査区西側完掘状況（近世以降）

写真3　調査区東側完掘状況（近世以降）

査成果として特筆されるものである。今回発見された複数の道状遺構は、古代～現代まで連綿と続く道の移り変わりを捉える上でも、多くの手がかりを示す重要なものである。

遺跡周辺には、平安時代の延喜式神名帳に記載されている式内社である大山阿夫利神社や鎌倉時代源頼朝の正室であった北条政子が頼朝の三回忌に建立したといわれる浄業寺などが所在し、交通路も整備されていたと考えられる。今回の調査では、その一端を捉えたに過ぎないが、広い視点から多角的に分析をしていく必要がある。

註　遺跡の内容は調査終了時点のもので、出土品整理において、評価や呼称を変更する場合があります。

写真４　竪穴状遺構（手前）・建物跡（奥）

写真５　建物跡の柱穴配置（近世以降）

写真８　４号道状遺構（奈良・平安時代）

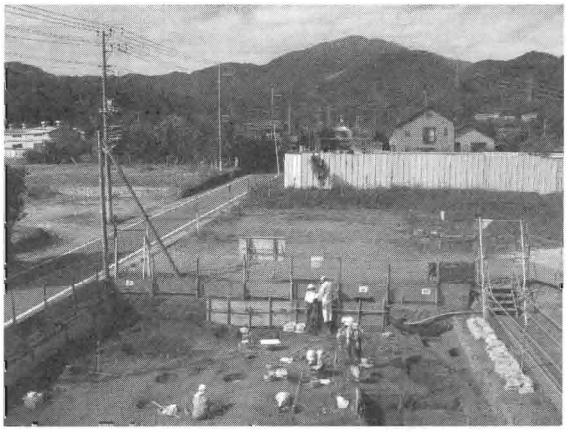


写真６　調査区東側完掘状況（近世以降）

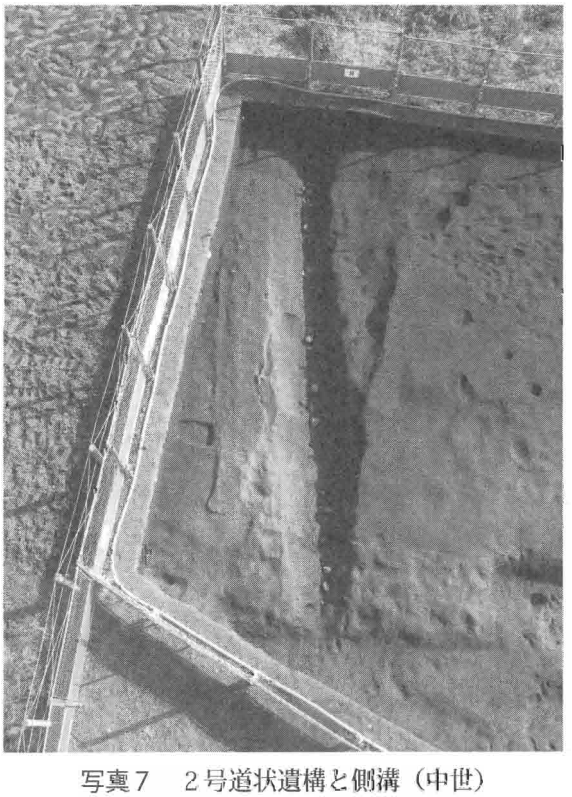


写真７　２号道状遺構と側溝（中世）

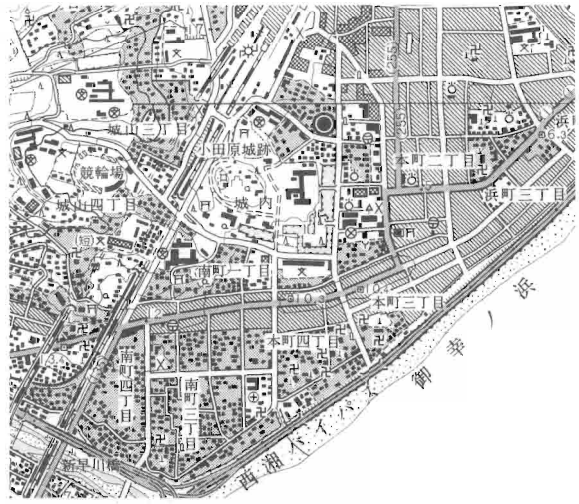
写真９　便所跡（明治後期以降）

小田原市　小田原城（おだわらじょう）三の丸幸田口跡（さんのまるこうだぐちあと）第Ⅶ地点

― 江戸中後期遺構群および江戸前期石垣付堀と戦国期障子堀の調査 ―

太田（おおた）雅晃（まさあき）

所 在 地　小田原市栄町1丁目670番5
調査機関　株式会社 玉川文化財研究所
調査担当　太田雅晃
調査原因　（仮称）セルアージュ小田原新築工事に伴う発掘調査
調査期間　2011年11月2日～2012年1月27日
調査面積　約1740㎡（290㎡×6面）



第1図　遺跡の位置（1/25,000）

1．遺跡の立地

小田原城三の丸幸田口跡第Ⅶ地点はJR小田原駅の南西約0.4㎞に位置する。幸田口門から二の丸へと至る登城路の途上に位置しており、江戸時代の虎口の名残である鉤状の小路の西側に面している。当該地を絵図で確認すると、加藤図～享保図（1614～1730）までは「侍屋敷」「伊坂文左衛門」など屋敷地および人名で表記されているのに対して、天保図（1839）以降では「御縄事」、「□□□□西役所」など施設名が並んでおり、当該地は永らく武家屋敷地として利用されていたものの、江戸の後期では施設地に変化していた様子が窺える。

周辺の調査事例としては、本調査地点の東側対面に江戸時代初頭の堀・石垣・石組・井戸などを検出した山本内蔵邸跡第Ⅸ地点（山口2009）、同じく堀の法面および石垣・石組みを検出した山本内蔵邸跡第Ⅹ地点（大島2005）がある。また、北側では大森期（15世紀代）の溝・戦国期の堀・近世三の丸北堀南側法面・石組水路・石垣などを検出した幸田口跡第Ⅰ地点（小林2003）、中・近世の溝・土坑を検出した幸田口跡第Ⅲ地点、中・近世の溝・石列・段切状遺構を検出した幸田口跡第Ⅴ地点などがある。

2．調査に至る経緯と調査経過

今回の発掘調査は、（仮称）セルアージュ小田原新築工事に伴う発掘調査として、株式会社玉川文化財研究所が実施したものである。調査に先立つ小田原市文化部文化財課の試掘調査で近世の遺構が検出されており、また隣接地の調査から下層に江戸時代初頭の堀が存在する可能性が想定された。

調査は調査区を東西に二分割して行い、東側を1区、西側を2区として、1区から調査を開始した。調査の結果、6期の遺構検出面を確認した。主な遺構としては、第2面で切石および転石を使用した南北方向の石垣（1号石垣）・石敷き遺構、第3-1面で竪穴状遺構・溝・石組水路、第3-2面で南北方向の石垣付の堀（1号堀）、第4-1面で溝・砂利敷遺構、第4-2面で東西方向の障子堀（2号堀）・井戸・溝・ピット群を検出している。

3．調査の概要

第１面（近代）

暗灰褐色のシルト質土が面的に展開していたが、遺構は検出されなかった。

第２面（近世・18 世紀）

江戸時代中期の石垣１基、石列１条、礎石11基、石敷遺構１基、土坑３基、ピット13基を検出した。１号石垣はこの面において確認したが、掘り方出土の遺物や根石の形状から、その構築年代は 17 世紀後半に遡る可能性がある。１号石垣の東側には石の種類や積み方の異なる１号石列が併走しており、１号石垣を片側の側壁として石組水路を構成している。覆土からは金線サイダーの瓶が出土しており、水路としては近代まで使用されていたと考えられる。

第３-１面（近世・17 世紀）

江戸時代前期の竪穴状遺構２基･石組水路１基、礎石１基、溝４条、土坑 16 基、ピット 30 基を検出した。主な遺構は西から北へ鉤状に延びる１号石組水路（暗渠）で、木製の樋・風祭石を主とした切石積・五輪塔や瓦、礫を転用した石積の３部構成となっている。五輪塔の中には未成品も幾つか含まれている。

第３-２面（近世・17 世紀前半）

江戸時代初～前期の石垣付堀１条を検出した。南北方向に展開する堀で、調査区内で検出した幅はおよそ９ｍである。今回の調査で西側の法面および肩口を確認できた。石垣は１ｍ大の転石および割石を南北に連ねたもので、石の大半は崩れて帯状に集積していた。掘り方は現況約４ｍで、20 ㎝大の河原石が厚さ約２ｍにわたって充填されていた。裏込石は崩れた石垣の下に潜り込んでおり、掘り方が大きすぎる点も考慮すれば、地震などの影響によって東西方向に石垣が崩れたと想定できる。安全の都合上、地表下約５ｍ掘削した時点で調査は終了したが、裏込めはまだ下に続いていた。また、堀の西側にあたる２区では遺構が検出されず、層厚 15 ～ 20 ㎝の黒褐色の硬化面が展開していた。

第４-１面（中世・16 世紀末）

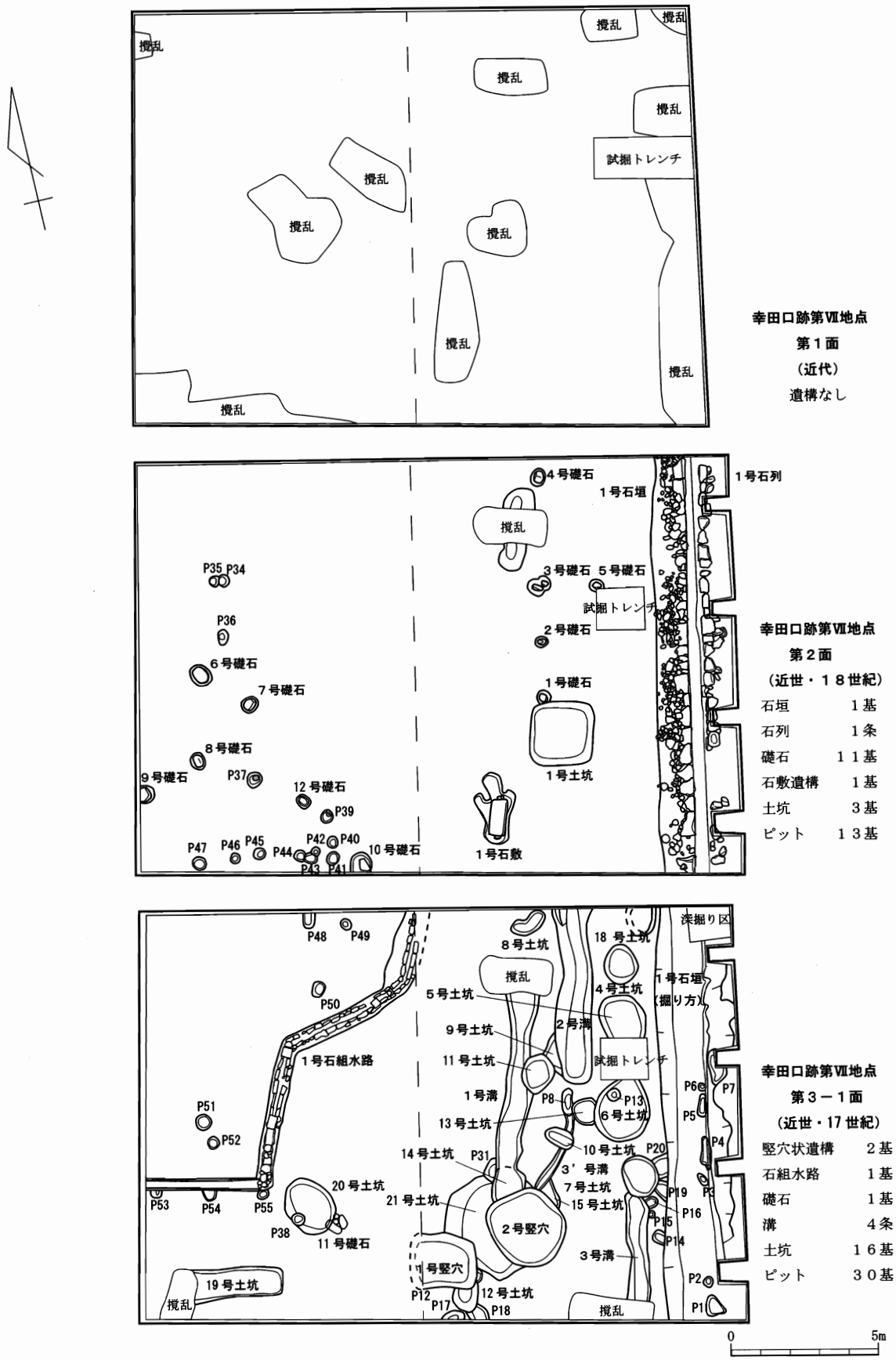
中世末～江戸時代初期の溝２条と礎石７基、砂利敷遺構３基を検出した。

第４-２面（中世・16 世紀後半）

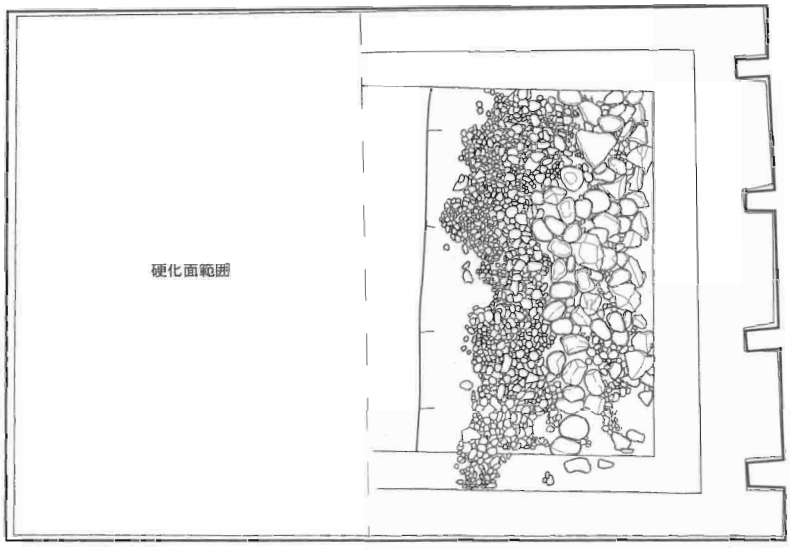
中世後半頃の障子堀１条、井戸２基、溝６条、ピット 15 基を検出した。このうち、２号堀は東西方向に展開する堀で、調査区内で検出した堀幅はおよそ７ｍである。今回の調査で北側の法面および肩口を確認できた。覆土には有機物を多量に含んだ粘質土が入っており、検出面からおよそ１ｍ下がった地点で田の字に展開する障子を検出した。なお、障子の桟とほぼ同じ高さの覆土中から略完形のかわらけが複数枚まとまって出土しており、その編年から 16 世紀後半（天正年間か）の埋没年代が想定された。ほか井戸２基、溝６条などを検出しており、なかでも２号井戸は多くの木製品が出土した。

4．まとめ

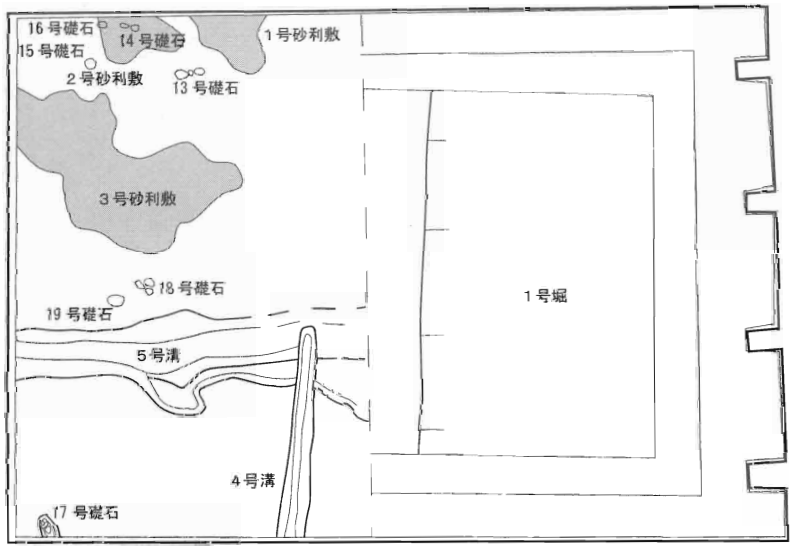
今回の調査では江戸時代中後期の遺構群、江戸時代初頭～前期の石垣付堀と戦国期の障子堀を検出した。このうち１号堀は古絵図に存在せず、加藤図（1614 ～ 1631）以前の幸田口門の構造を検討する材料の１つとなっている。対面に位置する山本内蔵邸跡を含め周囲を広く検討していく必要があろう。また、田の字の障子堀は小田原城で２例目、低地では初の発見である。二の丸蓮池に沿って展開しており、小田原北条時代の縄張りを解明する手がかりとなる可能性がある。



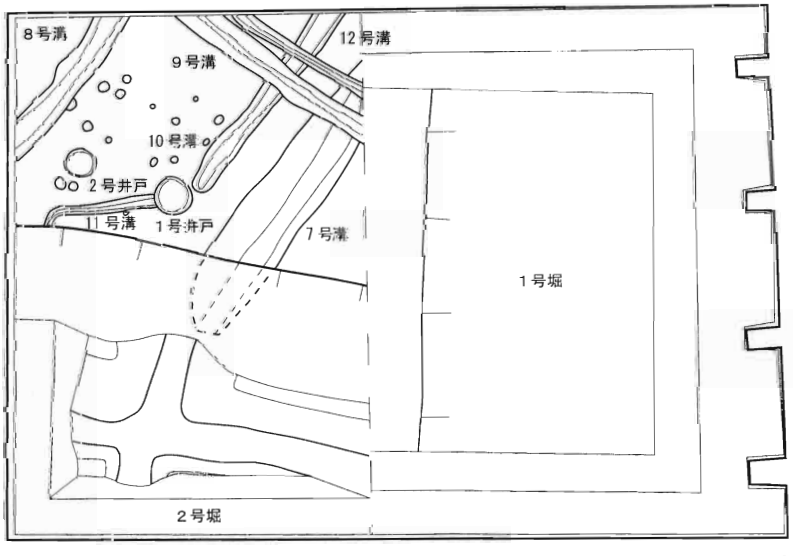
第２図　近代～近世遺構配置図（１：200）



幸田口跡第Ⅶ地点
第３－２面
（近世・17 世紀前半）
石垣付堀　１条
硬化面　　１面



幸田口跡第Ⅶ地点
第４－１面
（中世・16 世紀末）
溝　　２条
礎石　　７基
砂利敷道構３基



幸田口跡第Ⅶ地点
第４－２面
（中世・16 世紀後半）
障子堀　　１条
井戸　　２基
溝　　６条
ピット　１５基

0　5m

第３図　近世～中世遺構配置図（１：200）

写真1　1区第2面全景（西から）

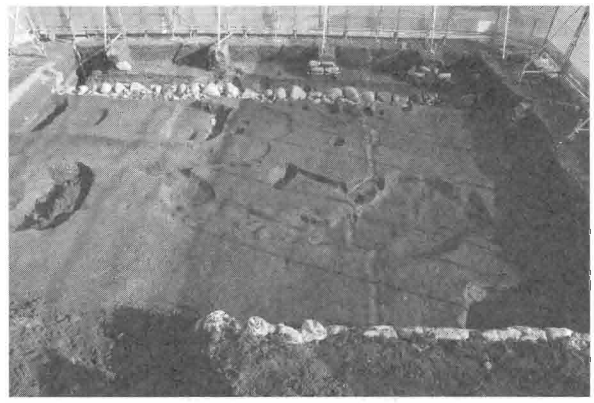


写真2　1区第3-1面全景（西から）

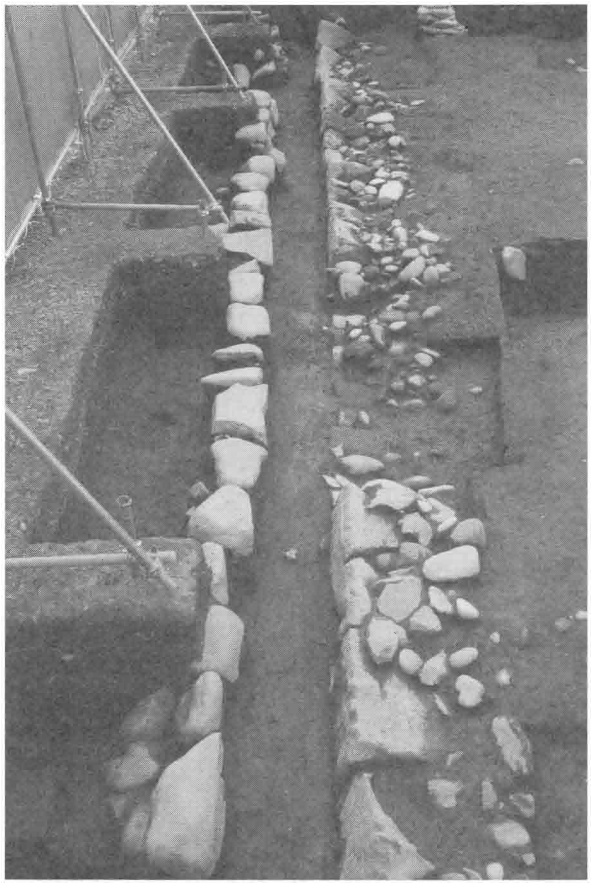


写真3　1号石垣1段目（右）・1号石列（左）全景（北から）

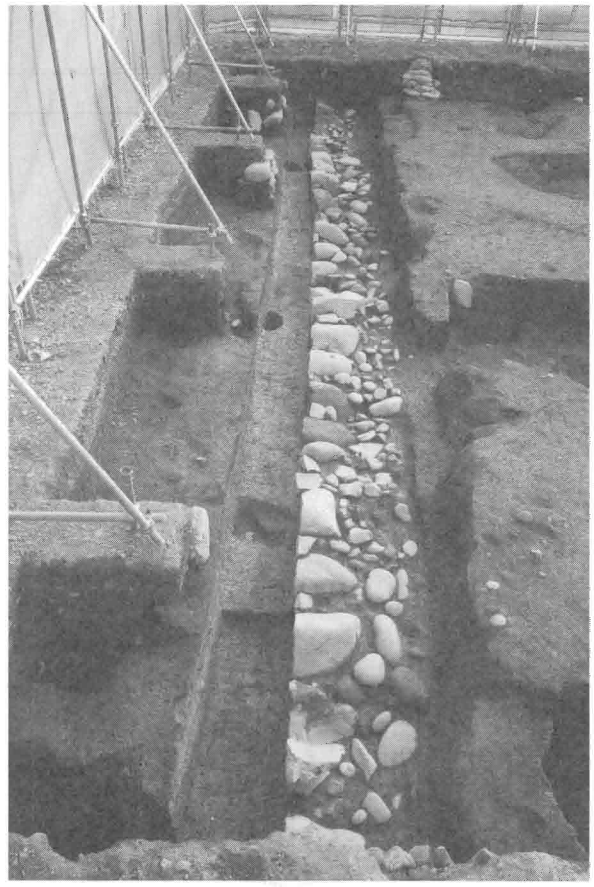


写真4　1号石垣2段目全景（北から）

写真5　1号石垣1段目全景（合成・東から）

写真6　1号石垣2段目全景（合成・東から）

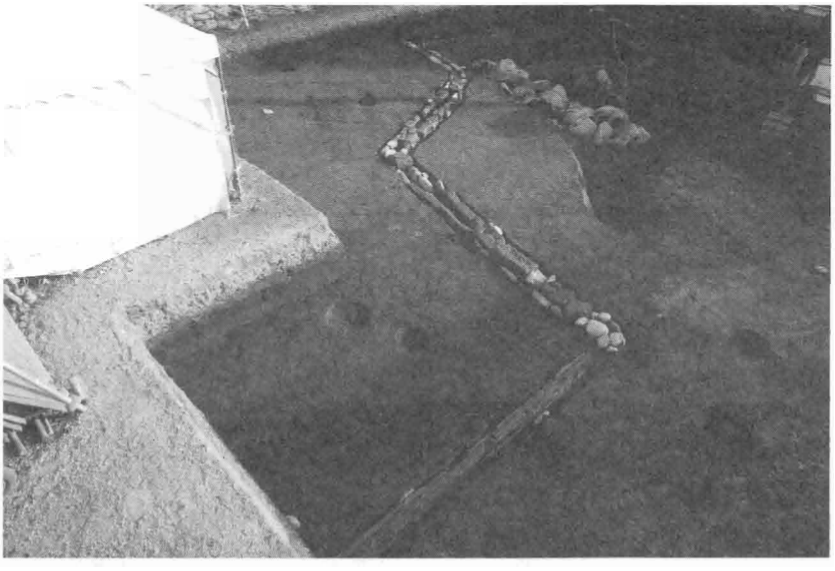


写真７　第３-１面１号石組水路全景
（南西から）

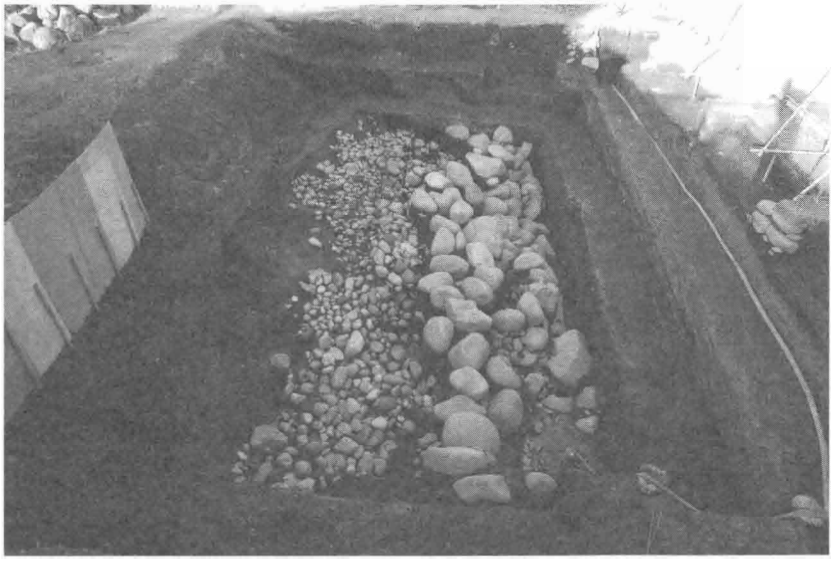


写真８　第３-２面１号堀全景
（北から）

写真９　第４-２面２号堀全景
（南西から）

横須賀市　小原台堡塁跡（おばらだいほうるいあと）

― 近代軍事施設の調査 ―

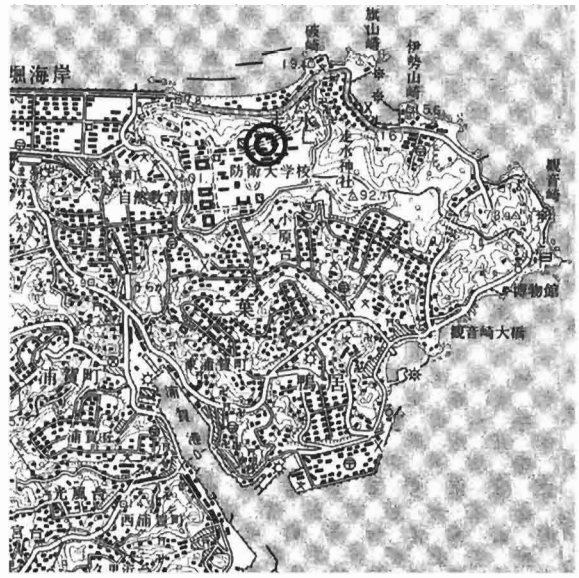
齊藤 真一（さいとう しんいち）

所 在 地　横須賀市走水１－10－20
　　防衛大学校内
調査機関　公益財団法人 かながわ考古学財団
調査担当　齊藤真一
調査原因　防衛大学校食堂棟新設に伴う発掘調査
調査期間　2011年3月16日～2012年10月15日
調査面積　7460㎡

１．遺跡の立地

小原台堡塁跡（横須賀市№477遺跡）は、神奈川県の南東部、三浦半島に所在する小原台上に築かれた明治時代の軍事施設跡である。遺跡は小原台の中央北側に位置し、縄文及び古墳、奈良・平安時代の遺跡である小原第３遺跡と重複している。小原台は三浦半島東端にあたる観音崎の丘陵から続いた標高90ｍほどの平坦面を持つ台地で、北側は東京湾内湾に面する。台地の北面は急峻な崖で、現海岸線までは350ｍほどを測る。南側は起伏に富む丘陵地形を経て、東京湾外湾に面した鴨居港、浦賀港に至る。

周辺の近代化遺産・近代遺跡に該当する軍事施設としては、東京湾内湾に猿島砲台、第１海堡、第２海堡、第３海堡（平成17年度撤去完了）、対岸の房総半島富津岬に元洲富津砲台が所在し、小原台堡塁跡から望むことが出来る。また、小原台を含む走水から観音崎にかけての沿岸には砲台群（走水低砲台、走水高砲台、三軒家砲台、観音崎砲台）が点在し、その内陸側には砲台群の背面防備を担った堡塁群（小原台堡塁から南東に花立台堡塁砲台、腰越堡塁、大浦堡塁）が所在する。



第１図　遺跡の位置（1/50,000）

小原台堡塁跡では学生舎Ｂ棟新設時に発見された堡塁関連遺構を横須賀市教育委員会が文化財調査として実施・報告しており、同Ｃ棟新設時に発見された遺構を神奈川県教育委員会が埋蔵文化財調査として実施している。

２．調査に至る経緯と調査経過

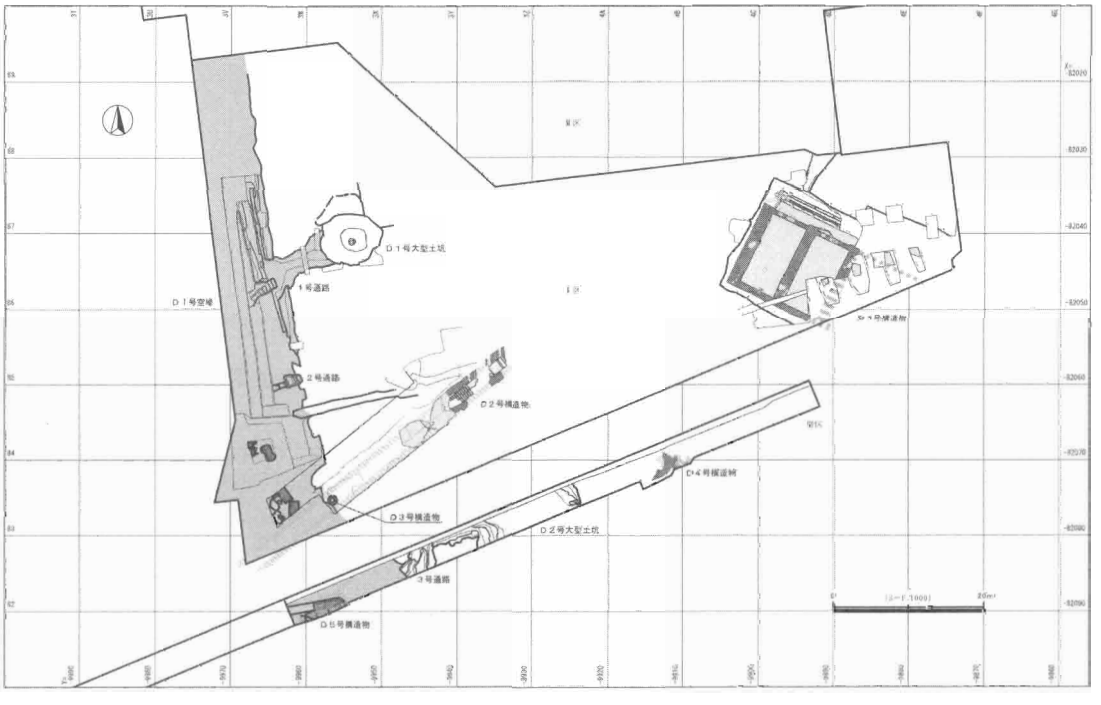
今回の調査は、防衛省南関東防衛局長・神奈川県教育委員会教育長・公益財団法人かながわ考古学財団理事長との間で締結された「防衛大学校食堂棟新設に伴う埋蔵文化財発掘調査等の実施に関する協定書」に基づいて実施したもので、調査期間は平成23年３月16日から平成24年10月15日である。

調査は本体工事計画からⅠ・Ⅱ区に分割して開始し、その後工事計画変更に伴ってⅢ区を追加した。調査ではまず堡塁関連遺構群の遺存状況と規模を確認し、各遺構の調査方法を検討した結果、調査区を更に細分することとなった。

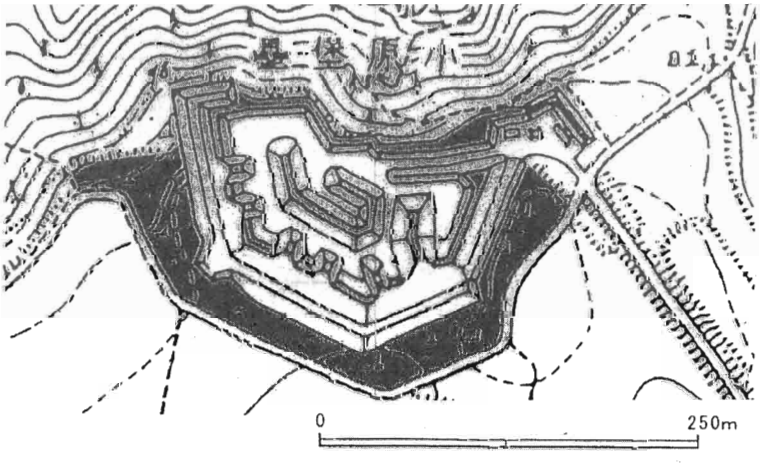
発掘調査によって発見された主な遺構は、煉瓦やコンクリートで造られた構造物６基、空壕１条、大型土坑２基などである。これらはいずれも小原台堡塁に関連する、明治時代以降の遺構と考えられる。

３．調査の概要

Ｄ１号構造物は棲息掩蔽部（せいそくえんぺいぶ）と考えられる煉瓦・コンクリート造の地下式構造物で、平面形は長方形を呈し、内側に仕切り壁を設置して小部屋を造っている。切石や土管で造られた排水施設、小部屋を繋ぐ通路などの付帯施設を持つ。構造物の壁は煉瓦を積み上げて造られており、床にはコンクリートが打設されている。本来は煉瓦壁の上にコンクリートで天井を設け、さらにその上に土塁を築いていたものと考えられるが、これらの大部分は失われていた。今回の調査では調査対象範囲内に該当する北西端から２部屋分の調査を行ったが、構造物は調査区外へとさらに続いている。本構造物の北西端から南東に 50 mほど離れた地点では神奈川県教育委員会により類似した遺構の調



第２図　近代遺構配置図

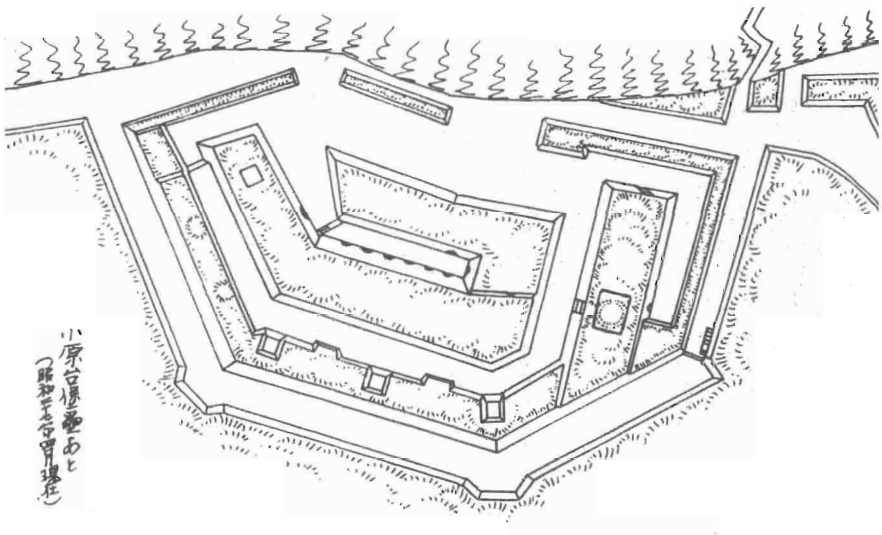


第３図　小原台堡塁（明治 36 年測量図）　2006 野内より加筆・転載

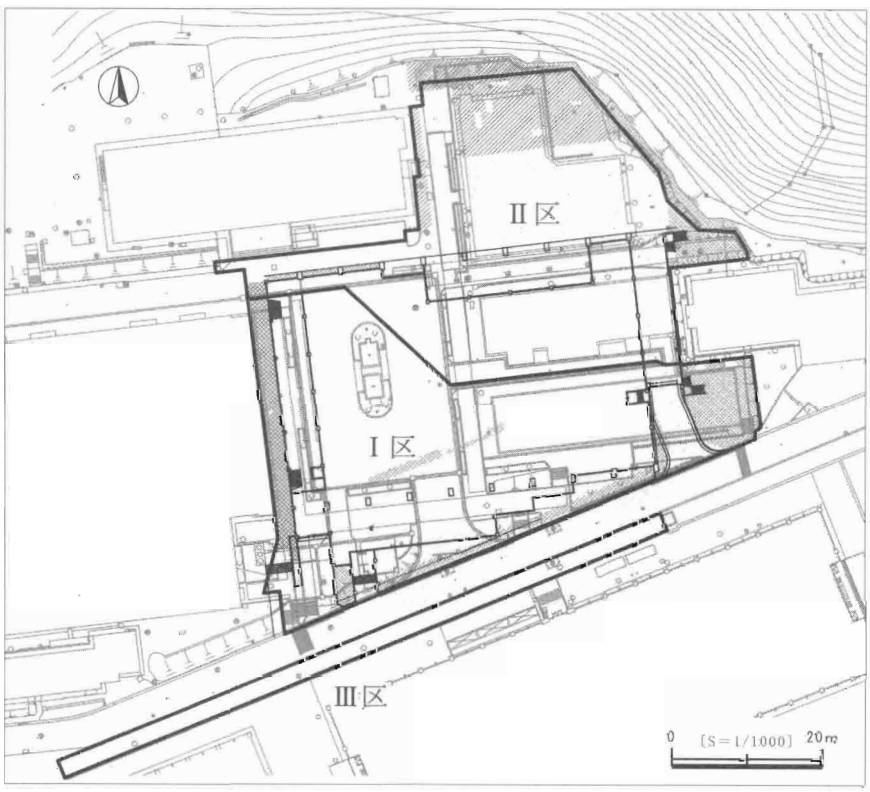
査が行われており、今回の調査成果から、当該遺構は同一構造物の南東端となることが判明した。

Ｄ２号構造物は煉瓦壁とコンクリートの天井を持つ、地下墨道と考えられる構造物である。本構造物は平坦な通路部分と階段部分からなり、最深部は地表下10ｍに達する。最下段の通路は調査区外へと続いており、Ⅲ区で検出された側防窖室（そくぼうこうしつ）と目されるＤ５号構造物へとつながるものと考えられる。

Ｄ４号構造物は砲台付属施設と考えられる構造物であり、調査ではその入口部付近が検出された。大部分が削平を受け遺存状態は不良であったが、



第４図　小原台堡塁（昭和27年スケッチ）　1955 赤星より加筆・転載



第５図　調査区配置図

煉瓦壁面の換気孔に設置した亀甲金網などが出土した。

発見した構造物の構築材である煉瓦には桜花の刻印が観察でき、現在までに５つの種類を確認している。これらの刻印が施される煉瓦はいずれも小菅集治監（東京拘置所の前身）で製造したものとされている。煉瓦にはいわゆる建築用普通煉瓦と固く焼きしめた焼過煉瓦があり、壁の用途に合わせてこれらを使い分けている状況が観察された。煉瓦の組積法は小口積みの段と長手積みの段を交互に積み上げたオランダ積み（広義のイギリス積み）となっている。

Ⅰ・Ⅱ区西端で確認した南北に延びるＤ１号空壕は、Ⅲ区で南東方向へと屈曲している。これは平面形が五角形を呈す小原台堡塁の西壕と南西コーナー部に該当するものと考えられる。調査区内では壕の東側の立ち上がりと底面の一部のみの確認に留まったため全容は不明であるが、本遺構は断面形が逆台形で、深度は遺構確認面から 4.5 m、上端幅は９m以上と推定される大規模な壕である。

Ｄ１号大型土坑は直径 10 m、深度５m以上となる大きな落ち込みである。用途は不明だが、堆積した覆土および地山の状況、接続する溝状遺構（通路：塹壕か）の関係から、地中に爆発点を持つ爆破の痕跡である可能性がある。

発見された主な遺物は鉄製品や蝋燭、被覆銅線などで、生活道具はほとんど出土していない。これらの出土状況は遺跡の性質に由来することと捉えられる。近代の遺物の他、少量であるが縄文土器の破片が出土していることから、周辺に当該時代の遺構が残されている可能性がある。

４．まとめ

小原台堡塁は大正２年の要塞除籍後、陸軍工兵と近衛師団による永久堡塁攻防演習が実施された。演習で主要構造物は爆破され、その後第２次世界大戦後の開発で、本堡塁は跡かたも無く失われたと考えられていた。しかし、今回の調査では堡塁関連施設の一部が良好に遺存することが確認でき、そこでは近代の軍事土木・建築技術、攻防演習の一端を示す状況が発見されるなど、貴重な成果を上げている。

写真１　Ｄ１号空壕（Ｉ区）　北から

写真２　Ｄ１号構造物　西室　北西から

写真３　Ｄ２号構造物　階段上部　南西から

写真4　D1号構造物　西室北壁外面　北から

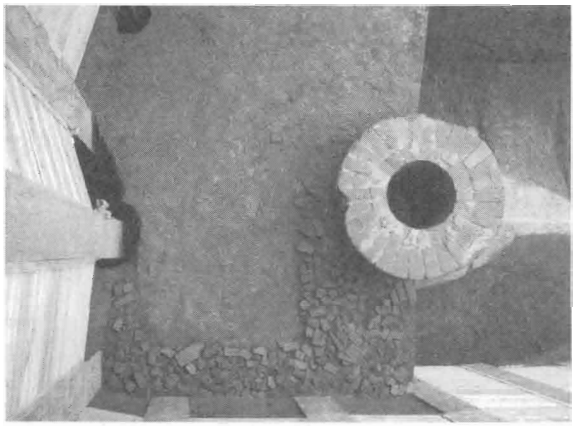


写真5　D3号構造物周辺　煉瓦剥片出土状況

写真6　D4号構造物　北から

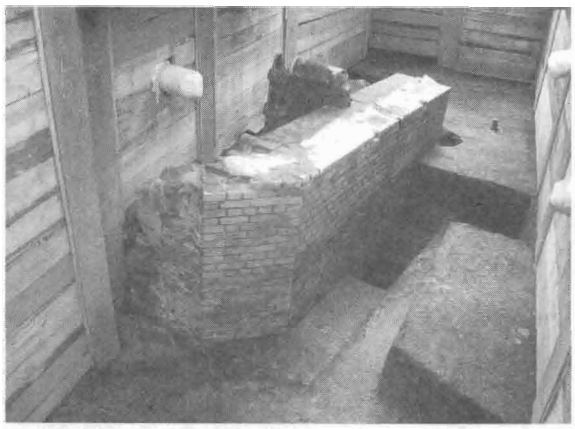


写真7　D5号構造物　東から

写真8　D1号大型土坑　土層断面　南から

参考文献

1955　赤星直忠『三浦半島城郭史（下）』横須賀市史№9　横須賀市教育委員会

1971　浄法寺朝美『日本築城史 - 近代の沿岸築城と要塞 -』原書房

2006　野内秀明「小原台堡塁跡調査報告 - 防衛大学校学生舎（A棟）新設工事に伴う近代遺跡の調査記録 -」『横須賀市文化財調査報告書』第42集　横須賀市教育委員会

〔紙上発表〕相模原市　小倉原西遺跡（おぐらはらにし）

― 相模川上流部の細石刃石器群 ―

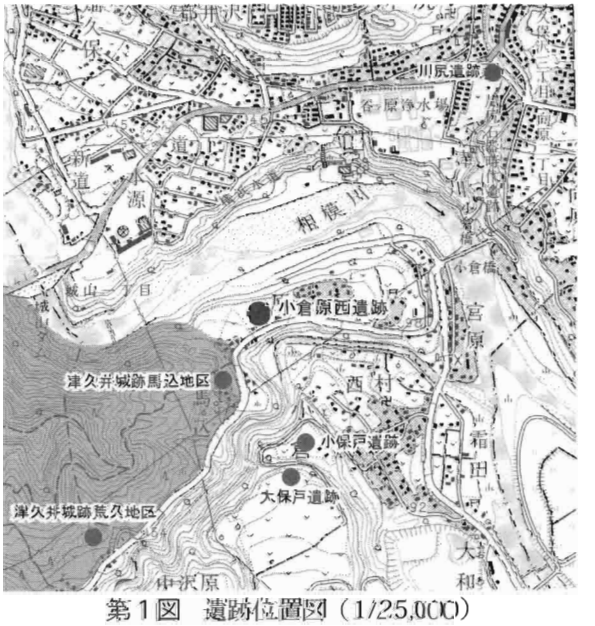
中川 真人（なかがわ まさと）

所 在 地　相模原市緑区小倉地先
調査機関　相模原市教育委員会
調査担当　中川真人・大石絵里子・関口昌和・和田伸也
調査原因　津久井広域道路建設に伴う発掘調査
調査期間　2011年7月22日～2012年3月2日
調査面積　2,643 ㎡

1．遺跡の立地

小倉原西遺跡は西に丹沢・関東山地の山々が連なり、東には広大な相模野台地が広がる地形的変換点に位置し、西に聳える城山の山裾から相模川と串川に挟まれて東に延びる舌状の河岸段丘上に立地する（第1図）。段丘は南北幅100 m程と狭く、標高は120～123 mを測る。相模野台地の陽原段丘面に対比され、相模川の離水時期（段丘形成開始時期）は約25,000年前とみられている（町田・久保2009）。現在の相模川との比高は50 mを測り、深い渓谷状を呈するが、ローム層の堆積（段丘化）以前の陽原段丘礫層は現地表下3.5 m、ローム層上面からだと1.7 mと浅い位置に堆積しており、現在見る景観と旧石器時代の景観とは相当に異なっていたことがわかる。

段丘礫層直上ないしは砂質ローム層を挟んだ上層には、富士山の火山イベントの一つを示す富士相模川泥流堆積物が10～20cm程堆積している。泥流は約22,000年前に富士山が岩なだれを起こし、桂川から相模川の谷を時速数10km以上の高速で流れ込んで相模川の下流まで達したとみられている（町田2009）。本流における泥流層の場合、富士山周



第1図　遺跡位置図（1/25,000）

辺から押し流された大きな角礫玄武岩を含むものであるが、本遺跡調査地点には砂状の細粒スコリアが固結した層相を呈していることから、泥流発生時は河床ではなく、既に離水した河原ないしは離地化した地表にのりあげた堆積物であるとみられる（町田2009）。泥流堆積物は間層を挟んで2層見られる箇所もあり、短期間に複数回にわたって発生していたことがわかる。

本遺跡周辺の旧石器時代の遺跡については、近年発掘調査事例が増加している。本遺跡の南西に近接する高位の相模原段丘面相当において、B 4相当層（相模野編年第Ⅱ期）から石斧製作を含んだ環状ブロック群が発見された津久井城跡馬込地区が位置する。B 0相当層（第Ⅴ期後半）からは信州系、伊豆・箱根系、神津島系の混在した黒曜石産地組成を示す細石刃石器群が見つかっている。串川対岸にはB 1層下部（第Ⅳ期前半）で環状を呈する礫群が発見された小保戸遺跡や大保戸遺跡が分布する。相模

川対岸の川尻遺跡では、６枚の文化層が認められており、Ｂ２Ｕ層下部（第Ⅲ期）からは磨石の一括出土（キャッシュ）が発見されている。

２．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査地点は、相模原市が整備を進める津久井広域道路と国が進めるさがみ縦貫道路が交差する事業箇所に位置する。事前の試掘調査を、神奈川県と相模原市の両教育委員会が同時に開始した。相模原市教育委員会での試掘調査は平成22年７月５日～８日にかけて実施し、津久井広域道路については翌23年度に本調査することとなった。

発掘調査は東西に伸びる調査区を西側のⅠ区と東側のⅡ区の二つに分け、西側のⅡ区から調査を開始した。Ⅱ区では縄文時代早期～前期の良好な遺物包含層と集石土坑、陥穴状土坑等を調査した後、旧石器時代の調査を開始した。石器集中部がⅡ区の東西両端で２箇所発見され、逐次調査区の拡張を進めながら調査を実施した。また、Ｂ１層下位からは富士相模川泥流堆積物と段丘礫層の堆積を確認した。

Ⅱ区の調査終了後、Ⅰ区の調査に移行した。Ⅰ区からは近世の陥穴状土坑、古墳時代終末～奈良時代初頭の竪穴住居址、平安時代の土坑、縄文時代後期～晩期の遺物包含層と掘立柱建物跡のほか、群集する陥穴状土坑が発見された。ローム層上面までの調査が終了した後、旧石器時代の調査を実施したが、石器の出土は認められなかった。

なお、さがみ縦貫道路については、平成22年度からかながわ考古学財団によって調査が行われ、本発表要旨に報告されている。Ⅱ区の調査区では隣接して調査を実施している。いずれにしても、同一遺跡を２つの調査組織が調査を行っており、それぞれの調査状況を確認しながら調査を進めた。現在進行中の出土品整理作業及び報告書作成に向けても、情報の共有化、調査成果の意見交換が必要である。

３．調査概要

調査の結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代終末～奈良時代初頭、平安時代、近世と各時代の遺構・遺物が発見されたが、ここでは旧石器時代の調査成果に触れ、本発表要旨に掲載されているかながわ考古学財団の調査成果と合わせて、小倉原西遺跡の旧石器時代の全体概要としたい。

相模原市教育委員会の調査範囲からは、Ⅱ区の東西両端から計２箇所の石器集中部（ブロック）が発見された（第２図）。いずれも、舌状台地の北側、相模川に面する段丘面縁辺部に分布し、出土層位はＢ０層中部～上部とみられる。東の１号ブロックと西の２号ブロックは、同一層順であることから第Ⅰ文化層と捉えられるが、ブロック間の距離は約60ｍ離れている。出土した石器総数は46点と少ないが、道具としての石器の占める割合が高いのが特徴的である。以下に各ブロックの内容について説明する。

１号ブロック

ブロックの規模は径４ｍ程の範囲から35点出土している（第３図）。その内訳は、細石刃核１点、削器12点、二次加工のある剥片２点、微細剥離痕のある剥片４点、礫器１点、敲石１点、剥片14点で、削器を主体とした石器群ある。石材は硬質細粒凝灰岩を主体にチャート、ホルンフェルスが組成するほか、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩が単独で伴う。石器の分布は、ブロック中央の２ｍの範囲内に削器が集中しており、サークル状に展開しているようにも見える。削器２点が近接して出土している状況が３箇所（計６点）で見られるのも特徴的である。ブロック外縁側には敲石、礫器といった大形の礫石器や細石刃核が分布している。

細石刃核は硬質細粒凝灰岩製で、大形の剥片を分割・粗い剥離調整によって石核原形を作り出したものと思われる。打面は単剥離打面で、全体的には舟底形を呈することから、「船野型」の細石刃核に分類される。細石刃剥離作業面は、長さ4.2cm、幅1.5cmを測り、長身の細石刃剥離痕が４～５枚留め

ているが、細石刃や同一母岩の剥片等の出土は認められなかった。

削器は１号ブロックを特徴付けている石器である。第４図２段目左の１点は、黒色頁岩製の分厚な石刃状の縦長剥片を素材とし、全周を剥離調整して柳葉形に仕上げられていることから、当初は尖頭器として分類していたが、二次加工が尖頭器にみられる平坦剥離ではなく、急斜度の鋸歯縁状を呈すること、相模野台地の細石刃石器群の石器組成に、尖頭状の削器が特徴的に伴うこと（堤 1991）などから、削器としてここでは分類した。石材は凝灰岩、珪質頁岩、チャート、ホルンフェルスといった在地系の石材が利用されているが、いずれも母岩を共有するものではないようである。

２号ブロック

ブロックの規模は２～３ｍの範囲から 11 点の石器が出土している。その内訳は、礫器３点、剥片８点という単純な組成の上、剥片７点は同一母岩で節理面での割れが多く、原石形状に接合される資料である。ほか１点は礫片の可能性もある。したがって、３点の礫器に接合する剥片や、同一母岩の剥片は認められない。礫器は相模川で採取可能な細粒凝灰岩２点（写真左・中央）、粗粒凝灰岩１点（写真右）の亜角礫を素材としており、長さ 14cm 前後の類似した大きさで、重量は 1,305 ｇ、1,029 ｇ、1,155 ｇといずれも１kg 以上を量る。粗い剥離調整で片歯の刃部を作出したもので、写真中央の礫器の刃部は、鋸歯縁状を呈する。

４．まとめ

相模原市教育委員会の調査区で発見された旧石器時代の石器群は、出土層位と石器組成、そして硬質細粒凝灰岩製の「船野型」細石刃核が伴うことから、相模野第Ⅴ期後半（鈴木・矢島 1988）、段階Ⅹ（諏訪間 1988）に位置づけられる。「船野型」細石刃核は相模原市下溝上谷開戸遺跡、大和市上草柳第１地点、同下鶴間長堀遺跡などが主な出土遺跡で、稜柱状の「野岳・休場型」細石刃核を共伴するのが通例である。相模野台地の細石刃石器群の変遷では、「野岳・休場型」のみで構成される第１段階と縄文時代草創期に至る削片系細石刃核を構成する第３段階との中間に位置づけられる（堤 1987）。

各ブロックでは道具としての狭義の「石器」の出土率が高く、削器を主体とした１号ブロックでは 60％を占める。石器製作の残滓資料である剥片が少なく、砕片については発見することができなかった。これらの石器は在地系の石材を主としているが、単独母岩による遺跡外からの搬入品がほとんどで、ブロック内における石器製作の痕跡が極めて希薄である。２号ブロックについても、狭い範囲から礫器３点と破砕した一つの母岩が認められたのみである。これらブロックの形成要因が、一般的にみられる石器製作 - 廃棄の構造ではなく、道具として搬入された石器の使用 - 遺棄の構造によるものであることが示唆される。

今後は各石器の使用痕の観察データの積み上げと石器分布との関係、他遺跡における類似ブロックとの比較、細石刃石器群の類型化などから、ブロックの形成過程に係る「場」の機能と遺跡間変異についての検討が求められる。

【引用・参考文献】

鈴木次郎・矢島國雄　1988 年「先土器時代の石器群とその編年」『新版 日本考古学を学ぶ（１）』, 有斐閣

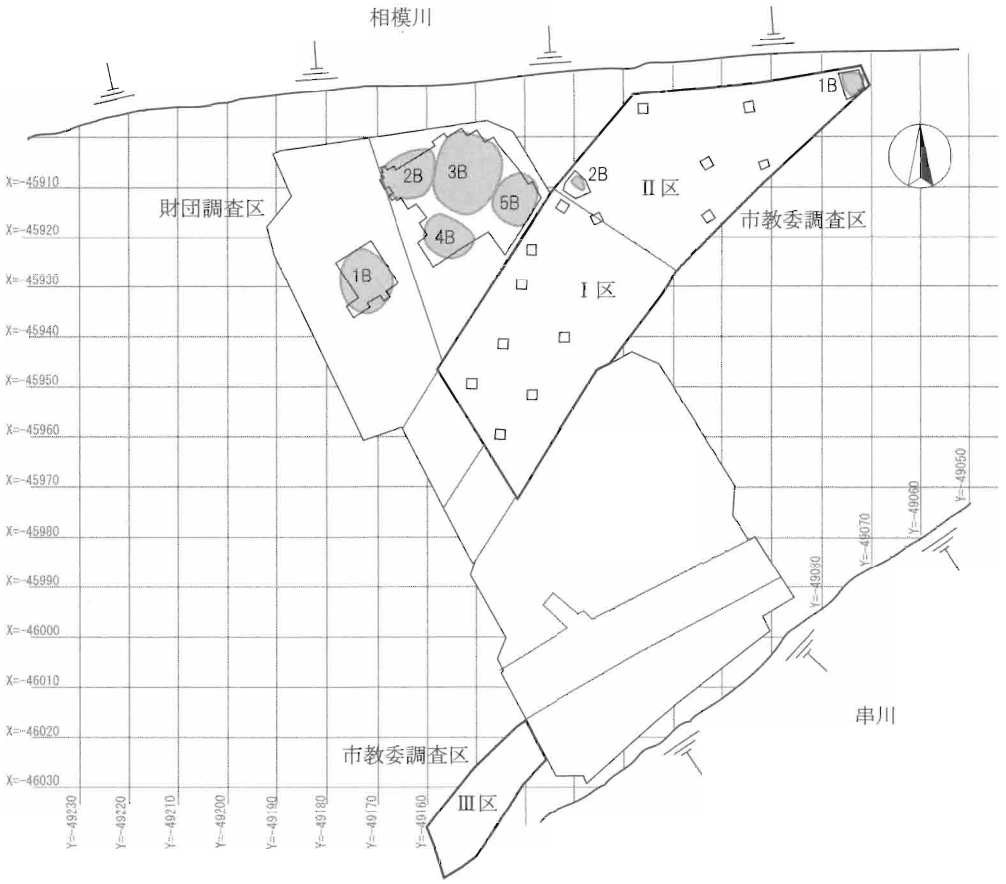
諏訪間 順　1988 年「相模野台地における石器群の変遷」『神奈川考古』第 24 号, 神奈川考古同人会

堤　隆　1987 年「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』第 13 号, 大和市

堤　隆　1991 年「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第 17 号, 大和市

町田　洋・久保純子　2009 年「相模川がつくった段丘の地形と地質」『相模原市史 自然編』, 相模原市

町田　洋　2009 年「富士・箱根火山の活動と相模原」, 『相模原市史 自然編』, 相模原市



第2図　調査区及びブロック分布図（S=1/1,500）

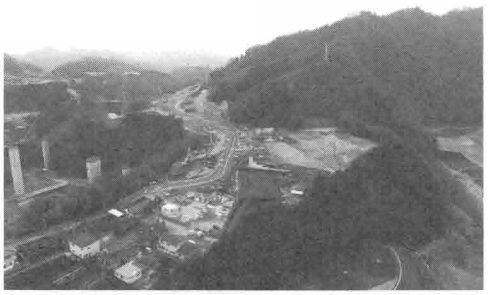


写真1　遺跡遠景（左：串川，右：相模川，右上：城山）

写真2　1号ブロック

写真3　土層堆積（礫層・泥流層・ローム層）

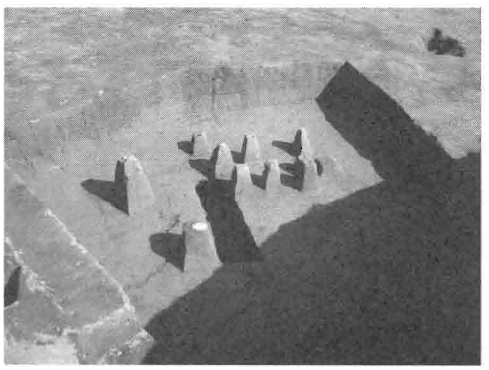
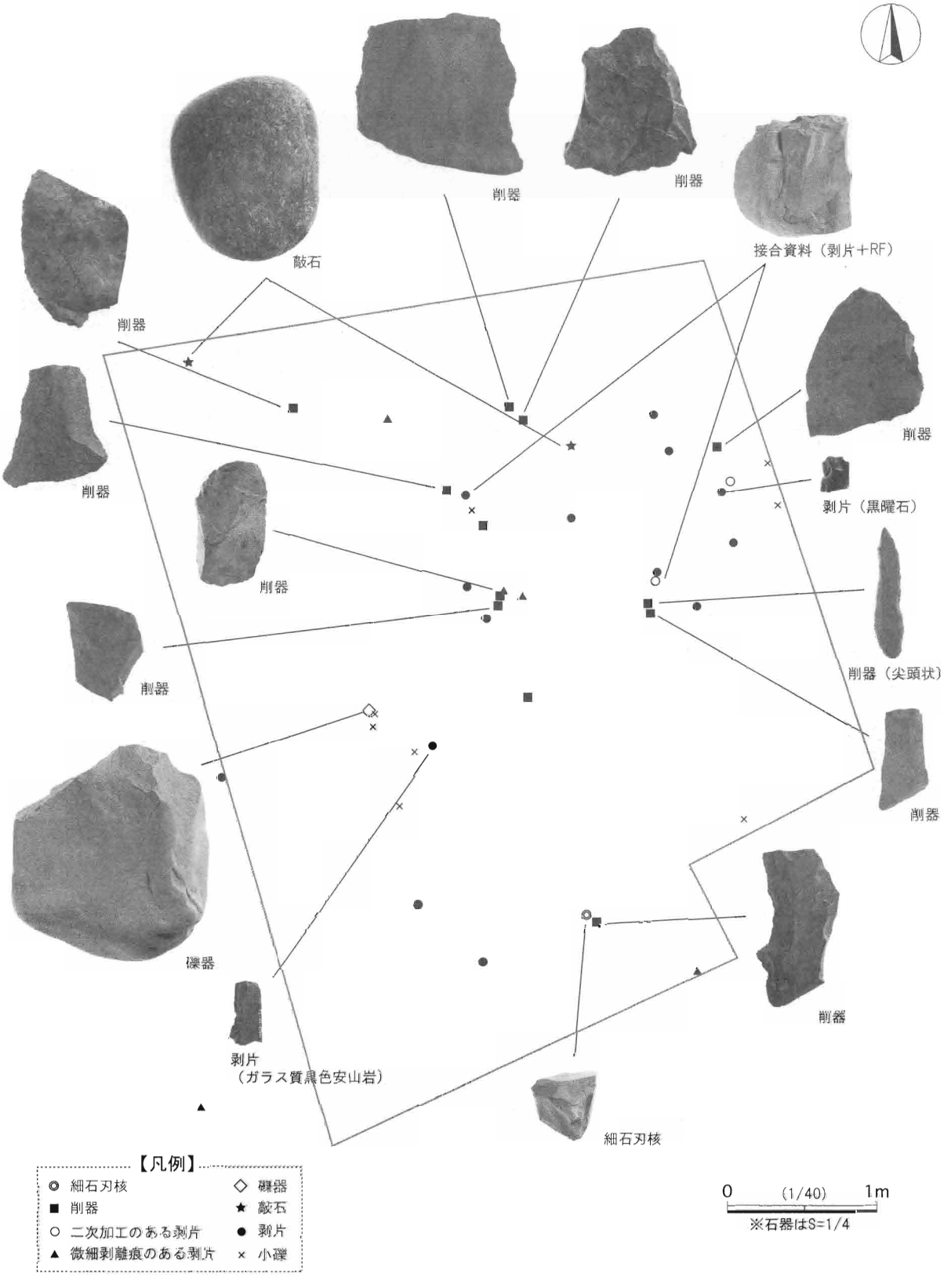
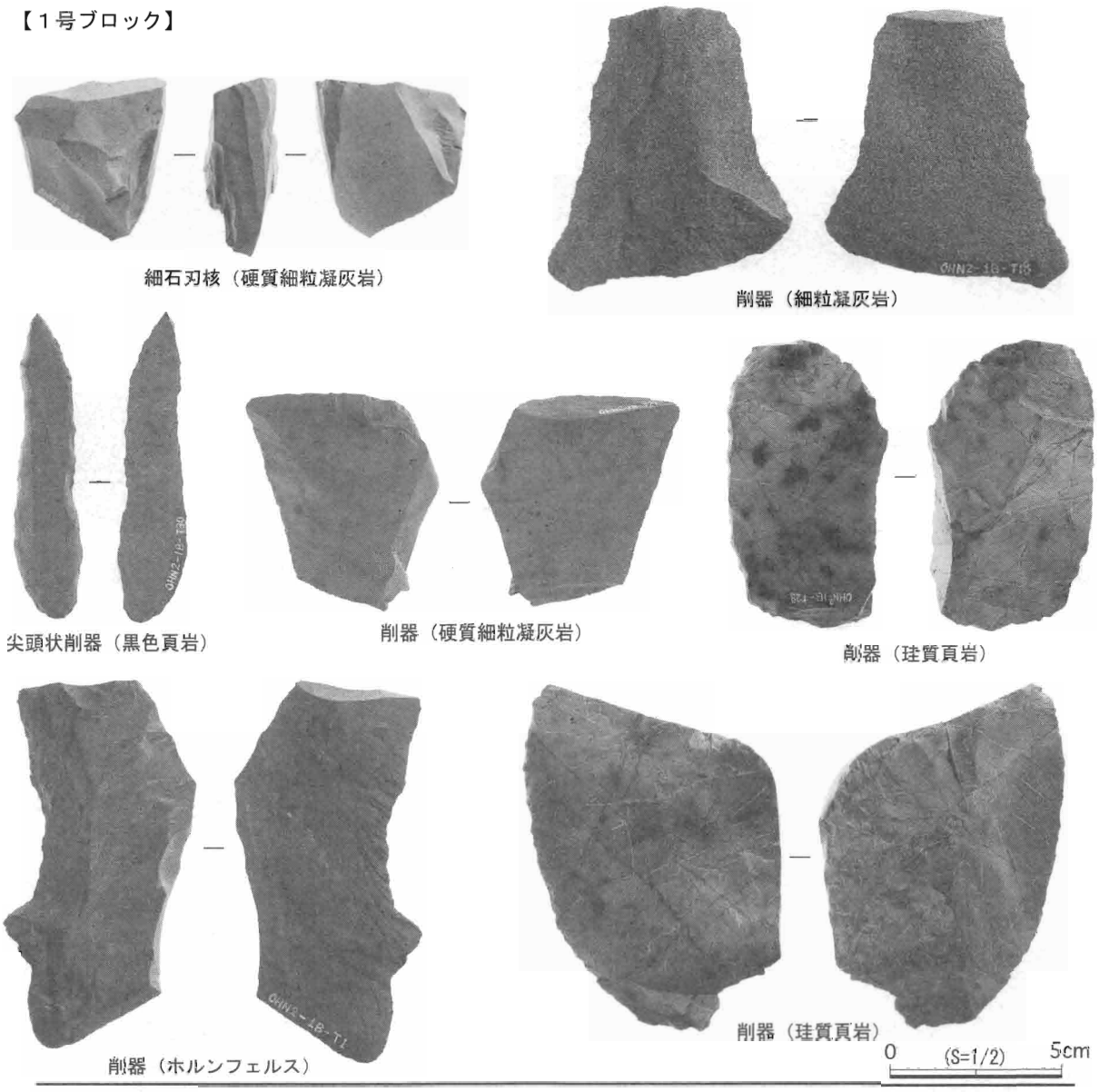


写真4　2号ブロック

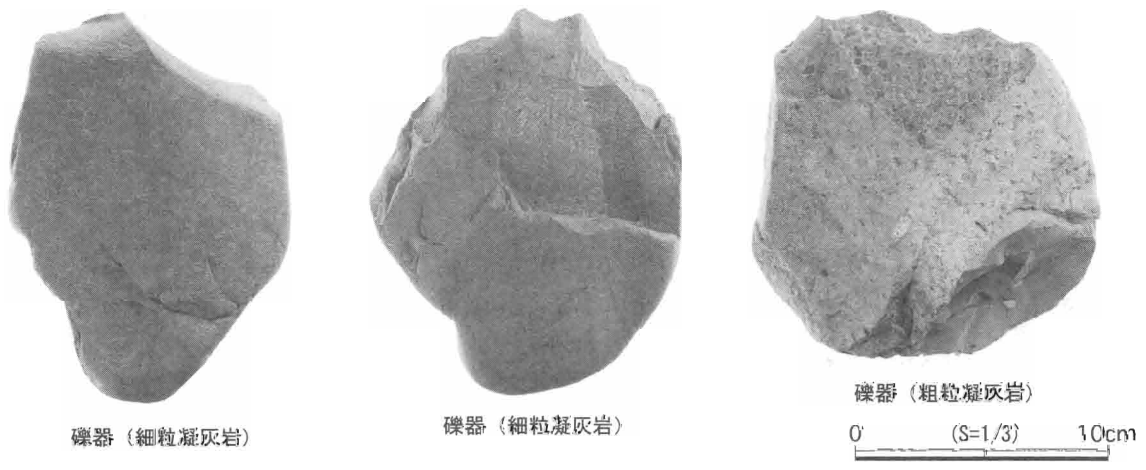


第3図　1号ブロック器種別分布図

【1号ブロック】



【2号ブロック】



第4図　第Ⅰ文化層（BO層）の出土石器

〔紙上発表〕 川崎市　上麻生日光台遺跡 第Ⅳ地区

― 縄文時代中期の環状集落の一部と古代の大型特殊遺構の調査 ―

浅賀 貴広

所 在 地　川崎市麻生区上麻生五丁目 1349 － 1
調査機関　株式会社 盤古堂
調査担当　浅賀貴広
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2011 年 7 月 15 日～ 2011 年 9 月 5 日
調査面積　687.44 ㎡

1．遺跡の立地

本遺跡は小田急線柿生駅の北約 500 m、新百合ヶ丘駅の南西約 1250 mに位置する。本遺跡は多摩丘陵上に立地し、遺跡の西側は低地となり、鶴見川の支流である麻生川が南流する。遺跡が立地する丘陵部と低地との比高差は約 18 mを測る。

2．調査に至る経緯と調査経過

本調査は共同住宅建設に伴う事前調査である。建築計画は斜面地を含んでいるが、川崎市教育委員会の試掘調査結果により丘陵上の平坦面が調査対象となった。

3．調査の概要

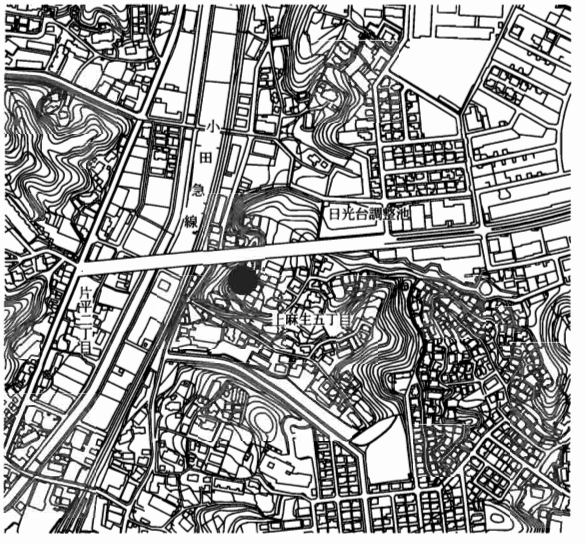
（1）縄文時代

縄文時代の遺構は縄文時代中期の竪穴住居址 16 軒を調査した。大半の竪穴住居址は勝坂式期である。第 1 ・ 2 ・ 7 ・ 11 ・ 17 ・ 18 号竪穴住居址は埋甕炉である。また川崎市内では珍しい五領ヶ台式期の竪穴住居址も検出した。

（2）古代

古代の遺構は竪穴住居址と特殊遺構とした大型の土坑を調査した。竪穴住居址は二本柱で横長の形態のもので、 7 世紀後半のものである。

特殊遺構は円形で上端径約 6 m、確認面から



第 1 図　遺跡の位置（1 / 10,000）

の底面までの深さが約 3 mを測る大型のものである。確認面から約 30 ㎝下の壁面にピットが巡っており、上屋に伴うものであると考えられる。安全面から全体の掘削は確認面から 2 mまで行い、中央部にトレンチを入れて底面を確認した。底面中央には径約 65 ㎝、深さ約 22 ㎝の円形の掘り込みが掘られていることを確認した。覆土などからは滞水していたとは考えられない。以上の特徴から日本各地で調査され、氷室址と推定されている遺構との類似点が多いが、性格は特定できない。

4．まとめ

本遺跡は過去に縄文時代中期の環状集落と奈良・平安時代の大型の掘立柱建物址群が調査されており、注目されてきた遺跡である。本調査ではその続きの調査となり、縄文時代中期の集落跡の続きを確認した。

特殊遺構は氷室とも井戸とも考えられるが、類例の少ないこともあり、その性格は特定できない。

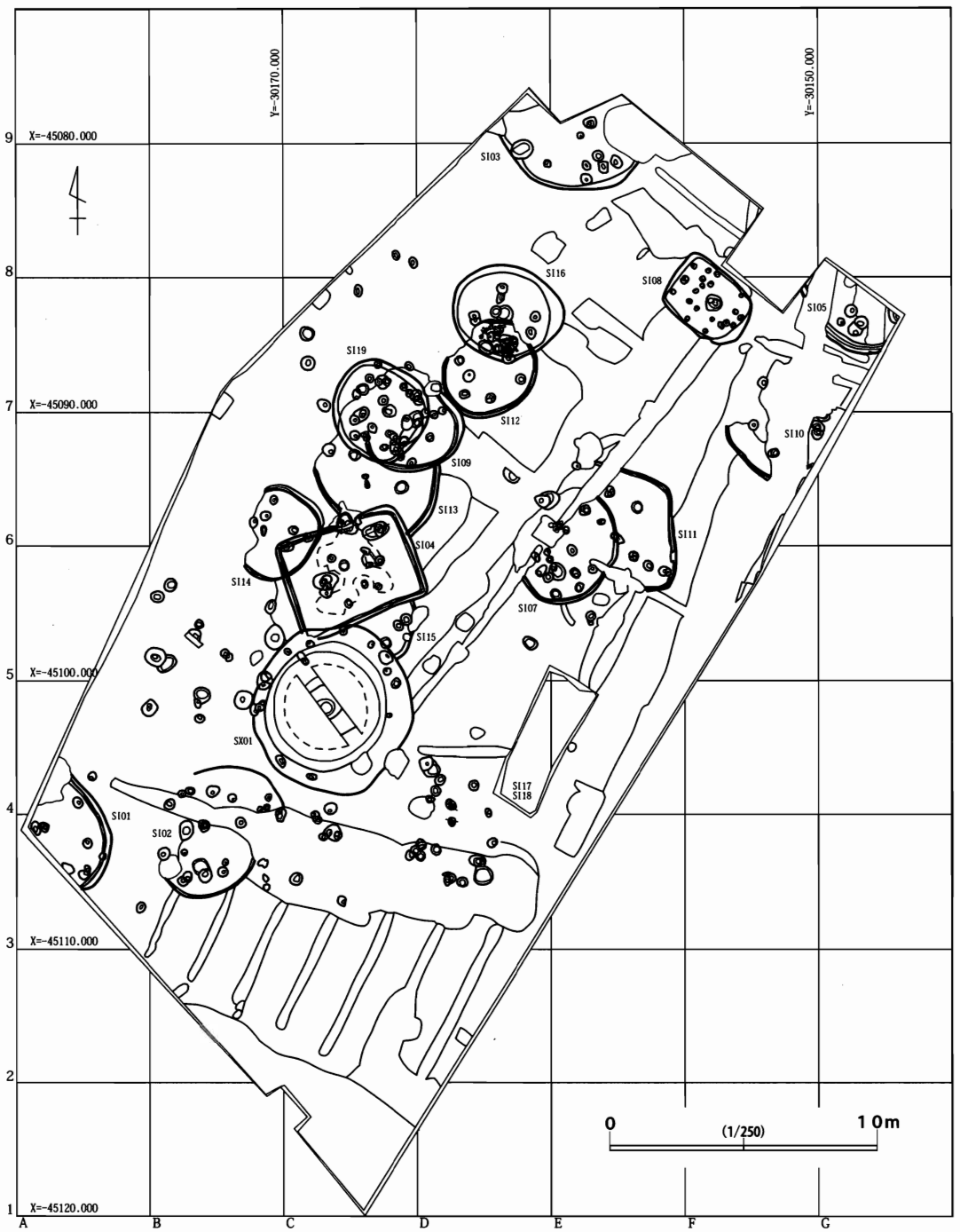
本地区では竪穴住居址が構築されていないことから居住域とは異なった土地利用をしていた場であると考えられ、日光台遺跡の性格を考える上で参考となる遺構である。

参考文献

宮重俊一・渡辺　務　2007『川崎市麻生区上麻生日光台遺跡』　麻生区役所建設センター・日本窯業史研究所

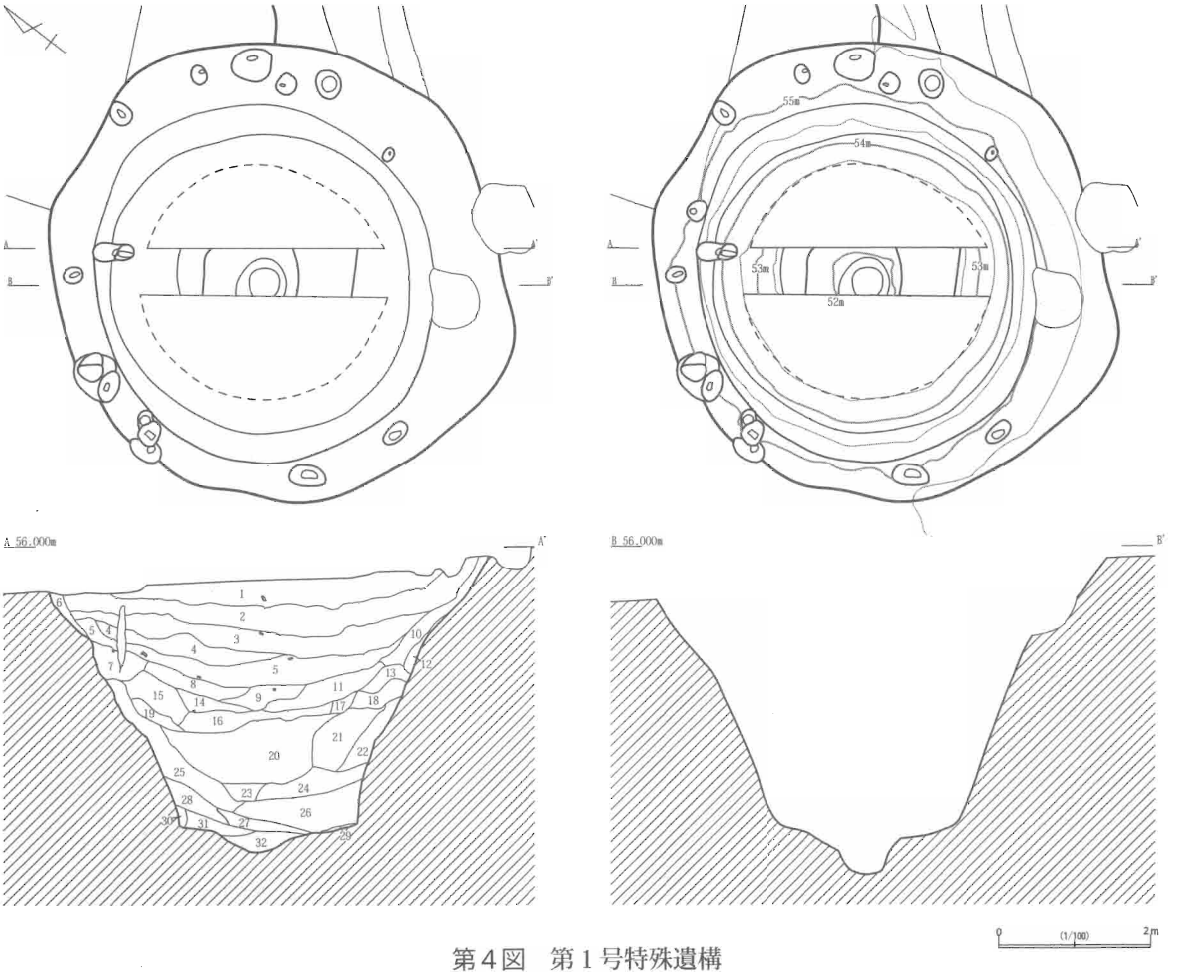
北平朗久ほか　2007『上麻生日光台遺跡　第Ⅱ地区発掘調査報告書』　玉川文化財研究所

中山　豊ほか　2007『上麻生日光台遺跡　第Ⅲ地区発掘調査報告書』　玉川文化財研究所



第2図　遺構配置図

第３図　周辺の調査



第４図　第１号特殊遺構

写真１　全景写真（真上から）

写真２　俯瞰写真（西から）

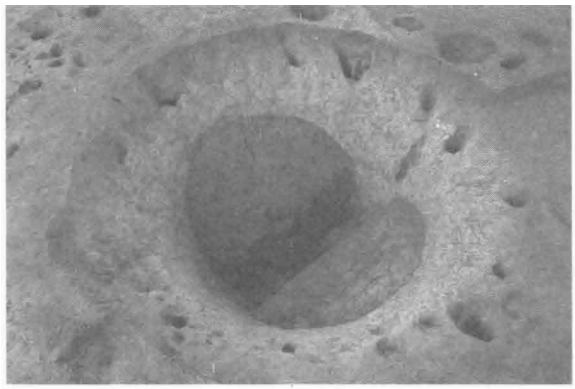


写真３　第１号特殊遺構（北東から）

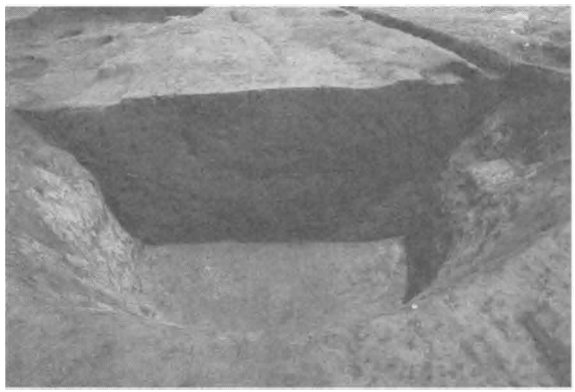


写真４　第１号特殊遺構 断面（南西から）

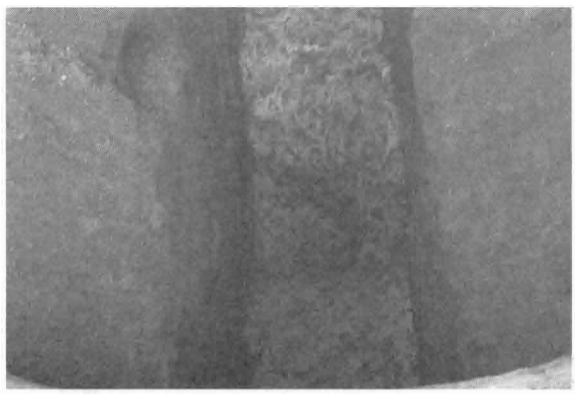


写真５　第１号特殊遺構 底面（南東から）

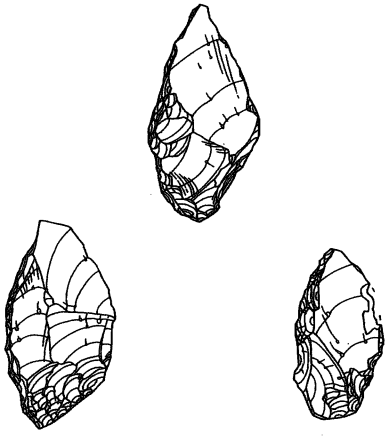
表　紙：伊勢原市　上粕谷・石倉中遺跡
調査区東側完掘状況（近世以降）
裏表紙：相模原市　小倉原西遺跡
1号石器集中出土 ナイフ形石器

第36回　神奈川県遺跡調査・研究発表会
発表会担当役員　◎橋口 豊・栗田一生・鯉渕義紀・山田光洋

第36回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

編　集　第36回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表会担当

発　行　神奈川県考古学会

発行日　2012年（平成24年）11月17日

印　刷　有限会社ファースト　　TEL.　044‐245‐2157